東京医科歯科大学大学院
保健衛生学研究科年報

2017年度

2019年3月

は　し　が　き

保健衛生学研究科は転機の只中にあります。

創設当時より、看護学と検査学の両専攻は、研究者・実践者・教育者育成を目指して、大学院教育に邁進してまいりました。四半世紀の時の流れの中では、社会の変化と同様に研究科も様変わりしたところが多分にあります。留学生や社会人など多様な背景を持つ学生も増え、卒業生・修了生が教員として戻り、研究科内はいろいろな意味でにぎわいと活気が出て参りました。同じ研究科ではありますが、それぞれ専門領域の特徴により力を入れる点が異なり、教育研究の専門性の広がり、焦点化もそれぞれの専攻で異なった様相を示すようになりました。

グローバル化の波と大学の独自性･自律性の重視により、東京医科歯科大学全学の変革が求められているなか、医歯学総合研究科は、多様な人材を育成するコースを取り入れるよう改組に取り組んでおり、生体検査学専攻は、医歯学総合研究科に教育研究の場を移すこととなりました。長年慣れ親しんだ「検査学」の専攻名は保健衛生学研究科からなくなります。医歯学総合研究科では、「医歯理工保健学専攻」「生命理工医療科学専攻」と新たな専攻名となります。

看護先進科学専攻と共同災害看護学専攻は、5 年一貫制博士課程に改組し、次年度に完成年度を迎えることになります。大学院教育における 5 年間の一貫した教育として新たな取り組みでしたが、教育･指導の内容は毎年一段ずつ作り、積み上げていくものでした。看護先進科学専攻は、完成年度を迎える前に、修士号の授与、3 年次編入学の仕組みを加えることができ、また、Qualifying Examination や複数指導体制をとることで、段階を追って、そしてきめ細やかな教育となるような体制をとるようになりました。共同災害看護学専攻は、グローバルに活躍する専門家や実践家からの講義、国際学会等での活動や研究発表、被災地での支援体験などを他大学の学生と学びを共にすることができました。

保健衛生学研究科が変化している中、各分野の教員や学生は、それぞれの専門とする領域での活動を続け、その足跡を残しております。それをまとめたものが、「保健衛生学研究科年報」です。本年報の内容が、保健医療の研究・実践・教育の発展のための資料として活用されることを願っています。

終わりに、本年報の発刊に多大な努力を払われました関係事務職員の方々に、深く感謝申し上げます。

2019 年 3 月

東京医科歯科大学大学院

保健衛生学研究科長　本田彰子

目　　次

Ⅰ．機構図 …… 1

Ⅱ．各教育研究分野における教育・研究

看護先進科学専攻

基盤看護開発学講座

看護ケア技術開発学域

看護ケア技術開発学分野 …… 3

ヘルスプロモーション看護学域

地域保健看護学分野 …… 7

地域健康増進看護学分野 …… 11

臨床看護開発学講座

先端侵襲緩和ケア看護学域

先端侵襲緩和ケア看護学分野 …… 13

精神・人間発達看護学域

精神保健看護学分野 …… 16

小児・家族発達看護学分野 …… 21

リプロダクティブヘルス看護学分野 …… 25

在宅がんエンドオブライフケア看護学域

在宅ケア看護学分野 …… 29

がんエンドオブライフケア看護学分野 …… 32

先導的看護システム開発学講座

国際的看護システム開発学域

国際看護開発学分野 …… 35

看護システムマネジメント学分野 …… 37

高齢社会看護ケア開発学域

高齢社会看護ケア開発学分野 …… 40

共同災害看護学専攻 …… 45

生体検査科学専攻

生命情報解析開発学講座

分子生命情報解析学分野 …… 50

形態・生体情報解析学分野 …… 53

生命機能情報解析学分野 …… 56

生体機能支援システム学分野 …… 62

分子・遺伝子応用検査学講座

先端分析検査学分野 …… 65

生体防御検査学分野 …… 70

分子病態検査学分野 …… 74
先端血液検査学分野 …… 78
Ⅲ．2017年度保健衛生学科学士課程卒業論文題目一覧表 …… 83
Ⅳ．2017年度大学院保健衛生学研究科博士（前期・後期）課程学位論文題目一覧表 …… 88
Ⅴ．委員会委員名簿 …… 91
Ⅵ．教育研修会，公開講座，セミナー等 …… 93
Ⅶ．就職状況一覧表（2018年３月卒業・修了者） …… 95

Ⅰ．機　構　図

東京医科歯科大学大学院機構図（2017年4月1日）

- 大学院
  - 医歯学総合研究科――《省 略》
  - 保健衛生学研究科
    - 看護先進科学専攻博士課程
      - 基盤看護開発学講座
        - 看護ケア技術開発学域――看護ケア技術開発学分野
        - ヘルスプロモーション看護学域
          - 地域保健看護学分野
          - 地域健康増進看護学分野
      - 臨床看護開発学講座
        - 先端侵襲緩和ケア看護学域――先端侵襲緩和ケア看護学分野
        - 精神・人間発達看護学域
          - 精神保健看護学分野
          - 小児・家族発達看護学分野
          - リプロダクティブヘルス看護学分野
        - 在宅がんエンドオブライフケア看護学域
          - 在宅ケア看護学分野
          - がんエンドオブラフケア看護学分野
      - 先導的看護システム開発学講座
        - 国際的看護システム開発学域
          - 国際看護開発学分野
          - 看護システムマネジメント学分野
        - 高齢社会看護ケア開発学域――高齢社会看護ケア開発学分野
    - 共同災害看護学専攻博士課程
    - 生体検査科学専攻博士(前期・後期)課程
      - 生命情報解析開発学講座
        - 分子生命情報解析学分野
        - 形態・生体情報解析学分野
        - 生命機能情報解析学分野
        - 生体機能支援システム学分野
      - 分子・遺伝子応用検査学講座
        - 先端分析検査学分野
        - 生体防御検査学分野
        - 分子病態検査学分野
        - 先端血液検査学分野
        - 先端生体分子分析学分野 ＊

＊印は教育研究協力分野

Ⅱ.各教育研究分野における教育・研究

看護ケア技術開発学

Innovation in Fundamental and Scientific Nursing Care

教　　授　　齋藤やよい (2017.09.30 まで)
助　　教　　大黒理惠，大河原知嘉子
大学院生（博士後期）西村礼子 (2017.03.31 まで)，前田耕助
（５年一貫博士課程）樺島稔

(１)　分野概要

看護ケア技術は看護専門職者が習得した有形・無形の技であり、対象の全人的なアセスメントに基づいて個々に提供されます。ケア技術にはすでに科学的効果が検証され、社会に広く還元されたものもあれば、看護実践の暗黙知として言語化されないまま受け継がれていたものもあります。また、患者さんのセルフケア能力の不足を補うケアもあれば、人々の積極的な快適性を求める QOL を高めるためのケアもあります。

私たちは、このように多様化した看護ケア技術の効果を、学際的な研究方法を通して科学的に検証します。また、不足を補うだけではなく、人が本来もっている生体機能や生活機能を最大限に発揮するための新たな看護ケア技術の開発を目指します。さらに、看護ケア技術の教育や看護師の教育力の育成にも取り組んでいます。

(２)　研究活動

１）看護技術の科学的検証

日常生活援助技術（食事，排泄，清潔，睡眠，運動）の効果を心拍変動，脳血流量，眼球運動分析などの心理的，生理的反応から検証し，その成果をエビデンスとする看護技術の開発に取り組んでいる。また，発話による口腔機能への影響について，客観的機能評価と発語分析によって検討し，救命救急場面で用いる胸骨圧迫の技術と効果を左右する影響要因との関係を学際的方法により検証している。

２）エキスパートナースの臨床判断能力

看護情報がどのように記憶・再生され，どのように活用されるのかを，色表現，看護活動用語の使用に関する実態調査と思考プロセスの分析により検討している。また，エキスパートナースが保有する技能と危険予知力について，病床環境づくりや処方箋確認などの場面を設定し，アイカメラによる看護師の観察・判断の視点，それに基づく危険予知行動の過程を視線計測及び思考過程から検討している。

３）現任教育の課題と教育力育成

看護教育に関する研究では，プリセプターシップやメンターシップ，現任教育の効果と課題を質的に分析し，現任教育の課題と新たな教育計画を検討している。また，看護師がもつ教育力の特徴をテキストマイニングにより分析し，看護実践力との関係や教育力育成のための課題と具体的方法について検討している。

４）看護学研究法としての眼球運動解析

これまで本分野で行ってきたアイカメラを用いた研究成果をまとめ，他領域とは異なる看護学研究での活用の視点を明らかにし，眼球運動解析の注視点や注視時間，周辺視野の定義を検討することにより，新たな看護学研究法としての眼球運動解析法について検討している。

(3)　教育活動

学部教育では、1年生と2年生を対象に基礎看護学を担当している。看護学の基盤となる理論、専門職業人としての態度、看護学に共通した援助技術修得に必要な知識、技能を教授する。また4年生には、当分野での卒業研究を選択した学生を対象に、講義、ゼミ形式、個別指導など多彩な教育方略を用いて学生の指導に当たっている。

大学院教育では、院生の主体性を尊重してテーマを精選し、学位論文としての意義と研究計画、研究の進捗に対して、分野の全院生が参加する研究ゼミと、教員による個別指導を効果的に組み合わせて実施している。院生は、日常生活援助技術や危険予知教育などをテーマとして、臨床での介入研究や実験環境での基礎研究などに研究に取り組んでいる。

(4)　教育方針

1）学部教育

本教育研究分野は，学部教育では基礎看護学を担当し，看護専門科目の知識，態度，技能形成の基盤づくりを行った。

1年次には専門科目の基礎看護学Ⅰおよび基礎看護学実習Ⅰを開講した。基礎看護学Ⅰは看護の共通基盤である看護の概念・目的など看護観形成の基礎となる知識を習得し，看護が対象とする人々への理解を深めることを目指した。基礎看護学実習Ⅰは医学部附属病院において行い，専門科目の学習初期段階において，医療の現場を知り健康障害をもった人々と直接関わることで，看護の機能と役割への理解することを目指した。

2年次の開講科目は，基礎看護学Ⅱ，基礎看護学Ⅲ，基礎看護学演習Ⅰ，基礎看護学演習Ⅱおよび基礎看護学実習Ⅱである。講義と演習を通じ看護を実践し，探求する能力を習得し，発展させるための知識・技術の習得を目標とした。ここでは看護技術の原理および根拠を理解することに重点を置き，看護職者としての知識・技能・態度の形成と主体的学習態度の形成を目指した。また，基礎看護学実習Ⅱでは，看護過程の展開を理解するとともに，日常生活援助を通して「健康とは」,「看護とは」を考え，医療人としての態度や責務，倫理観を学ぶことに重点を置いた。

4年生の卒業研究では，学生の興味のある研究テーマを支持しながら，研究方法と論文の書き方および発表の仕方について指導した。

2）大学院教育

看護ケア技術開発学特論A・B，および看護ケア技術開発学演習A・B，看護ケア技術開発学特論，特別研究Ⅰ・Ⅱを担当した。

大学院教育では，全ての対象の看護に共通する看護技術の生体への効果，および効果を高める看護方法の開発を目指し，経験的に実施されてきた看護方法の科学的根拠を探求した。また，基礎看護学領域の研究方法論の確立のために，さまざまな研究方法を取り入れ，特に看護学に関連する解剖・生理学，生理人類学，教育学など他分野の研究方法を学び，看護基礎科学としての研究と学際的視点に立った研究を目指した。

(5)　臨床活動および学外活動

研究支援

医学部・歯学部附属病院看護部と連携し、研究支援や共同研究を行っている。また、教育機関や地域病院の研究支援も行っている。

(6)　研究業績

[原著]

1. 前田耕助，大黒理恵，大河原知嘉子，樺島稔，齋藤やよい. 罨法による背部への温度刺激が脳血流動態に及ぼす影響 日本看護技術学会誌. 2017.01; 15(3); 245-254

2. 大黒理恵，齋藤やよい. 熟練看護師のベッドサイド場面観察時の注視の特徴 日本看護技術学会誌. 2017.01; 15(3); 218-226

[書籍等出版物]

1. 大黒理恵、他. 看護師・看護学生のためのなぜ？ どうして？ 2018-2019. 第 7 版. メディックメディア, 2017.03
2. 大黒理恵、他. クエスチョン・バンク 看護師国家試験問題解説 2018 第 18 版. メディックメディア, 2017.03
3. 大黒理恵、他. クエスチョン・バンク Select 必修 2018 看護師国家試験問題集第 13 版. メディックメディア, 2017.04

[講演・口頭発表等]

1. 樺島稔. タッチングの効果. 2017.09.02 千葉県安房郡鋸南町
2. 大黒理恵，大河原知嘉子，齋藤やよい. 注視と行動からみた熟練看護師の環境整備の特徴. 日本看護技術学会第 16 回学術集会 2017.10.15

[受賞]

1. 第 17 回学生研究活動成果発表会展示部門　最優秀賞, 城西国際大学, 2017 年 11 月

[社会貢献活動]

1. 大学評価・学位授与機構　学位審査委員会専門委員（齋藤やよい）, 2004 年 04 月 01 日 - 現在
2. 東京学芸大学非常勤講師（大黒理恵）, 東京学芸大学, 2008 年 04 月 01 日 - 2017 年 03 月 31 日
3. 東京医科歯科大学歯学部附属病院看護部看護研究指導（大黒理恵）, 2008 年 04 月 01 日 - 現在
4. 神奈川県立保健福祉大学非常勤講師（大黒理恵）, 神奈川県立保健福祉大学, 2012 年 04 月 01 日 - 現在
5. 文部科学省初等中等教育局児童生徒課産業教育振興室　高等学校職業教科書審査員（齋藤やよい）, 2013 年 04 月 01 日 - 現在
6. 東京医科歯科大学医学部附属病院看護部臨床連携教員（大黒理恵）, 東京医科歯科大学, 2013 年 04 月 01 日 - 現在
7. 東京医科歯科大学医学部附属病院看護部臨床連携教員（齋藤やよい）, 東京医科歯科大学, 2013 年 04 月 01 日 - 現在
8. 文部科学省初等中等教育局児童生徒課産業教育振興室 SPH 企画評価委員 (齋藤やよい）, 2013 年 04 月 01 日 - 現在
9. 東京医科歯科大学医学部附属病院看護部臨床連携教員（大河原知嘉子）, 東京医科歯科大学, 2014 年 04 月 01 日 - 現在
10. エビデンス創出委員会　実行委員（大河原知嘉子）, 日本認知症予防学会, 2015 年 12 月 01 日 - 2017 年 03 月 31 日
11. エビデンス創出委員会　実行委員（大黒理恵）, 日本認知症予防学会, 2015 年 12 月 01 日 - 2017 年 03 月 31 日
12. エビデンス創出委員会　実行委員（齋藤やよい）, 日本認知症予防学会, 2015 年 12 月 01 日 - 現在
13. なるほどテキストマイニング（大河原知嘉子）, 医学書院, 看護研究, 2016 年 12 月 15 日 - 現在
14. 国際混合研究法学会アジア地域会議/第 3 回日本混合研究法学会年次大会　実行委員（大河原知嘉子）, 日本混合研究法学会, 立命館大学大阪いばらきキャンパス, 2017 年 03 月 01 日 - 2017 年 09 月 30 日
15. テキストマイニングの世界-看護研究のためのテキストマイニング-（大河原知嘉子）, 福井大学大学院, 看護キャリアアップセンター看護実践能力開発講座, 福井大学, 2017 年 09 月 09 日
16. 日本混合研究法学会　編集委員（大河原知嘉子）, 2017 年 12 月 01 日 - 現在
17. 日本看護技術学会　編集委員（齋藤やよい）
18. 日本看護技術学会　評議員（齋藤やよい）

19. 日本看護技術学会　理事（齋藤やよい）
20. 日本生理人類学会　英文誌編集委員（齋藤やよい）
21. 日本生理人類学会　看護研究部会長（齋藤やよい）
22. 日本生理人類学会　評議員（齋藤やよい）
23. 日本看護研究学会　専任査読委員（齋藤やよい）
24. 日本看護科学学会　専任査読委員（齋藤やよい）
25. 東京医科歯科大学医学部看護部教育委員会　臨床指導者講習会講師（齋藤やよい）
26. 東京医科歯科大学歯学部附属病院看護部看護研究指導（齋藤やよい）
27. 放送大学　客員教授（齋藤やよい）
28. 日本学術振興会　科学研究費委員会専門委員（齋藤やよい）
29. 日本看護技術学会　専任査読委員（齋藤やよい）
30. 日本学術振興会国際事業委員会書面審査員 · 書面評価員（齋藤やよい）
31. 東京医科歯科大学医学部附属病院看護部リーダーシップ研修講師（齋藤やよい）, 東京医科歯科大学
32. 日本学術振興会特別研究員審査会専門委員（齋藤やよい）
33. 第 36 回日本看護科学学会学術集会　企画委員（西村礼子）

地域保健看護学

Community Health Nursing

教　　授　　佐々木　明子
助　　教　　津田　紫緒
技術補佐員　久保田　米子
大学院生　　金屋　佑子
　　玉城　紫乃
　　板井　麻衣
　　田沼　寮子
　　巽　夕起
　　本田　順子

(1)　分野概要

地域保健看護活動の専門的な知識・技術を習得し、地域で生活する人々の健康の保持・増進と質の高い生活に寄与するための教育を行っている。また、地域保健看護学の実践を発展させ、その有用性を検証するための開発的な研究を行っている。
さらにフィンランド、スウェーデンなど北欧などをはじめとする外国の教育者・研究者・実践者との交流を通し、国際社会に適応できるアカデミックマナーを習得して、日本国内のみならず、国際的に活躍できる地域保健看護学分野の教育者、研究者、実践者の育成をする教育と研究を行っている。
これらの教育・研究活動を通して、地域の人々を尊重し、人々の健康と質の高い生活に貢献していくことを目指している。

(2)　研究活動

本分野における研究課題は地域保健看護学の実践的な課題解決または改善の方策、新しい課題に対する地域保健看護活動方法の開発と評価および理論構築である。具体的研究内容は以下に示すとおりである。

1. 個人・家族・グループ・地域に対する地域保健看護活動の理論と実践
2. 地域診断、健康教育、介護予防、訪問指導、地区組織活動、産業保健活動の展開方法
3. 地域保健活動の施策化、社会資源の活用と開発
4. 地域保健看護活動の事例分析などによる評価
5. 地域における看護実践やサービス提供システムの国際比較研究などである

主に行った研究テーマは、1. 高齢者の連想法に関する研究、2. 地域看護職者による高齢者全数の予防訪問の実施方法と効果、3. 高齢者に対する介護予防プログラムの評価に関する研究、4. 高齢者の看取りにおける看護職への教育プログラムの開発、5. 医療保険者における保健師の活動に関する研究、6. 産業保健における包括的支援に関する研究等であった。
これらの研究の実施およびその成果の共有のために、平成 29 年 8 月にフィンランドのセイナヨキ応用科学大学において研究を行った。さらに、国内では九州地方、東北地方、東海地方および関東地方の市町村及び高齢者施設等と研究における連携を深めた。同様に関東地方の事業場、医療保険者等との研究体制の整備し、調査実施、適宜情報共有の場を設けた。
学部学生は、「核家族における経産婦の育児の状況と求める支援」（平成 29 年度、坂本真由）、「若年女性の労働者の食習慣における課題と産業保健による活動」（平成 29 年度、永井未来）、「産業保健師による妊娠期から子育て期の女性労働者への支援」（平成 29 年度、廣野礼菜）、「地域における低出生体重児とその家族の特徴と保健師

が行う支援」（平成 29 年度、三浦万由）というテーマで卒業研究をまとめた。
　大学院生は「地域在住高齢者における介護予防活動の評価」（平成 29 年度、金屋佑子）、「在宅高齢者の介入拒否に対する看護職者の支援への困難感を緩和する心理的・社会的要因の検討」（平成 29 年度、玉城紫乃）、「妊娠中に禁煙した母親の産後再喫煙を防ぐ要因の検討」（平成 29 年度、板井麻衣）、「訪問看護師の実施する認知症高齢者へのアセスメントと評価の視点の明確化」（平成 29 年度、田沼寮子）、「小中学生の子を養育する成人女性の健康に対するセルフケアの現状と課題」（平成 29 年度、巽夕起）、「対人支援を行なう行政保健師の感情労働の特徴」（平成 29 年度、本田順子）というテーマについて研究を行っている。大学院生の研究を実施するにあたり、関東地方、東海地方、関西地方等の市町村及び地域包括支援センターの協力を得た。

(3)　教育活動

1）学部教育
　主に地域保健看護学Ⅰ、地域保健看護学Ⅱ、地域保健看護学Ⅲ、地域保健看護学演習、地域保健看護学実習、卒業論文を担当している。
関連科目と連携をとりながら授業を展開し、学生のより深い習熟をめざして、学内における講義および演習と実習を相互に連動させながら、地域保健看護活動の理論と実践と研究の統合を目指して教育をしている。
　平成 29 年度の学部学生の実習は、地域保健として東京都特別区の文京区（保健サービスセンター、保健サービスセンター本郷支所）、足立区（東部保健センター、江北保健センター、竹の塚保健センター）、墨田区（向島保健センター、本所保健センター）、台東区（台東保健所、浅草保健センター）、葛飾区（金町保健センター）の 5 区 (11 ヵ所) で行った。東京都特別区外の地域保健では、東京都八丈町、山形県村山保健所、埼玉県川口市、茨城県土浦市、山梨県甲府市、群馬県高崎市、吾妻郡東吾妻町、吾妻郡嬬恋村、長野県北進保健福祉事務所、長野市、下高井郡野沢温泉村、新潟県上越市で実習を行った。学校保健として筑波大学附属小学校、お茶の水女子大学附属小学校、浦和学院高等学校、また、産業保健として東芝インフォメーションシステムズ株式会社、株式会社保健同人社、株式会社 JAL グランドサービス、キヤノン電子株式会社、日本航空株式会社、横河レンタ・リース株式会社、株式会社日立製作所、トッパングループ健康保険組合で実習を実施した。
2）大学院教育
　主に地域保健学特論 A、地域保健看護学演習 A、地域保健看護学特論、特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱを担当している。
　行政機関や事業所における地域保健看護活動に重点をおき、地域保健看護活動の計画・実践・評価ができる専門的な知識および技術、地域保健看護学の実践への有用性を検証する開発的な研究に取り組めるように教育を行った。さらに、大学院生が国際的な教育、研究、実践活動に参画する機会を提供した。

(4)　教育方針

1）学部教育
　学部教育では保健所、市町村保健センターなど行政機関や事業場などの地域保健看護活動について、制度、法的根拠を理解すると共に、地域の保健看護ニーズのアセスメント、計画、実施、評価と保健看護活動の具体的な展開方法について総合的に学べることを目指して教育を行っている。人々の健康を保持増進する支援を行うために、人々の生活とそれを取り巻く社会環境を含めて捉える視点を養っている。
2）大学院教育
（1）教育研究領域は行政機関や事業場における地域保健看護活動に重点をおき、地域保健看護活動の計画・実践・評価ができる専門的な知識および技術、地域保健看護学の実践への有用性を検証する開発的な研究に取り組めるように指導する。学内における講義・演習・実習、学内外における研究会への参加、学会発表、フィールドワークをとおして地域保健看護学分野における高い実践力と教育・相談・研究能力を修得する。各自の研究課題は地域保健看護学の実践場面に参加して実用可能性を含めた検討を行い、独創的かつ有用な成果を得られるものとなるよう指導する。大学院生は、各自の関心にそって研究テーマを選び、新たな地域保健看護技術や地域保健看護活動の展開方法・地域保健看護システムの開発と地域保健看護学の理論の構築を含めて、研究を進めている。
（2）大学院保健衛生学研究科の提携大学であるフィンランドのセイナヨキ応用科学大学の他、教員が研究交流を行っているスウェーデン等の大学・実践機関等との連携により、滞在型の研修・研究を行う機会を設けている。
（3）国内外の地域保健医療福祉に関連する専門職者との共同プロジェクト研究のうち、学生の関心によりテーマを選択し、研究・実践能力を修得して、独創的な研究を行う機会を提供している。
（4）国内外の学会、外国人研究者の招聘セミナーや国際共同研究の参加、国内外学術雑誌への発表などの積極的な活動を学生に奨励し、指導し、発表を行っている。
（5）国外の大学・実践機関の研究者、専門識者との積極的な交流を大学院生に奨励、指導している。

(5)　研究業績

[原著]

1. 森田久美子, 青木利江子, 小林美奈子, 山本晴美, 呂暁衛, 永嶺仁美, 佐々木明子. 全国の学童保育における高齢者との世代間交流の実施状況と実施に関わる要因 日本世代間交流学会誌. 2017.01; 6(1); 27-36
2. 川原　礼子，齋藤　美華，佐々木　明子. 看護職による呼吸停止確認が実施されている現状と当該職種が感じている課題—全国介護老人保健・福祉施設への調査から— 東北大学医学部保健学科紀要. 2017.01; 26(1); 13-21
3. 川原　礼子，齋藤　美華，佐々木　明子，田沼　寮子. 「予想される死」における看護職による「呼吸停止確認」の現状と認識—全国ホスピス・緩和ケア病棟の看護職への調査から— 東北大学医学部保健学科紀要. 2017.01; 26(1); 23-33

[総説]

1. 川原　礼子，齋藤　美華，佐々木　明子. 看護職が高齢者の「予想される死」において「呼吸停止確認」を担う場合における看取り教育へのニーズ—介護老人保健・福祉施設に勤務し「呼吸停止確認」に賛成する当該職種への調査から— 老年看護学. 2017.07; 22(1); 23-33
2. 田沼寮子，佐々木明子. 地域における高齢者の健康課題に対する支援　④高齢者虐待 看護技術　臨時増刊号. 2017.10; 63(12); 153-158
3. 佐々木明子，田沼寮子. 地域における高齢者の健康課題に対する支援　②要介護高齢者 看護技術　臨時増刊号. 2017.10; 63(12); 143-146
4. 田沼寮子，佐々木明子. 地域における高齢者の健康課題に対する支援　③認知症高齢者 看護技術　臨時増刊号. 2017.10; 63(12); 147-152
5. 本田順子，佐々木明子，田沼寮子. . 地域における高齢者の健康課題に対する支援　①虚弱高齢者 看護技術　臨時増刊号. 2017.10; 63(12); 139-142

[講演・口頭発表等]

1. Hisae Nakatani, Akiko Kanefuji, Mari Karikawa, Uiko Nakata, Shio Tsuda. The Role and Approaches of Family Nursing in Occupational Health Nursing: A Literature Review. The 5th International Nursing Research Conference 2017.10.20 Bangkok, Thailand
2. 巽夕起，前川寿子. A 社 B 事業所従業員のロコモティブシンドロームの現状. 第 76 回日本公衆衛生学会 2017.10.31
3. 佐々木　明子，小野　ミツ，森田　久美子，山﨑　恭子，田沼　寮子，遠藤　寛子，浅尾晋也，田中　敦子. 高齢者全数予防訪問後の健康状態と QOL の状況. 第 76 回日本公衆衛生学会総会 2017.11.01 鹿児島県
4. 渡辺昌子，佐々木明子. ソーシャルメディアを活用した大学生への食生活改善プロジェクトの効果と課題. 第 76 回日本公衆衛生学会 2017.11.02 鹿児島県
5. 津田 紫緒, 佐々木 明子, 山﨑 恭子, 三木 祐子. フィンランドにおける医療・健康上関連情報等の活用のしくみと保健事業の実際. 第 76 回日本公衆衛生学会 2017.11.02 鹿児島
6. 板井 麻衣, 佐々木 明子, 津田 紫緒 . 日本における産後の女性の再喫煙に関する文献レビュー. 第 76 回日本公衆衛生学会 2017.11.02 鹿児島
7. 津田 紫緒, 山﨑 恭子, 三木 祐子. 健康保険組合における保健師の活動に関する文献検討. 日本産業看護学会第 6 回学術集会 2017.11.04 東京
8. 佐々木　明子，森田　久美子，小野　ミツ，山﨑　恭子，田中　敦子，内田　恵美子，田沼　寮子，北東美枝. 高齢者の意識からみた看護職者による予防訪問の効果. 第 37 回日本看護科学学会学術集会 2017.12.16 宮城県
9. 奥村朱美，志賀咲月，深堀浩樹，佐々木明子. A 大学における海外研修が看護学生の卒業後のキャリアに及ぼす影響. 第 37 回日本看護科学学会学術集会 2017.12.17 宮城県
10. 安達和美，巽夕起，宮本純子，山田英子，田村康子，溝畑智子，相羽利昭. 東京都と兵庫県の宿泊施設における外国人旅行者を対象にした災害への「備え」の現状. 第 37 回日本看護科学学会学術集会 2017.12.17

[社会貢献活動]

1. 日本高齢者虐待防止学会研究推進委員会委員　佐々木明子, 日本虐待防止学会, 2009 年 07 月 01 日 - 現在
2. 日本高齢者虐待防止学会評議員　佐々木明子, 日本虐待防止学会, 2009 年 07 月 01 日 - 現在
3. 日本在宅ケア学会　査読委員　佐々木明子, 日本在宅ケア学会, 2012 年 04 月 01 日 - 現在
4. 日本在宅ケア学会実践教育研究助成金委員会委員　佐々木明子, 日本在宅ケア学会, 2013 年 04 月 01 日 - 現在
5. 日本在宅ケア研究所倫理審査委員会委員　佐々木明子, 2013 年 04 月 01 日 - 現在
6. 日本在宅ケア学会評議員　佐々木明子, 日本在宅ケア学会, 2015 年 04 月 01 日 - 現在
7. 日本高齢者虐待防止学会　研究活動 · 国際活動推進委員会　国際活動推進委員会副委員長　佐々木明子, 2015 年 04 月 01 日 - 現在
8. 日本公衆衛生学会代議員　佐々木明子, 日本公衆衛生学会, 2017 年 07 月 01 日 - 現在
9. 日本看護科学学会　和文誌選任査読委員　佐々木明子, 2017 年 10 月 01 日 - 現在

地域健康増進看護学

Community Health Promotion Nursing

森田　久美子（准教授）
中野　　愛子（大学院生）
山本　　晴美（大学院生）
永嶺　　仁美（大学院生）
呂　　暁衛（大学院生）
三村　祐美子（大学院生）
丸山　　佳代（大学院生）
保木　　みか（大学院生）
山本　　紘子（大学院生）
庄司　　花円（大学院生）
包　　文秀（研究生）

(1)　分野概要

本分野における教育・研究の内容は、対象の年齢も活動の場も非常に多岐にわたります。幼少期から良い生活習慣を習得し、中高年期での高い健康レベルとＱＯＬを維持できるようにするためにはどのような対策が必要か、それを保健医療福祉制度や公衆衛生、産業保健といった観点から学んでいきます。

健康教育では、正しい情報、知識を提供することも大切ですが、それ以上に健康教育を受けた対象者が行動変容を起こし、病気の予防・改善につながることが最も重要になります。そのために、どのような健康教育が効果的なのか、企画・実施・評価それぞれの段階で検証していくことを目標としています。
研究は、主として高齢者と子ども達との世代間交流や、地域・在宅で暮らす高齢者の介護予防、産業保健分野での生活習慣病予防等に関する調査を行っています。

(2)　研究活動

最近の研究テーマは、「世代間交流プログラムの効果」です。高齢者と若い世代の交流が、以前に比べて非常に少なくなっている現在、高齢者と子ども達が交流を行うことにより、双方にどのような効果があるのかを明らかにすることを目的に調査を実施しています。また、共同研究として「予防訪問の有用性と効果的運用方法」「在宅高齢者の介入拒否事例の特徴と看護職者が果たす支援方法の解明」に関する調査の一部を分担して行っています。

(3)　教育活動

学部教育では、看護学専攻の専門共通分野に含まれる産業保健学、保健医療福祉制度論、健康教育学演習を担当しています。これらの科目は看護師国家試験、保健師国家試験の両方に出題される内容であり、また将来、医療職として働く際にも必ず知っておかなければならない知識・内容が詰まった講義となっています。本分野を選択した学生の研究テーマは、「女子大学生のボディイメージ、食行動、自尊感情の関連性」「大学生の食生活の現状と間食に関する意識」「子宮頸がん予防に関する意識調査」「臓器移植に関する紙面上の情報提供が与える認知度向上への効果」などさまざまです。研究については、出来る限り学生の主体性を尊重し、興味関心のあるテーマで研究が進められるようにサポートしています。

大学院教育では、健康寿命の延伸を目指して、日常の生活習慣が経年変化に与える影響を学際的に分析し、その基本的考え方と研究法を修得する、また健康教育技法について、国内外の文献を吟味し、企画から評価までの

一連の流れを講義と討議により修得するということを目標としています。地域健康増進看護学特論・演習では、よりよい健康を目指して、人々が行動変容するために必要な支援は何かを考え、健康教育の企画から評価までの一連の流れを演習する、また、健康教育の理論や技術を学び、さまざまな対象、地域にあわせた健康教育を実践できる能力・研究方法を演習により修得することを目標としています。

(4)　研究業績

[原著]

1. 森田久美子, 青木利江子, 小林美奈子, 山本晴美, 呂暁衛, 永嶺仁美, 佐々木明子. 全国の学童保育における高齢者との世代間交流の実施状況と実施に関わる要因 日本世代間交流学会誌. 2017.01; 6(1); 27-36
2. 小林美奈子，森田久美子. 世代間交流を導入した高齢者うつ予防プログラムの開発―笑いヨガとタッピング・タッチの活用― 四日市看護医療大学紀要. 2017.03; 10(1); 1-10

[講演・口頭発表等]

1. Kayo maruyama, Hitomi Nagamine, Harumi Yamamoto, Kumiko Morita. Trends in health education studies to improve lifestyles of primary school children. 20th East Asian Forum of Nursing Scholars 2017.03.09 Hong Kong
2. Minako Kobayashi, Kumiko Morita. Impact of factors including spirituality on well-being of community-dwelling elderly. 20th East Asian Forum of Nursing Scholars 2017.03.09 Hong Kong
3. Yuiko Kajiwara, Harumi Yamamoto, Hitomi Nagamine, Kumiko Morita. THe comparison of nursing and medical students in the aspect of their attitudes towards constipation. 20th East Asian Forum of Nursing Scholars 2017.03.09 Hong Kong
4. 佐々木明子，　小野ミツ，　森田久美子，　山﨑恭子，　田沼寮子，　遠藤寛子，　浅尾晋也，　田中敦子. 高齢者全数予防訪問後の健康状態と QOL の状況. 第 76 回日本公衆衛生学会総会 2017.11.01 鹿児島
5. 山本紘子，五十嵐恵子，小袋伸枝，小沢友紀雄. 運動器検診の方法と結果についての実践報告. 日本学校保健学会第 64 回学術大会 2017.11.05 宮城
6. 五十嵐恵子，山本紘子，小袋伸枝，上村春彦，竹田美保，小沢友紀雄. 学校における生徒の頸椎損傷が疑われる心肺停止状態を想定した問題解決型実践的救急救命シミュレーション研修. 日本学校保健学会第 64 回学術大会 2017.11.05

[社会貢献活動]

1. 東京医科歯科大学医学部倫理審査委員会ピアレビュー委員会　委員, 2009 年 10 月 - 現在
2. 日本在宅ケア学会　査読委員, 2010 年 - 現在
3. お茶の水看護学研究会　編集委員, 2010 年 04 月 - 現在
4. 日本公衆衛生学会　認定専門家, 2010 年 04 月 - 現在
5. 日本在宅ケア学会　実践・研究助成委員会委員, 2012 年 11 月 - 現在
6. 日本看護科学学会　査読委員, 2015 年 - 現在
7. 日本世代間交流学会　編集委員, 2015 年 01 月 - 現在
8. 日本地域看護学会　国際交流推進委員会, 2015 年 10 月 - 現在
9. 日本地域看護学会　査読委員, 2016 年 - 現在

先端侵襲緩和ケア看護学

Critical and Invasive-Palliative Care Nursing

教　授　　田中　真琴
准教授　　川上　明希　（2017 年 5 月 1 日から）
講　師　　矢富　有見子（2017 年 3 月 31 日まで）
助　教　　川本　祐子

大学院生（博士後期課程）奥川 沙希、石塚 紀美、申 于定、野口 綾子
（５年一貫制博士課程）瀧口 千枝、松井 憲子、畑中 佳子、藤田 和寿、
染谷 彰、奈良定 健（2017 年 3 月 31 日まで）
井上 徹治、岩下絵梨香、大脇那奈、小坂志保

(1)　分野概要

先端侵襲緩和ケア看護学では、重篤期から回復期の患者や家族のケア、さらには慢性期のセルフマネジメント支援や緩和ケアといった多方面の研究課題に取り組んでいる。専門的看護支援のあり方を追求するとともに、研究成果の還元による看護の質向上、看護学の一層の充実をめざしている。教育においては、学部教育では成人看護学を担当し、大学院教育では、日本看護系大学協議会より認定を受けた「クリティカルケア看護高度実践看護師教育課程」として、臨床に貢献できる急性・重症患者看護専門看護師の教育にも尽力している。

(2)　研究活動

本分野では、以下の２つの主要なテーマについて取り組んでいる。
【先端・高度医療を受ける患者および家族に対する看護ケアの開発】
疾病や外傷、侵襲的治療によって生命危機状況にある患者の治療に伴う苦痛や不安を緩和し、患者や家族の QOL 向上を目指した様々な視点からの研究に取り組んでいる。侵襲的治療下にある患者について、療養プロセスにおける体験を構造化することや、治療成功・回復促進に関与する患者要因の探索、患者の治療や看護に携わる医療チームの連携や機能等に関する調査などを行っている。
【慢性的な健康問題を抱える患者および家族の主体的療養を促進するための研究】
慢性疾患を抱え不確かさを感じながら療養する患者や家族が、主体的に症状や生活をマネージメントしていけるよう、様々な視点からの研究に取り組んでいる。自己管理行動の阻害要因と促進要因の解明、受容や意思決定のプロセスの構造化、自己管理の実態やそれが疾患管理に与える影響の調査などを行っている。

(3)　教育活動

１）学部教育
本教育研究分野は、学部教育では成人看護学を担当している。
カリキュラムの構成は、２年次での成人看護学Ⅰ（概論２単位）、成人看護学Ⅱ（各論２単位）、３年次前期の成人看護学Ⅲ（実践論１単位）と成人看護学演習（１単位）、そして集大成としての成人看護学実習Ⅰ（３単位）という、学生の学習進度と体験に応じた組み立てとなっている。
２年次では、講義を中心として成人看護学Ⅰ、Ⅱで成人期にある人々の理解と成人看護学の考え方、成人看護学としての看護のあり方の基本を学ぶ。
３年次前期では、成人看護学演習で実践に必要な知識と技術、態度の統合と、成人看護学Ⅲでは各専門領域（専門看護師、遺伝看護、HIV 感染者ケア等）で活躍する第一人者による成人看護学の最新の実践論を学習する。３年次後期は臨地実習期間であり、本学医学部附属病院で３週間の領域別実習を行っている。実習は医学部附属病

院のほぼ全病棟にわたり、各病棟の看護管理者、臨床実習指導者との連携のもとにすすめている。実習最終日には４病棟合同の「まとめの会」を開催し、学生の学びを共有する場としている。まとめの会やカンファレンスは学生主体での運営を重んじ、責任感、主体性、協調性も涵養している。実習開始前の個々の学生の状況把握や、数回の個人面接も含めたきめ細かな指導で、学生の学習の質向上をめざしている。

４年次での卒業論文指導では、講義、ゼミ形式、個別指導と、多彩な教育方略を用いて学生の指導に当たっている。また卒業論文のゼミ生を中心に、就職相談・推薦等キャリア形成のための指導を行っている。

２）大学院教育

看護実践に基づいた研究課題の発掘や方法論の開発をできる研究能力を養い、研究者・教育者としての資質を磨くことに重点を置き教育を行っている。加えて、高度実践者としてのクリティカルケア（急性・重症患者）看護専門看護師（CNS）の教育を行っている。専門看護師実習は、実習提携病院ならびに本分野の CNS 課程履修の修了生やクリティカルケア看護専門看護師が勤務する施設の協力を得て、クリティカルケア看護専門看護師育成のための先駆的教育に取り組んでいる。

研究論文作成指導では、学生個々の興味やテーマを尊重しつつ、研究論文としての意義と研究計画、研究実施状況の意見交換と指導の場としての「論文ゼミ」と、院生一人一人への個別指導との組み合わせで教育の充実を図っている。取り組んでいる論文テーマは、クリティカルケア・急性期・周手術期での看護ケアの洗練と質向上、先端・高度医療における看護の役割、新たな治療を受ける患者の療養生活支援、急性期医療からの移行期、慢性期における看護の役割など多岐にわたる。

（４）　研究業績

[原著]

1. Aki Kawakami, Makoto Tanaka, Makoto Naganuma, Shin Maeda, Reiko Kunisaki, Noriko Yamamoto-Mitani. What strategies do ulcerative colitis patients employ to facilitate adherence? Patient Prefer Adherence. 2017.01; 11; 157-163

2. 今津陽子、佐々木吉子、三浦英恵、深堀浩樹、前田留美、川本祐子、田中加苗、濱舘陽子、宮前繁、菅原千賀子. 千代田区内の中小規模医療機関における災害対策状況とニーズの実態 日本災害看護学会誌. 2017.05; 18(3); 13-23

3. 田中由香利、丸光惠、佐々木吉子、深堀浩樹、川本祐子、前田留美、大友康裕. 文京区の診療所における災害対策状況と医療者が災害対策のために希望する外部からの支援に関する実態調査 日本集団災害医学会誌. 2017.07; 22(1); 30-37

4. 瀧口千枝、矢富有見子、井上智子. Development of the Nurses’ Care Coordination Competency Scale for mechanically ventilated patients in critical care settings in Japan: Part 2 Validation of the scale Intensive & Critical Care Nursing. 2017.09;

5. 瀧口千枝、矢富有見子、井上智子. Development of the Nurses’ Care Coordination Competency Scale for mechanically ventilated patients in critical care settings in Japan: Part 1 Development of a measuring instrument Intensive & Critical Care Nursing. 2017.09;

6. Hirao C, Mikoshiba N, Shibuta T, Yamahana R, Kawakami A, Tateishi R, Yamaguchi H, Koike K, Yamamoto-Mitani N. Adherence to oral chemotherapy medications among gastroenterological cancer patients visiting an outpatient clinic Japanese Journal of Clinical Oncology. 2017.09; 47(9); 786-794

7. 小坂志保, 久田満. 東日本大震災・福島第一原発事故５年後の災害看護を考える　看護学生による福島県南相馬市での研修をとおして 2017.09; 58(9); 754-760

8. Shin, W., Inoue,T., Nakayama, Y., Yokota, T., Yoshino, H. and Tanaka, M. Intention Formation Process for the Use of Tracheostomy and Invasive Ventilation in Patients with Amyotrophic Lateral Sclerosis. Open Journal of Nursing. 2017.10; 7(10); 1101-1114

[書籍等出版物]

1. 川本祐子執筆・編集担当. 受療者医療保険学術連合会広報誌　受保連 NEWS 第５号. 2017.01

2. 野口綾子. 「医療現象学の新たな構築」第１回研究会に参加して、看護研究. 医学書院, 2017.02

3. 川本祐子執筆・編集担当. 受療者医療保険学術連合会広報誌　受保連 NEWS 第６号. 2017.08

[総説]

1. 小坂志保. 慢性腎臓病患者の腎代替療法意思決定支援の新たな展開 2017.05; 43(5); 224-226

[講演・口頭発表等]

1. Yuko Kawamoto, Minami Mochizuki, Yumiko Yatomi, Makoto Tanaka. Prehospital anxiety and copiong among preoperative patients in Japan. 20th East Asian Forum of Nursing Scholars 2017.03.10 Hong Kong
2. 小坂志保, 仲宮優子, 野口文乃. CKD total care として腎性貧血を検討する. 第 62 回日本透析医学会学術集会・総会 2017.06.17
3. Shiho Kosaka, Mikiko Hayashi, Ayumi Ito, Kazuo Takahashi . Development of a Support Decision Making Application for Patients with Chronic Kidney Disease . Asian Nephrology Nursing Symposium 2017 2017.09.05
4. Shiho KOSAKA, Fumino NOGUCHI. A consideration of support about sexuality for kidney transplant patients.. 15th Congress of the Asian Society of Transplantation 2017.11.28

[受賞]

1. 第 3 回日本慢性看護学会賞, 日本慢性看護学会, 2017 年 07 月

[社会貢献活動]

1. 日本クリティカルケア看護学会専任査読員（矢富有見子）, 2004 年 01 月 - 現在
2. 日本慢性看護学会 編集委員会委員, 2010 年 04 月 01 日 - 現在
3. CKD・腎移植に関する勉強会, 2011 年 04 月 01 日 - 現在
4. 日本慢性看護学会 評議員, 2012 年 04 月 01 日 - 現在
5. 日本難病看護学会認定　難病看護師認定・研修会　運営委員（申于定）, 2013 年 04 月 01 日 - 現在
6. 受療者医療保険学術連合会　広報委員会（川本祐子）, 2013 年 08 月 21 日 - 現在
7. AMED 難治性疾患実用化研究事業　セミナー　運営スタッフ（申于定）, 2014 年 04 月 01 日 - 現在
8. 和光市介護認定審査委員会委員（申于定）, 2015 年 04 月 01 日 - 現在
9. 日本看護科学学会 査読委員, 2015 年 10 月 01 日 - 現在
10. 臨床実践の現象学会　事務局（野口綾子）, 2016 年 02 月 01 日 - 現在
11. 日本看護系大学協議会 国際交流推進委員会委員, 2016 年 07 月 08 日 - 現在
12. 日本看護系大学協議会 広報・出版委員会委員（川本祐子）, 2017 年 03 月 14 日 - 現在
13. 日本看護科学学会 理事 総務委員長, 2017 年 06 月 18 日 - 現在

精神保健看護学

Mental Health and Psychiatric Nursing

教　　授	田上 美千佳
准　教　授	美濃 由紀子
技術補佐員	蛭川 智美（2017 年 4 月～ 2017 年 8 月）
	竹内　香（2017 年 9 月～）
大学院生（博士後期）	松浦 佳代
５年一貫博士課程	高濱 圭子
	大河原 文
	冨川 明子
	栗原 淳子（～ 2017 年 7 月）
	平岩千明（2017 年 4 月～）

(1)　分野概要

心の健康づくりへの関心の高まりとともに、人々へのメンタルヘルス支援への必要性が指摘されている。また、精神保健福祉施策が見直され、長期入院精神がい者の地域移行を進めるための具体的方向性の提示や、精神病床の機能分化等が図られている。このように精神保健医療福祉を取り巻く状況は変化し、精神看護を専門とする看護師に求められる能力もこれまで以上に大きくなっている。すなわち、精神科領域への社会的ニーズは多様化し続け、精神看護の活動範囲や援助の対象者は飛躍的に拡大しつつある。

こうした状況を踏まえ、当分野では、精神疾患とその処遇に関する正しい知識を身につけ、社会が求める看護ニーズに応えられる精神科看護者の育成を目指すとともに、精神的な看護援助の原理と方法論の確立に向けた研究・教育を行っている。(学部・大学院教育)

また、当分野は日本看護系大学協議会より認定を受けた「精神看護専門看護師教育課程」であり、精神科領域での高い水準のケアならびにリエゾン精神看護師として臨床全体に専門的に貢献できる人材の育成にも力を注いでいる。

本研究分野の主な研究テーマは、精神疾患患者とその家族のケア、思春期・青年期の精神保健問題のある人とその家族の支援、精神疾患患者の退院および地域生活促進、地域・学校保健・産業保健における精神保健問題の理解と支援、精神科医療・精神保健看護領域の質の向上、司法精神医学・看護学に関する研究等である。

(2)　研究活動

1. 精神疾患患者とその家族への支援
2. 思春期・青年期の精神保健問題のある人とその家族の支援
3. 精神疾患患者の退院および地域生活促進
4. 精神科医療・精神保健看護領域の質の向上に関する研究
5. 司法精神医学・看護学に関する研究

(3)　教育活動

当分野は日本看護系大学協議会より認定を受けた「精神看護専門看護師教育課程」であり、精神科領域での高い水準のケアならびにリエゾン精神看護師として臨床全体に専門的に貢献できる人材の育成にも力を注いでいる。2014 年に認定の更新を行い、承認された。

(4)　教育方針

1）学部教育

1. 看護心理学では、心のしくみと働きについて理解を深めると共に、健康上の問題を抱える人々に精神的な援助を提供する上で欠くことのできない基本的な知識、技術、態度を養うことを学習の目標とする。そこでまず、人格診断、心理測定、自己分析の方法を自分自身に適用してみる。さらに、日常的に体験しているストレスや生活習慣について吟味し、自分自身の心と身体を素材にして、健康と不健康、適応と不適応を区別できる判断力を磨く。また、リラクセーション技法、呼吸法等、心の健康の回復・維持・増進に有効と考えられる方法の一端を体験し、精神的な健康をめぐる援助について視野を広げる。こうした学習を通じて、セルフケア支援としての看護について基本的な考え方を身につける。

2. 精神看護学では、精神的な機能の障害を精神医学的な疾患論、病理学、診断学に基づいて評価する方法や、薬物療法、精神療法、芸術療法などによって回復をもたらす方法について学ぶ。また、精神医療システムの中で看護職が保健医療チームの一員として、それらの知識や方法を看護的援助に生かしながら、どのような役割をとっていく必要があるかについて考察を深める。

3. 地域精神看護学では、精神保健福祉をめぐる社会状況と制度やシステムについての理解を踏まえて、看護師が地域の社会資源を活用しながら、精神障がい者の地域生活の質の向上と社会参加の支援に向けて担うべき役割について学ぶ。

4. 精神看護学演習では、精神疾患患者の生活歴と疾患や生活障害との関連、精神医療の歴史や治療環境の成り立ちが精神疾患患者の処遇に及ぼす影響についての理解を深め、精神疾患患者への心理・社会・生物学的な諸局面を視野に入れた全人的理解の深化を目指す。さらには、援助的な対人関係技術の向上を通じて、精神疾患患者の回復、成長、自立を支援するために必要な方法と、その理論的な背景について学ぶ。

5. 精神看護学実習は、精神科病棟及び地域における精神科通所施設で行う。カンファレンスでは「看護場面の再構成法」のワークシートを活用し、入院患者との対人関係を振り返って自己理解を深めることを通じて精神看護の実践能力を高めると共に、地域に暮らす精神障害者の生活実態に沿った地域支援について学ぶことを目標とする。入院患者や通所者との対人関係を体験する中で、自己一致に基づく率直な自己表現の共有を通じて感情活用能力を高めることに加えて、セルフケア理論に基づいた看護過程を展開することを通じて、対象者の抱えている問題の明確化を図りながら援助関係を築いていく過程を重視している。

2）大学院教育

1. 精神保健看護学特論 A-1 では、人々の精神状態や発達課題について判断するための基準や枠組みと共に、様々な年代や健康状態の人々に対する精神的援助を支える技術や方法とその理論的な背景について習得する。具体的には、精神医学的診断法や心理測定法、並びに精神医療法を始めとする様々な精神科治療の技術と方法の蓄積に学びながら、看護学独自の視点に基づく評価と援助の方法について修得する。

2. 精神保健看護学特論 A-2 では、精神的な問題をもつ人々とその家族に適切な看護的援助を提供する上で必要な内省技法、面接技法、グループワーク技法の理論的背景を学ぶと共に、精神保健看護学の分野における研究倫理、参加観察と質的研究の方法論について理解を深め、臨床家の問題意識に沿って研究課題を発見して明確化できる能力、ならびに研究成果を臨床の場で実践できる能力を修得する。

3. 精神保健看護学演習 A では、対人関係論、集団力動論の視点と方法論に則った看護事例検討会への参加とその振り返りを通じて、事例分析や看護評価の方法とその理論的背景、並びにグループによるスーパービジョン、コンサルテーションの実際を体験すると共に、個別のスーパービジョン、コンサルテーション、相談面接の理論と方法について習得する。

4. 精神保健看護学特論 B-1 では、精神保健福祉をめぐる社会状況と関連法規、社会制度の変遷について理解を深めると共に、看護師の視点から、現状の保健医療福祉システムが抱えている課題の克服に向けて、既存の制度や

社会資源を活用し、患者の自助活動と連携していくための方法論や、制度改革の必要性と方向性について学ぶ。

5. 精神保健看護学特論 B-2 では、司法精神医療、司法精神医学、司法精神看護学の現状と課題、並びに理論的、歴史的背景の検討を中心に、暴力等による自傷他害の行為の見られる精神疾患患者の回復と自立の促進に向けた早期介入や入院時の個別ケアと併せて、心理教育、認知行動療法、芸術療法等の集団療法や、患者の自助活動を重視する治療共同体的な実践の方法論について習得する。

6. 精神保健看護学演習 B では、精神疾患患者の病状や心理社会的状況に応じた看護契約、権利擁護、アメニティ向上のための方法論、並びに急性期・回復期の看護、リハビリテーション看護、家族看護、在宅看護ならびにそれらの活動の充実に向けた看護管理やチーム医療を支える理論と方法論について、講義と討議によって習得する。

7. 精神保健看護学実習では、急性期、慢性期、回復期等各期における様々な病態の精神疾患患者への看護的援助を実施した経験を核とし、それをあらゆる角度から分析・検討することを通じて、精神的健康に問題を持つあらゆる人々に対して専門性の高い看護的援助、及び援助者への援助を実践できる能力を身につけることを重視する。

8. 精神保健看護学特論では、精神的な看護援助の方法論的な確立に向けた看護的介入の実施・評価・教育を担い得る能力を修得するとともに、治療的援助技法を活用した精神的な問題を持つ人とその家族への支援の実践を基盤に、精神健康の質的向上と精神医療保健看護システムの変革に寄与し得る学際的な研究を行い、国内外の学術誌に発表し、自立して研究できる能力を修得する。

(5)　臨床活動および学外活動

学部・大学院講義を公開講座にし、臨床・学外に門戸を開いている。
具体的には、下記の講義を公開講座とした。

地域精神看護学
「認知行動療法の基礎」
認知行動療法に役立つコミュニケーションの基礎
講師：菊池安希子（2017 年 4 月 21 日）

地域精神看護学
「アディクションの理解と概念」
アディクションの概念、アルコール依存症とその他の依存症（アディクションとしての自傷）
講師：松本俊彦（2017 年 4 月 28 日）

精神保健看護学特論 A ― 2（大学院）
「子どもと親への面接・ペアレントトレーニング」
講師：田中哲（2017 年 5 月 19 日）

(6)　研究業績

[書籍等出版物]

1. 田上美千佳. 丁寧なかかわりでご家族の気もちをくみ取る支援.　In. 精神科医療ガイド 2018,　pp13-21. NOVA 出版, 2017.11 (ISBN : 9784905441137)

[総説]

1. 美濃由紀子, 井上結菜, 高濱圭子, 宮本真巳. 看護場面の再構成による臨床指導　患者とともに成長する機会としての臨地実習 精神科看護. 2017.01; 44(1); 54-62

[講演・口頭発表等]

1. Michika Tanoue,Junko Niimura,Mayo Hirabayashi,Yoriko Nonaka. Issues surrounding severe psychiatric post-patients' community living in Japan How can we best prepare them?. 25th EPA 2017.04.02 Florence,Italy

2. 髙濵圭子、美濃由紀子. 国内の看護学領域における統合医療に関する文献レビュー ―患者を対象とした研究の効果・検証に焦点をあてて―. 第 32 回日本保健医療行動科学会学術大会 2017.06.17 千葉県鴨川市

3. 栗原淳子，美濃由紀子，田上美千佳. 精神科外来での看護相談に関する文献レビュー. 日本精神保健看護学会第 27 回学術集会 2017.06.24 札幌市教育文化会館，札幌

4. 山寺彩可，田上美千佳. 術前の患者に対する外科病棟看護師の精神的ケアの実際. 日本精神保健看護学会第 27 回学術集会 2017.06.24 札幌市教育文化会館，札幌

5. 小林信，須藤公裕，本武敏弘，葛島慎吾，寺田美樹，寺岡征太郎，田上美千佳. 精神力動論的と看護を語るー事例を読み解き方ながらー. 日本精神保健看護学会第 27 回学術集会 2017.06.25 札幌市教育文化会館，札幌

[その他業績]

1. 松浦佳代：平成 27 年度上廣倫理財団　研究助成, 2017 年 03 月
精神障害を有する親が自身の症状や治療について子どもに伝える際に抱く倫理的葛藤～精神科病院への入退院を通じて親が体験する心理過程に着目して～

2. 田上美千佳：科学研究費基盤研究（C）分担研究者（研究代表者　新村順子）, 2017 年 04 月
精神障碍者に対する意思決定の共有（SDM）に関する看護専門職の認識についての研究

3. 田上美千佳：科学研究費基盤研究（B）研究代表者, 2017 年 04 月
精神科外来における患者と家族への包括的看護支援方法の開発

4. 田上美千佳：科学研究費挑戦的萌芽研究　研究代表者, 2017 年 04 月
精神科救急入院料病棟における家族への退院支援ガイドライン開発

[社会貢献活動]

1. 田上美千佳：日本精神科救急学会編集委員, 1999 年 04 月 01 日 - 現在

2. 田上美千佳：日本精神保健看護学会査読委員, 2001 年 04 月 01 日 - 現在

3. 田上美千佳：社会福祉法人かがやき会評議員, 2002 年 04 月 01 日 - 現在

4. 田上美千佳： 東京都精神医療審査会委員, 2004 年 04 月 01 日 - 現在

5. 田上美千佳：日本病院・地域精神医学会編集委員, 2005 年 04 月 01 日 - 現在

6. 田上美千佳： 日本病院・地域精神医学会評議員, 2008 年 04 月 01 日 - 現在

7. 田上美千佳：東京医科歯科大学附属病院臨床連携教員, 2013 年 04 月 01 日 - 現在

8. 田上美千佳：お茶の水看護学雑誌査読委員, 2013 年 04 月 01 日 - 現在

9. 松浦佳代：「精神看護学概論（前期）」「精神看護学方法論（後期）」　[非常勤講師] , 愛国学園高等学校　衛生看護専攻科（1 年生）　, 2014 年 04 月 01 日 - 2017 年 03 月 31 日

10. 田上美千佳：日本社会精神医学会評議委員, 2014 年 04 月 01 日 - 現在

11. 田上美千佳：一般社団法人日本精神保健看護学会第 2 期代議員, 2015 年 06 月 27 日 - 2017 年 06 月 23 日

12. 田上美千佳：一般社団法人日本精神保健看護学会第 2 期理事長, 2015 年 06 月 27 日 - 2017 年 06 月 23 日

13. 田上美千佳：日本看護科学学会第 36 回学術集会企画委員, 2015 年 09 月 14 日 - 2017 年 01 月 25 日

14. 松浦佳代：メンタルヘルスリテラシー教育　[講義：中学生対象] , 学校メンタルヘルスリテラシー研究会, 小平市立中学校, 私立啓明学園中等部, 2016 年 07 月 04 日 - 2017 年 02 月 25 日

15. 田上美千佳：世田谷区障害者施策推進協議会　委員, 2016 年 10 月 01 日 - 現在

16. 田上美千佳：文部科学省大学設置・学校法人審議会　保健衛生学専門委員, 2016 年 10 月 01 日 - 現在

17. 冨川明子：精神疾患をもつ人への地域での関わり［講義］, ねりまケアネットワーク, 順天堂大学付属練馬病院, 2017 年 02 月 09 日

18. 田上美千佳：メンタリング事例検討［助言 · 講評] , 東京医科歯科大学医学部付属病院看護部, メンター研修プログラム, 東京医科歯科大学附属病院, 東京, 2017 年 02 月 28 日
19. 田上美千佳：家族の理解 [講義] , 日本精神科看護協会, 精神科看護初心者研修会, 東京研修会場, 東京, 2017 年 05 月 02 日
20. 冨川明子：精神看護支援論　精神障がい者の退院支援［講義］, 西武文理大学, 2017 年 05 月 16 日
21. 田上美千佳：こころの相談機能等の強化検討専門部会　委員, 世田谷区世田谷保健所　健康推進課, 2017 年 06 月 01 日 - 現在
22. 田上美千佳：一般社団法人日本精神保健看護学会第 3 期監事, 2017 年 06 月 23 日 - 現在
23. 田上美千佳：一般社団法人日本精神保健看護学会第 3 期代議員, 2017 年 06 月 23 日 - 現在
24. 田上美千佳：語りの後の精神保健看護を語り合うー私のナラティヴ · ターンー（大会長講演座長）, 日本精神保健看護学会第 27 回学術集会, 札幌市教育文化会館，札幌, 2017 年 06 月 24 日
25. 冨川明子他：第 4 回日本 CNS 看護学会スキルアップセミナー［発表］, 第 4 回日本 CNS 学会, 2017 年 06 月 25 日
26. 田上美千佳：家族援助論２［講義］, 日本精神科看護協会, 対象理解Ⅱ　精神保健福祉における個別課題, 東京研修会場，東京, 2017 年 07 月 06 日
27. 冨川明子：平成 29 年度看護研究発表会論文　査読委員, 一般社団法人日本精神科看護協会（大阪支部）, 2017 年 07 月 14 日 - 2017 年 08 月 25 日
28. 宮本眞巳，髙濵圭子　事例検討会, 公益財団法人井之頭病院　, 2017 年 07 月 22 日
29. 宮本眞巳，髙濵圭子　患者‐看護師関係　援　27 日 - 2017 年 07 月 28 日
30. 渡辺純一，髙濵圭子　異和感の対自化, 公益財団法人井之頭病院, 2017 年 09 月 07 日
31. 宮本眞巳，髙濱圭子　異和感の対自化 · プロセスレコード, 一般社団法人日本精神科看護協会, 2017 年 09 月 16 日
32. 田上美千佳：家族の心理と対応 [講義] , 東京医科歯科大学医学部付属病院デイケア, 東京医科歯科大学附属病院, 東京, 2017 年 09 月 28 日
33. 田上美千佳：家族援助 · 家族心理教育 [講義] , 東京女子医科大学大学院, 東京女子医科大学大学院博士前期課程, 実践看護学 IV 精神看護学演習, 東京女子医科大学, 東京, 2017 年 10 月 25 日
34. 美濃由紀子：日本精神保健看護学会 査読委員
35. 美濃由紀子：日本看護科学会誌 査読委員
36. 美濃由紀子：東京医科歯科大学医学部付属病院 看護部臨床連携教員
37. 美濃由紀子：社会福祉法人けやき 評議員
38. 美濃由紀子：お茶の水医学雑誌 査読委員
39. 美濃由紀子：お茶の水看護学誌 査読委員
40. 美濃由紀子：日本 IPR 研究会 運営委員

小児・家族発達看護学

Child and Family Nursing

准教授	岡光　基子
助教	矢郷　哲志
技術補佐員	村松　三智
非常勤講師	幸本　敬子
大学院生	来生　奈巳子
大学院生	岡林　優喜子
大学院生	野村　智実
研究生	弓気田　美香

(1)　分野概要

小児看護学を専門とする教育分野として発足し、平成 20 年度からは、乳幼児精神保健に関する知識とスキルを持つ小児専門看護師（CNS）養成カリキュラムの運用を始め、小児看護の高度専門家の養成とその領域における研究を遂行している。研究においては、乳幼児とその家族に対する早期介入支援を主要なテーマとして取り組み、研究成果を看護実践に活用し、大学病院や小児科クリニックでの育児支援外来の運営にも関わっている。また、日本語版 NCAST やファミリーパートナーシップモデルに基づく妊娠期からの育児支援など、専門職向けの講習会を開催している。

(2)　研究活動

乳幼児精神保健を基盤とし、主に乳幼児の発達、親子の相互作用、乳幼児とその家族に対する早期育児支援介入に関する研究に取り組んでいる。
研究の主なテーマは、
1) 早産・低出生体重児、先天性疾患、慢性疾患、発達障害など、様々な背景をもつ乳幼児期の親子相互作用とその関連要因
2) 乳幼児精神保健の理論に基づく育児支援介入
3) ファミリーパートナーシップモデルに基づく妊娠期からの早期育児支援
4) 小児科外来でのファミリーパートナーシップモデルに基づく多職種による育児支援の有効性
5) 父親に対する育児支援
6) 周産期における母児エピゲノムの体系的解析
7) 幼児の社会―情緒的、行動上の問題に関するアセスメントツールの開発
8) 小児領域の看護師による倫理的実践の構造と教育プログラムの開発
9) 慢性疾患をもつ子どもと家族のための患者家族滞在施設の役割の検討
などである。
国内外の研究施設と情報交換しながら研究活動を行い、6) においては、東京医科歯科大学医学部附属病院周産女性診療科、発生発達病態学分野、難治疾患研究所、国立健康・栄養研究所と共同研究を行っている。

(3)　教育活動

1) 学部教育
小児看護学Ⅰ・Ⅱ、小児看護学演習Ⅰ・Ⅱ、小児看護学実習、卒業論文Ⅱ、看護の統合と実践（1 コマ）を担当している。卒業論文Ⅱにおいては、4 名の学生が各々の研究テーマにそって研究過程を学び、論文にまとめて、口

頭発表をするまでを指導した。
2) 大学院教育
　小児家族発達看護学特論 A1· B、小児家族発達看護学演習 A1· B、共通科目である家族看護学特論、精神保健看護学特論 A2（2 コマ）を担当した。

(4)　臨床活動および学外活動

　乳幼児精神保健を看護実践に活用し、育児に不安や困難を抱える親とその子どもを支援することを目的として、東京医科歯科大学医学部附属病院小児科外来 · 病棟 · NICU 及び大川こども＆内科クリニックにおける育児支援外来の運営に関わっている。また、1 型糖尿病の患者 · 家族会 (東京わかまつ会) の運営にも携わっている。

(5)　研究業績

[原著]

1. Kayoko Suzuki, Eija Paavilainen, Mika Helminen, Aune Flinck, Natsuko Hiroyama, Taiko Hirose, Noriko Okubo, Motoko Okamitsu. Identifying and Intervening in Child Maltreatment and Implementing Related National Guidelines by Public Health Nurses in Finland and Japan. Nurs Res Pract. 2017.02;
2. Michie Nagayoshi, Taiko Hirose, Kyoko Toju, Shigenobu Suzuki, Motoko Okamitsu, Taeko Teramoto, Takahide Omori, Aki Kawamura, Naoko Takeo. Related visual impairment to mother-infant interaction and development in infants with bilateral retinoblastoma. Eur J Oncol Nurs. 2017.06; 28; 28-34
3. 弓気田美香. 食物アレルギーのある乳幼児をもつ母親の育児ストレス 小児保健研究. 2017.09; 76(5); 462-469
4. 三国久美, 草薙美穂, 澤田優美, 齋藤早香枝, 岡光基子, 矢郷哲志, 廣瀬たい子. ファミリーパートナーシップに基づく育児支援講習会の効果 北海道医療大学看護福祉学部紀要. 2017.12; 24; 31-36

[総説]

1. 弓気田美香. 乳幼児看護学はじめの一歩（第 15 回）　食物アレルギー児の看護 小児看護. 2017.01; 40(1); 112-115
2. 矢郷哲志. 乳幼児をもつ父親のメンタルヘルスと育児支援 小児看護. 2017.02; 40(2); 243-246
3. 岡光基子. 乳幼児看護学はじめの一歩 (第 19 回)　ファミリーパートナーシップモデルに基づいた産前 · 産後の親子支援について 小児看護. 2017.06; 40(6); 763-767
4. 岡林優喜子. 乳幼児看護学はじめの一歩（第 20 回）　乳幼児精神保健：障がいをもつ子どもの養育者への支援 小児看護. 2017.07; 40(7); 870-873
5. 村松 三智. 【病気になった親の子どもへの支援】 子どものケアの実際　医療機関におけるケア　親が救急 · 集中治療を受ける子どもへのケア　終末期の人工呼吸管理下の母親をもつ幼児へのかかわり 小児看護. 2017.11; 40(12); 1531-1536

[講演 · 口頭発表等]

1. Hidemi Takimoto, Motoko Okamitsu, Noriko Sato, Tay Zar Kyaw, Nay Chi Htun, Chihiro Imai, Yuiri Tsubota, Reiko Tajirika-Shirai, Satoshi Yago, Tomoko Aoyama, Naoyuki Miyasaka. Dietary intakes and depressive symptoms among pregnant participants in the Birth Cohort- Gene and ENvironment Interaction Study of TMDU (BC-GENIST). 第 27 回日本疫学会学術総会 2017.01.27 山梨
2. 永吉美智枝, 瀧田浩平 , 高橋衣, 矢郷哲志, 江口八千代, 小山健太. 患者家族滞在施設における利用状況からみたニーズの検討 第 2 報-医療機器を装着した患児への滞在支援-. 日本小児看護学会 第 27 回学術集会 2017.08.20 京都
3. 瀧田浩平, 永吉美智枝, 高橋衣, 矢郷哲志, 江口八千代, 小山健太. 患者家族滞在施設における利用状況からみたニーズの検討 第 1 報-医療機関併設型と非併設型の比較-. 日本小児看護学会 第 27 回学術集会 2017.08.20 京都

4. 矢郷哲志, 江口八千代, 永吉美智枝, 瀧田浩平, 植田洋子, 小山健太. 小児医療に携わる医療従事者における患者家族滞在施設の認知度およびニーズ. 日本小児看護学会 第 27 回学術集会 2017.08.20 京都

5. Hidemi Takimoto, Motoko Okamitsu, Noriko Sato, Tay Zar Kyaw, Nay Chi Htun, Chihiro Imai, Yuiri Tsubota, Reiko Tajirika-Shirai, Satoshi Yago, Tomoko Aoyama, Naoyuki Miyasaka. Dietary intakes from 3-day weighed dietary records among pregnant participants in the Birth Cohort - Gene and ENvironment Interaction Study of TMDU (BC-GENIST). the 21st World Congress of Epidemiology, International Epidemiological Association 2017.08.21 Saitama, Japan

6. Noriko Sato, Hidemi Takimoto, Motoko Okamitsu, Tay Zar Kyaw, Chihiro Imai, Nay Chi Htun, Satoshi Yago, Tomoko Aoyama, Seiji Yamaguchi and Naoyuki Miyasaka. Study design: the evaluation of interindividual differences in neonatal epigenome - the BC-GENIST project. the 21st World Congress of Epidemiology, International Epidemiological Association 2017.08.21 Saitama, Japan

7. 今井千裕, Shilpa Pavethy nath, 瀧本秀美, 岡光基子, Tay Zar Kyaw, Nay Chi Thun, 五十嵐麻子, 青山友子, 矢郷哲志, 不殿絢子, 宮坂尚幸, 佐藤憲子. 妊娠中の環境要因が影響するエピゲノム変化と母児の健康指標との関連—BC-GENIST—. 第 6 回日本 DOHaD 学会学術集会 2017.08.26 東京

8. 鈴木香代子，廣瀬たい子，岡光基子. オーストラリアにおける看護職による虐待予防プログラム. 乳幼児保健学会第 11 回学術集会 2017.09.16 東京

9. 野村智実，岡光基子，矢郷哲志，宮尾益知. 発達障害の傾向のある子どもの父親への支援：家族内に複数の困難が生じているケース. 乳幼児保健学会第 11 回学術集会 2017.09.16 東京

10. Satomi Nomura, Motoko Okamitsu, Satoshi Yago. Trends in research on paternal parenting from 2007 to 2017: fathers of children with Neurodevelopmental disorder. The 5th International Nursing Research Conference 2017.10.20 Bangkok, Thailand

11. Kumi Mikuni, Miho Kusanagi, Yuumi Sawada, Sakae Saito, Motoko Okamitsu, Satoshi Yago, Taiko Hirose. Effects of the childcare support seminar based on Family Partnership Model. The 4th International Nursing Research Conference 2017.10.20 Bangkok, Thailand

12. 岡光基子, 矢郷哲志, 廣瀬たい子. 口唇裂 · 口蓋裂をもつ幼児の行動と情緒の特徴とその関連要因. 第 27 回日本乳幼児医学 · 心理学会 2017.12.09 東京

[社会貢献活動]

1. 乳幼児保健学会　理事（岡光基子）, 2012 年 04 月 01 日 - 現在

2. お茶の水看護学雑誌　査読委員（岡光基子）, 東京医科歯科大学, 2016 年 04 月 01 日 - 2017 年 03 月 31 日

3. World Association for Infant Mental Health（世界乳幼児精神保健学会）日本支部　事務補佐（岡光基子）, 2016 年 04 月 01 日 - 2017 年 03 月 31 日

4. 現在の小児医療における患者家族滞在施設に対するニーズの検討と理想のハウス実現に向けた基盤の構築事業検討委員会　委員（矢郷哲志）, 認定特定非営利活動法人ファミリーハウス, 2016 年 04 月 01 日 - 2017 年 03 月 31 日

5. 東京わかまつ会小児糖尿病患者会　会計監査（岡光基子）, 東京わかまつ会, 2016 年 04 月 01 日 - 現在

6. 日本乳幼児医学 · 心理学研究　査読委員（岡光基子）, 日本乳幼児医学 · 心理学会, 2016 年 04 月 01 日 - 現在

7. The Japan Journal of Nursing Science 査読委員（岡光基子）, The Japan Academy of Nursing Science, 2016 年 04 月 01 日 - 現在

8. 日本乳幼児医学 · 心理学会　評議員 · 編集委員（岡光基子）, 日本乳幼児医学 · 心理学会, 2016 年 04 月 01 日 - 現在

9. お茶の水看護学研究会　会長 · 編集委員（岡光基子）, お茶の水看護学研究会, 2016 年 04 月 01 日 - 現在

10. 日本体育大学　非常勤講師（岡光基子）, 2016 年 04 月 01 日 - 現在

11. 東京わかまつ会小児糖尿病患者会　運営スタッフ（矢郷哲志）, 2016 年 04 月 01 日 - 現在

12. 乳幼児保健学会　事務局（矢郷哲志）, 2016 年 04 月 01 日 - 現在

13. 文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）」DD ユニットファミリーサポート保育サービス講習会「小児看護の基礎知識」　講師（岡光基子）, 東京医科歯科大学, 2016 年 07 月 20 日 - 現在
14. 母子保健福祉委員（岡光基子）, 神奈川県小田原保健福祉事務所, 2017 年 03 月 13 日
15. 公益社団法人東京都歯科医師会附属歯科衛生士専門学校　非常勤講師（矢郷哲志）, 2017 年 04 月 01 日 - 現在
16. ファミリーパートナーシップモデルに基づく早期育児支援講習会　講師（岡光基子）, 首都大学東京，小田原保健福祉事務所, 2017 年 06 月 03 日 - 現在
17. ファミリーパートナーシップモデルに基づく早期育児支援講習会　講師（矢郷哲志）, 首都大学東京，小田原保健福祉事務所, 2017 年 06 月 03 日 - 現在
18. ファミリーパートナーシップモデルに基づく早期育児支援講習会　講師（幸本敬子）, 首都大学東京，小田原保健福祉事務所, 2017 年 06 月 03 日 - 現在
19. JNCAST 講習会　講師（岡光基子）, 東京医科歯科大学, 2017 年 08 月 26 日
20. 乳幼児保健学会第 11 回学術集会　企画委員（岡光基子）, 乳幼児保健学会, 東京, 2017 年 09 月 16 日
21. 乳幼児保健学会第 11 回学術集会　企画委員（矢郷哲志）, 乳幼児保健学会, 東京, 2017 年 09 月 16 日
22. 文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ (連携型)」DD ユニットファミリーサポート 保育サービス講習会 「小児看護の基礎知識」　講師（矢郷哲志）, 2017 年 09 月 28 日 - 現在

リプロダクティブヘルス看護学

Reproductive Health Nursing

教授　大久保　功子
講師　三隅　順子

大学院生
博士後期課程　　小田柿　ふみ

博士５年一貫課程
佐野　深雪
鈴木　由美子
佐藤　千鶴
石田　徹
今村　美聡

非常勤講師
松岡　秀明
勝又　織里

(１)　分野概要

この領域では、主に性と生殖に関する健康と権利にかかわる看護や助産についての研究教育を行っています。周産期ならびに、女性の生涯にわたる看護あるいは助産に関する研究者に必要とされるであろう能力を高めるために、EBM や NBM の視点をおりまぜながら、研究のトレンドや研究方法の歴史的背景や哲学的立場を踏まえ、深く掘り下げた研究クリティークを行っています。

学部教育では、看護師国家試験受験資格に必須とされている、母性看護学の講義、演習、実習を担当しています。

不定期ですが、質的研究の勉強会を開催しています。

(２)　研究活動

現象学、GT、エスノグラフィー、疫学、演繹的帰納的アプローチ、ナラティヴ研究法など、研究課題に則して適切に研究方法を選択して取り組むべく、日夜努力しています。単なる手順として研究法を理解するのではなく、その歴史的背景や哲学から理解することを目指しています。女性と性的マイノリティの人のための看護実践、助産学、看護学、人間科学における知を開発するための研究にも取り組んでいます。かといって、量的研究を行わないわけではなく、疫学的手法や共分散構造分析を用いた尺度開発も行っています。おかげさまで、学院論文２本を含め、今年度は３本の研究が受理されたので、来年の年報にはさらに多くの論文を掲載することができそうです。代替医療、精神分析学、対人関係論、カウンセリング理論、アタッチメント理論、絆理論、看護理論、助産理論についても学び続けています。大久保は主に親子の精神的健康、三隅は DV に関心を持って研究と実践に取り組んでいます。

現在、Munhall の質的研究法を読み終え、Riessman のナラティヴ分析の抄読会を行っています。また、ファミ

リーパートナーシップモデルの基となっている、ケリー心理学の抄読会を予定しています。これらの活動に関しては、今後、オープンにしていく可能性があります。興味のある方は連絡をいただければと思います。

(3)　教育活動

2018 年度の時点で、大学院には博士課程に 1 名と博士 5 年一貫課程に 5 名の学生が在籍しています。
　教育活動として、研究のプロセスを学びあい、お互いに切磋琢磨する環境づくりをこころがけています。

(4)　教育方針

自分の心で感じ、頭で考え、書くことができる、これからの研究者を育てることをモットーとしています。

(5)　臨床活動および学外活動

大久保は主に質的研究、三隅は DV 被害者支援関係で全国行脚をしています。

(6)　研究業績

[原著]

1. Maki Saito, Audrey Lyndon. Use of traditional birth practices by Chinese women in the United States MCN, American Journal of Maternal Child Nursing. 2017;
2. Kayoko Suzuki, Eija Paavilainen, Mika Helminen, Aune Flinck, Natsuko Hiroyama,. Identifying and intervening in child maltreatment and implementing related national guideline by public health nurses in Finland and Japan Nursing Research and Practice. 2017.04; 2017;

[総説]

1. 齋藤真希. アメリカの基礎看護教育におけるシミュレーション教育　～サンフランシスコ大学での実践例から学ぶ 看護研究. 2017.01; 57(1); 48-51
2. 齋藤真希. アメリカの助産教育におけるシミュレーション教育　～カリフォルニア大学サンフランシスコ校での実例から学ぶ 看護実践の科学. 2017.01; 42(1); 60-65

[講演・口頭発表等]

1. Noriko OKUBO,Etsuko SHIONO. Challenges of midwife maternal care for women with mental diseases. 31st International midwifery confederation Triennial Congress 2017.06.18 Tronro CANADA
2. Yumiko Suzuki,Noriko Okubo,Ako Sakurai,Miyuki Sano,Saori Katsumata,Junko Misumi, Fumi Odakaki. Relationship between inter-professional education and midwife-obstetrician collaboration. 31st Internationl midwifery confederation Triennial Cngress 2017.06.18 Toronto CANADA
3. Noriko Okubo, Fumi Odagaki, Ako Sakurai, Yumiko Suzuki, Miyuki Sano, Saori Katsumata, Junko Misumi. National survey of Midwife’s perception of Collaboration in Perinatal Medical Center in Japan, from comparing with Obstetrician’s. 31st International midwifery confederation Triennial Congress 2017.06.18 Toronto CANADA
4. Miyuki Sano,Noriko Okubo,Ako Sakurai,Yumiko Suzuki,Saori Katsumata,Junko Misumi,Fumi Odakaki. Organizational Factors Facilitating Midwife-Obstetrician Collaboration . 31st Internationl midwifery confederation Triennial Congress 2017.06.20 Tronto CANADA
5. Yumiko Suzuki,Noriko Okubo,Ako Sakurai,Miyuki Sano,Saori Katsumata,Junko　Misumi, Fumi Odagaki. Relationship between inter-professional education and midwife and Obstetrician collaboration. 31st ICM Triennial Congress 2017.06.21 Toronto,CANADA
6. 加納尚美，長江美代子，李節子，藤田景子，三隅順子，山田典子. 性暴力対応チーム基礎および応用研修の評価. 日本フォレンジック看護学会第 4 回学術集会 (福岡看護大学) 2017.09.03 福岡看護大学

7. 三隅順子. 妊娠期からの夫婦への支援～子どもにとって家庭が安全基地となるために. 山形県市町村母子保健コーディネーター養成研修 2017.11.16 山形県山形市上柳　山形県立保健医療大学

[その他業績]

1. SANE 養成, 2017 年 11 月
   性暴力被害者支援看護職の研修プログラムの企画運営実施
   (2007 年度より)
2. 看護教育におけるフォレンジック (法) 看護学の意義と学び方, 2017 年 12 月
   日本看護科学学会第 37 回学術集会 (仙台)　交流集会
3. 小児外来でのファミリーパートナーシップモデルに基づく多職種による育児支援の有効性
   大久保功子 (研究分担者)：科学研究費補助金 (基盤研究 B)26293488.2014-2018 年.
4. 出産後の夫婦の相互作用を促す予期的看護支援プログラムの構築
   大久保功子 (研究分担者)：科学研究費補助金（基盤研究 C)24593376.2013-2016 年.
5. 妊娠期からのファミリーパートナーシップモデルに基づく早期育児支援の有効性
   大久保功子 (研究分担者)：科学研究費補助金（基盤研究 C）研究課題番号：15K11695.2015 ～ 2018 年
6. 児童 · 思春期精神科病棟における看護師のための家族支援ガイドラインの開発
   大久保功子 (研究分担者)：科学研究費補助金（基盤研究 C)2015 ～ 2019 年
7. 精神障害を抱える妊産婦のケアで、助産師が直面する困難と対処
   大久保功子 (研究分担者)：科学研究費補助金（基盤研究 C)

[社会貢献活動]

1. SANE 研修　講義＆ワーク：性暴力被害女性への看護の実際, 女性の安全と健康のための支援教育センター, SANE 研修, 東京有明医療大学, 2004 年 04 月 01 日 - 現在
2. 御茶ノ水看護学雑誌編集委員長, 御茶ノ水看護学研究会, 2010 年 10 月 01 日 - 2017 年 03 月 31 日
3. 子どもの健康と環境に関する全国調査倫理問題検討委員, 国立環境研究所, エコチル調査, 2011 年 04 月 01 日 - 現在
4. SAFER 研修　ミニレクチャー＆ワーク, NPO 法人　レジリエンス, 2012 年 12 月 12 日 - 現在
5. 質的心理学会誌編集委員, 日本質的心理学会, 2013 年 04 月 01 日 - 2017 年 03 月 31 日
6. 都立松沢病院　院内研修, 都立松沢病院　相談支援室, 2017 年 01 月 18 日
7. 性暴力被害者対応チーム (SART) 研修会 in 茨城, SART 科研チーム, 茨城県立医療大学, 2017 年 02 月 17 日 - 2017 年 02 月 18 日
8. AV 出演を強要された彼女たち, NPO　女性の安全と健康のための支援教育センター, 東京医科歯科大学 共用講義室 1, 2017 年 05 月 28 日
9. カトリック中央協議会　性暴力被害相談の基本, カトリック中央協議会　子どもと女性の権利擁護のためのデスク　, 性暴力被害者支援フォローアップ研修, カトリック中央協議会　　JR 潮見駅, 2017 年 07 月 14 日 - 2017 年 07 月 15 日
10. 性暴力被害者対応チーム (SART) 研修会＠日赤医療センター, 性暴力被害対応チーム研修研究会, 文科省科研研究, 日本赤十字社医療センター　大講堂, 2017 年 07 月 17 日
11. 和歌山県　SAFER 研修, 和歌山県男女共同参画局, 新宮　性暴力被害者支援ボランティア養成研修, 和歌山県新宮市　東牟婁振興局, 2017 年 07 月 29 日 - 2017 年 07 月 30 日
12. 和歌山県　SAFER 研修, 和歌山県男女共同参画局, 御坊　性暴力被害者支援ボランティア養成研修, 和歌山県新宮市　東牟婁振興局, 2017 年 08 月 18 日 - 2017 年 08 月 19 日
13. 堺市　支援の原則—性的自己決定権とコンセントー, 堺市教育委員会　性暴力被害の予防と対応研修　2017, 2017 年 09 月 07 日

14. 身近な人が性暴力にあったら · · · ともに生き，変化をおこす, エセナ 5, エセナ 5　10 周年記念講演, 東京ウィメンスプラザ, 2017 年 11 月 03 日

15. 日本看護科学学会専任査読委員

在宅ケア看護学

Home Care Nursing

教授　本田彰子
講師　内堀真弓

院生　石原由花
　　栗田敦子
　　柿沼直美
　　星　智子
　　相島美彌
　　佐川美枝子
　　坂野朋未

(1)　分野概要

地域包括ケアの時代に向けて、急性期・慢性期、および終末期において保健医療福祉が連携協働して地域で暮らす人々の健康の維持増進、疾患や障害を持って生活する人々への支援について、看護実践力を身に着ける教育と、関連する看護方法の開発、研究を行う。大学院教育では、特に終末期にある人々とその家族が、自宅で安心安楽な療養ができ、QOL を維持するための介入方法を探索、開発している。

(2)　研究活動

在宅看護学における実践的な問題解決または改善の方策についての研究に取り組んでいる。
1. 在宅ケアにおける自立支援からターミナルケアまでの健康状態や障害レベルに合わせた実践的研究
2. 在宅ケアにおけるアウトカム評価・ケアの提供方法・ケアマネジメント・ケアシステム・運営管理方法・継続ケア
3. 健康問題や生活問題を持つ人々の家族を単位としたケア技術の理論構築と実践への応用
4. 訪問看護を取り巻く介護医療に関わる制度およびサービス提供体制
5. 訪問看護師への支援体制作り
6. 神経難病患者・がん終末期患者等医療依存度の高い療養者の訪問看護
7. 在宅ケアに関わる保健福祉医療等他職種の連携
8. 訪問看護における高齢者ケア、ターミナルケア
9. 病院から在宅への移行期における緩和ケア
10. がん患者家族への在宅での療養支援
11. 地域住民のネットワーク形成
12. 訪問看護師の現任教育
13. 慢性疾患患者のセルフケア支援
14. 慢性疾患患者の継続看護

(3)　教育活動

学部教育においては、２年生を対象とした講義では、在宅ケアにおける制度、および地域社会における保健福祉医療の資源等についての基礎的内容について教育している。

３年生を対象とした講義・演習・実習では、施設医療からの移行期から在宅ターミナルに至るまでの訪問看護に関する仕組み、看護技術、他職種連携等の理論と実践、さらに介護保険・医療保険等、諸制度のもとでの療養支援に関する制度利用の仕組み、サービス提供体制、ケアマネジメントについて学びを深めている。演習では具体的な訪問看護技術、および看護の展開を学ぶ機会としている。臨地実習においては、訪問看護ステーションの実習のみならず、地域包括支援センターにおけるケアマネジメント、予防介護に関する活動の実際、および病院の退院調整部門における退院支援の実際について体験を通して理解を深めている。
卒業研究では、学生の関心を尊重し学生と相談してテーマを決め、適切な研究フィールドを提供することによって、実践的な在宅ケア看護研究ができるように指導している。

大学院教育においては、訪問看護、退院調整支援、地域における他職種との連携、在宅ターミナルケア等の研究課題に対する講義演習を行い、これらの学習と臨床経験を基に、高齢社会における在宅看護の課題に注目し、それぞれ実践的な研究に取り組む支援をしている。在宅看護に対する期待が高まる現在の社会情勢を鑑み、実践の場で活動ができ、かつ、今後指導的立場で教育・実践・研究に関われる人材の育成を目指している。

(４)　教育方針

在宅看護は対象の年代、疾患を特定せず、広く対象のニーズに対応できる看護を提供するものである。よって、他の領域の講義演習、および実習での学習を踏まえて、それを統合する形で対象者にケアを提供することが求められる。また、生活の場を重視した援助は、医療職のみならず、介護福祉職や一般の住民と連携をとることが求められる。社会の一員としての立場をとりつつ、ケア提供ができることも求められる。このような在宅看護の特徴を伝えていくことを大切にしたい。

(５)　臨床活動および学外活動

訪問看護の職能団体である日本訪問看護財団の活動には、「調査研究活動」「人材育成研修活動」「研究支援（研究倫理審査委員会）活動」等に加わっている。また、訪問看護師の実践における学習支援プログラムの開発の研究は、現任教育の課題に取り組むものであり、実習受け入れ訪問看護ステーションとの関係強化につながると考えられる。

(６)　臨床上の特色

臨床活動のほとんどが、附属病院以外の場となっており、医学部附属病院を中心とした臨床看護に貢献することが少ない。しかし、在院日数が短くなっている現在、退院調整や外来看護も在宅看護に含まれると考えられ、地域での教育研究活動・実践活動を外来看護や退院支援につなげることで、双方にとっての発展が期待できる。
特に、地域包括ケアシステム構築が急務である現在、高齢者療養支援に留まらず、地域に住む人々の健康の維持増進、住み慣れた自宅での看取りに関わる看護職が求められており、看護基礎教育、および現任教育で在宅ケアを担える看護職の育成に貢献できると考える。

(７)　研究業績

[原著]

1. Reiko Takeu, Akiko Honda. Development and evaluation of community residents participating in livelihood support system for community-dwelling cancer patients (CPL-CCP system) J. Ochanomizu Asso. Acad. Nurs.. 2017.01; 11(1/2); 1-28

[講演・口頭発表等]

1. 前田留美, 岩岡文絵, 太田沙紀子, 本田彰子, 緒方泰子. 「インストラクショナル・デザインを用いた施設の問題解決に向けた教育プログラム」の作成支援. 第 9 回日本医療教授システム学会総会 2017.03.02 広島市

2. 前田留美, 山下直美, 浅香えみ子, 太田沙紀子, 本田彰子, 緒方泰子. 「効果・効率・魅力ある教育」によるスタッフ育成と現場の課題解決インストラクショナル・デザインを用いた 院内研修設計と展望. 第 21 回日本看護管理学会学術集会 2017.08.20 横浜市

3. 腰本 さおり, 有本 正子, 斎藤 恵子, 内堀 真弓, 橋爪 顕子, 天野 晃滋, 中島 康晃, 松島 英介. 外来化学療法を受けるがん患者の栄養相談の希望とその背景要因. 第 30 回日本サイコオンコロジー学会総会 · 大 23 回日本臨床死生学会総会合同大会 2017.10.14 東京都

4. 本田彰子, 菊池和子, 炭谷靖子, 正野逸子, 荒木晴美, 上野まり, 栗本一美, 平山香代子, 王麗華, 土平俊子, 緒方泰子, 山崎智子, 内堀真弓. 地域連携自己学習プログラムの開発―ケアチームの「つながる力」「つなげる力」を強める人材育成―. 第 37 回日本看護科学学会学術集会 2017.12.06 仙台市

5. 山﨑智子、内堀真弓、本田彰子、矢富有見子、田上美千佳、緒方泰子、森田久美子. 地域包括ケアを担う看護師育成のための臨地実習教育に関する実態調査（報告 2）実習方法改善に向けて. 第 37 回日本看護科学学会学術集会 2017.12.17 仙台国際センター

6. 柿沼直美, 本田彰子, 内堀真弓, 山﨑智子, 神山吉輝. 訪問看護ステーションにおけるリフレクション志向型カンファレンスの学習指標開発―信頼性 · 妥当性の検討―. 第 37 回日本看護科学学会学術集会 2017.12.17 仙台市

7. 山﨑智子, 内堀真弓, 本田彰子, 矢富有美子, 田上美千佳, 緒方泰子, 森田久美子, 井上智子. 地域包括ケアを担う看護師育成のための臨地実習教育に関する実態調査（報告 2）実習方法改善に向けて. 第 37 回日本看護科学学会学術集会 2017.12.17 仙台市

8. 内堀 真弓, 山崎 智子, 本田 彰子, 矢富 有見子, 田上 美千佳, 緒方 泰子, 森田 久美子, 井上 智子. 地域包括ケアを担う看護師育成のための臨地実習教育に関する実態調査（報告 1） 実習指導体制からの検討 . 第 37 回日本看護科学学会学術集会 2017.12.17 仙台市

[社会貢献活動]

1. 日本看護研究学会学術集会　教育セミナー座長, 日本看護研究学会, 愛知県, 2017 年 08 月 29 日 - 2017 年 08 月 30 日

2. 日本在宅看護学会学術集会　口演座長, 日本在宅看護学会, 山梨県立看護大学, 2017 年 11 月 25 日 - 2017 年 11 月 26 日

3. 難病看護師研修会, 日本難病看護学会, 2017 年 12 月 02 日 - 2017 年 12 月 03 日

4. 日本看護科学学会学術集会　口演座長, 日本看護科学学会, 仙台市, 2017 年 12 月 16 日 - 2017 年 12 月 17 日

がんエンドオブライフケア看護学

End-of-Life Care and Oncology Nursing

准教授　山﨑　智子

院生　三部　ひさこ
田村　里佳
伏見　真由
柳谷　利恵
牧野　倫子
西塚　祐樹
福島　綾華

(1)　分野概要

本分野では、がん患者を中心に、診断・治療初期、外来治療継続の時期、人生の終末の時期にある患者や家族の意思決定、症状緩和や苦悩についての体験を明らかにすること、さらには残された遺族の体験や困難を明らかにし、看護支援の必要性や支援のあり方を追求するとともに、研究成果の還元によるがんエンドオブライフケア看護学の構築を目指している。

(2)　研究活動

本分野では、がんの罹患から終末期に至るまでの様々な病期にある患者・家族の苦悩を理解し、自身の望む生き方がかなえられる意思決定支援や患者・家族の力を高める看護支援や遺される人々への苦悩に寄り添い、生き抜く力を支えるケアについても探求している。

1．がん再発期にある患者の希望を支える看護支援の開発
2．壮年期のがん患者とその子供を支える看護支援
3．がんの再発を繰り返す患者のレジリエンスを支える看護支援の開発
4．治癒の望めない進行がん患者と家族の終末期を支える看護支援
5．がん患者との死別を体験した遺族へのグリーフケア
6．患者と死別した看護師のグリーフを支援するプログラムの開発

(3)　教育活動

学部教育においては、4年生の緩和ケア看護学の講義で、病院での医療・看護のみならず、人々が暮らしている自宅を療養の場としてケアを展開することへの理解を深める。そのために、在宅ホスピスを中心に、終末期にある人々と家族の特徴を理解し、QOL の向上を目指した看護について、自宅での症状コントロールや療養の体制作り、看取りおよびその後の家族に対する看護の理解を目指している。

大学院教育では、がん看護の専門性の追求と発展の教育研究に加え、高度実践者としてのがん専門看護師（CNS）教育を行っている。
5年一貫制博士課程の利点をいかして、5年間の中で自身の追求したい研究テーマに合わせて、柔軟に実習を組

み込みながら研究を進めることができるようにしている。

(4)　教育方針

常に一人の人として、よく生き、よく死ぬことについて考えを深め、死生観を醸成する。それらを基盤にして、人生の危機にある他者を援助する看護について考えることが出来る実践者、研究者を育成する。
さらにコミュニティーの中においても、病気を持っていても持っていなくても、人としてよく生き、よく死のうとする人々とともに考え、生と死について考えを深めるための手助けをする役割を果たす人になることを目指す。

(5)　臨床活動および学外活動

がんを罹患した人々が、自身の気持ちや体験を発信するコミュニティーに参加し、体験を書き起こし記録するなどの活動を支えている。
地域の中でがんに罹患した人々、自宅で終末期を過ごす人々を支える訪問看護の現場において看護活動を行っている。

コミュニティーにおいて、がんに罹患した患者・家族・遺族、そのような体験はないが自身の死やがんについて考える人々が集う、「がん哲学外来・聖橋プラムカフェ」を大学院生が主催し、分かち合いの場の提供と支援を行っている。
家族に限らず、愛する対象を亡くし遺された人々を対象として、GCC 認定グリーフカウンセラーとしてカウンセリングを行っている。

(6)　臨床上の特色

実習や研究を行う場は、がんに罹患した患者・家族の存在するところ、どこにおいても看護の役割について考える場となりうる。
病院施設、在宅療養の場のみならず、コミュニティにおいても、患者・家族がいかに自分らしく生きるか、そのためにどの様な人的・物的資源を活用して支援をしていけるかを考えていく。

(7)　研究業績

[書籍等出版物]

1. 中島恵美子、竹内佐知恵、山﨑智子他. ナーシンググラフィカ　成人看護学④　周手術期看護　第 3 版. メディカ出版, 2017.01

[講演・口頭発表等]

1. 山﨑智子. がんエンドオブライフケアとがん哲学外来. がん哲学外来ナース部会第 3 回シンポジウム 2017.06.10 東中野

2. 伏見真由、山﨑智子. がん患者との死別に直面する家族の体験　国内の質的研究の統合より. 日本家族看護学会第 24 回学術集会 2017.09.02 千葉県千葉市　東京ベイ幕張ホール

3. 本田彰子, 菊池和子, 炭谷靖子, 正野逸子, 荒木晴美, 上野まり, 栗本一美, 平山香代子, 王麗華, 土平俊子, 緒方泰子, 山崎智子, 内堀真弓. 地域連携自己学習プログラムの開発―ケアチームの「つながる力」「つなげる力」を強める人材育成―. 第 37 回日本看護科学学会学術集会 2017.12.06 仙台市

4. 山﨑智子、内堀真弓、本田彰子、矢富有見子、田上美千佳、緒方泰子、森田久美子. 地域包括ケアを担う看護師育成のための臨地実習教育に関する実態調査（報告 2）実習方法改善に向けて. 第 37 回日本看護科学学会学術集会 2017.12.17 仙台国際センター

5. 柿沼直美, 本田彰子, 内堀真弓, 山﨑智子, 神山吉輝. 訪問看護ステーションにおけるリフレクション志向型カンファレンスの学習指標開発—信頼性・妥当性の検討—. 第 37 回日本看護科学学会学術集会 2017.12.17 仙台市

6. 内堀 真弓, 山崎 智子, 本田 彰子, 矢富 有見子, 田上 美千佳, 緒方 泰子, 森田 久美子, 井上 智子. 地域包括ケアを担う看護師育成のための臨地実習教育に関する実態調査（報告 1） 実習指導体制からの検討 . 第 37 回日本看護科学学会学術集会 2017.12.17 仙台市

国際看護開発学

International Nursing Development

教授　　近藤　暁子
非常勤講師
Ａｎｎ　Ｌ．　Ｅｃｋｈａｒｄｔ
非常勤講師

ＣＨＩＡＮＧ　Ｃｈｕｎｇ　ＬｉｍＶｉｃｏ
非常勤講師
駒形　朋子
非常勤講師
山崎　久美子
非常勤講師

ＭＡＢＥＬ　Ｃ．　ＥＺＥＯＮＷＵ
非常勤講師
錢　淑君
大学院生　栗原　淳子
大学院生　牧野　倫子
学生　　ＡＢＵＬＩＥＺＩ　ＲＥＮＡＧＵＬＩ

(１)　分野概要

国際看護開発学分野は、世界の看護をリードする卓越した教育・研究遂行能力をもつ人材を育成する目的で開設された分野である。主として大学院教育の中で、国際的視点の育成と看護国際人に必要なアカデミックマナーの習得及び国際的研究を支援している。大学院講義・ゼミはすべて英語で実施し、英語運用能力の維持・向上に努めている。

(２)　研究活動

主に成人～高齢者の健康問題を中心に、国際的視点から新たな看護方法の開発を目指している。諸外国との国際比較を通して、わが国の実情と文化・社会ニーズに即したシステムを探求している。近年の研究テーマは、急性冠症候群患者のコントロール感とアウトカムとの関連についての日米比較であり、イリノイウェスレヤン大学および昭和大学の教員と共同研究を行っている。欧米では患者のコントロール感が高いほど患者の回復が良いという研究結果が多く示されている。日本にはお任せ医療という文化があると言われているが、実際コントロール感について日米の患者と違いがあるのか、コントロール感が患者のアウトカムに影響しているのか検証する予定である。また、大学院生は外国人看護師の日本での活躍と困難について探求予定である。

(３)　教育活動

１）学部教育
学部４年生を対象として、「国際保健看護学」および「看護の統合と実践実習」を担当している。国際保健看護学では、単に諸外国の医療と看護の現状を理解するに留まらず、各国・地域の歴史・社会システムの変遷と関連から、人々のかかえる健康問題や保健・看護問題の本質を考える姿勢を養うことを重視している。遠隔講義システム

を利用し香港理工大学 Vico Chiang 講師および米国イリノイウェスレヤン大学 Ann Eckhardt 講師の講義を英語で実施ししている。

さらに学部２４年生を対象とした「実践看護英語」を自由選択科目として開講している。ネイティブスピーカーによる講義・演習では、時事の英語ニュース記事を読んでディスカッションしたり、病院での外国人患者に英語で対応する方法など総合的な専門英語の習得を目指した授業構成としている。英語によるコミュニケーションを通じて、異文化およびグローバル社会への興味関心を喚起すると共に、看護職としての自己学習課題の発見、生涯学習の動機付けにつながるよう指導を行った。

また「卒業研究」では３名の学生は文献研究を行い、１名の学生は 2015 年のネパールでの地震後災害救援活動にあたった看護師の方 12 名にインタビューを行い、看護師の活動や今後の課題についてまとめた。2015 年度の卒業生は「大学で国際看護を担当する教員の海外経験とその活用」というタイトルで国際保健医療学会で発表した。

2) 大学院教育

共通科目では「看護研究方法論」および「国際看護研究方法論」を担当している。「看護研究方法論」は主に国際比較研究の方法について講義している。「国際看護研究方法論」は、英語によるプレゼンの練習、研究計画書の作成方法を講義と学生のプレゼンによるディスカッション形式で行っている。

(４)　教育方針

人間開発学 Human Development Studies の視点に立ち、グローバル化する社会の中で日本人看護職としての役割を発揮できる人材の育成を目標としている。また、アカデミックな場における英語によるプレゼンテーションおよびコミュニケーション能力の強化に取り組んでいる。研究領域としては、グローバルな視点から成人期から老年期の健康問題の看護およびヘルスケアシステムの改善についての研究を中心として行っている。

(５)　臨床活動および学外活動

８月には海外研修としてシアトルワシントン大学病院の見学、日系老健施設での実習、ボランティア活動、シアトル大学訪問などを行っている。

(６)　研究業績

[書籍等出版物]

1. Hiroshi Hagino and Akiko Kondo. Chapter 69 Common fractures in older adults: epidemiology and outcomes, Section 7 Mobility disorders: prevention, impact, and compensation, IN Jean-Pierre Michel, B. Lynn Beattie, Finbarr C. Martin, and Jeremy D. Walston (eds) Oxford Textbook of Geriatric Medicine (3 ed.) , Oxford Textbooks, Dec 2017. Oxford Textbooks, 2017.12 (ISBN : 9780198701590)

[講演・口頭発表等]

1. 足立はる奈, 織田千賀子, 近藤暁子. 看護ケア遂行過程における看護師のタイムマネジメント思考要素探索—思考要素の再検討—. 日本看護学教育学会 第 27 回学術集会 2017.08.17 沖縄

2. Tomoko Komagata, Naho Sato, Akiko Sakajo, Mami Takahashi, Yutaka Iwasaki and Aiko Yamamoto. Rearing children in revival period after the catastrophic disaster: mother’s 6 years in earthquake and tsunami affected area, Japan. TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017 2017.10.20 Bangkok, Thailand

3. Ayako Okada, Tomoko Komagata. Circumstance of working environment for nurses and educational needs for nursing managers in Socialist Republic of Vietnam. TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017 2017.10.20 Bangkok, Thailand

4. Shiori Miura, Akiko Kondo. Practices and problems of disaster nursing in Nepal by Japanese nurses -Interview with the nurses sent to Nepal when the disaster happened in 2015-. 5th International Nursing Research Conference, World Academy of Nursing 2017.10.20 Bangkok, Thailand

看護システムマネジメント学

Nursing System Management

准教授：深堀　浩樹

助教：廣山　奈津子

博士後期課程：山口　さおり、廣岡　佳代、小玉　淑巨
土肥　眞奈、エップス　美佳、折見　隆広、佐藤　浩子
岩崎　弓子、山本　亜矢

5 年一貫制博士課程：山縣　千尋、那須　佳津美
奥村　朱美、森　陽子、西川　裕理、大河原　啓文
樋口　朝霞

事務補佐員：日置　章子

(1)　分野概要

看護学の研究者 · 教育者 · 実践者が、看護学および関連領域の知見を活用して行う質の高い研究の成果を、社会構造や医療の提供体制および看護が果たしうる役割の変化を踏まえながら、国内外の学術コミュニティ · 臨床現場に発信していくことを目指して研究 · 教育に取り組んでいます。

(2)　研究活動

大学院教育では、所属する大学院生が自律して主体的に研究を行う能力と学際 · 国際間のコミュニケーションを図る能力を身につけて、将来的に自らの研究成果を、研究者 · 教育者 · 実践者として国内外の学術コミュニティ · 臨床現場に発信することができるようになることを目指して研究指導を行っています。そのため、個々の院生が、特定のテーマや方法論に縛られることなく、教員の支援を受け教員と協働しながら、自ら研究テーマを定め、そのテーマにふさわしい方法論や研究フィールドを見出して研究を進めていくことを重視しています。

(3)　教育方針

社会および医療の中での看護の位置づけを理解した上で，効果的な看護や医療の提供体制や質の保証に関する研究 · 実践についての知識を身につけ，専門職である看護職として研究 · 実践に取り組む能力を育成することを目指して教育に取り組んでいる。

1) 学部教育
1. 学部 1 年生を対象として「看護の統合と実践Ⅰ」を，学部 4 年生を対象として，「看護の統合と実践Ⅱ」，「看護の統合と実践実習Ⅰ · Ⅱ」を担当した。いずれの科目においても，社会における看護の立ち位置を意識しながら専門職として主体的に学習する能力の育成を重視した。
2. 卒業論文では 4 名の学生を担当した。学生の関心に応じて自由にテーマを設定しつつ，研究の一連のプロセスを経験できるように留意した。

2) 大学院教育

1. 博士前期課程学生を対象として「看護管理学特論」,「看護政策学特論」,「看護学研究法特論 (一部)」,「看護システムマネジメント学特論 A· B」,「看護システムマネジメント学演習」を，博士後期課程学生を対象として「看護システムマネジメント学特論」を担当した。
2. 所属大学院生が，自律して主体的に研究を行う能力と卓越したコミュニケーション能力によって必要に応じて学際 · 国際間の連携を取りつつ，国内外の研究成果を読み解くと同時に，自らの研究成果を国内外に発信することによって，ヘルスケアの質の向上に寄与することができる看護学の研究者 · 教育者 · 看護管理者となることができるように，研究環境を整え，教員 · 大学院生が協働する形で研究に取り組んでいる。そのため，大学院生が特定のテーマや方法論に縛られず，各自が研究者 · 教育者 · 看護管理者としてテーマを明確に定め，そのテーマにふさわしい方法論や研究フィールドで研究を実施することを重視している。

(4)　研究業績

[原著]

1. Kayo Hirooka, Hiroki Fukahori, Kanako Taku, Taisuke Togari, Asao Ogawa. Examining Posttraumatic Growth Among Bereaved Family Members of Patients With Cancer Who Received Palliative Care at Home. Am J Hosp Palliat Care. 2017.04; 1049909117703358

2. Kayo Hirooka, Hiroki Fukahori, Kanako Taku, Taisuke Togari, Asao Ogawa. Quality of death, rumination, and posttraumatic growth among bereaved family members of cancer patients in home palliative care. Psychooncology. 2017.04;

3. Kayoko Suzuki, Eija Paavilainen, Mika Helminen, Aune Flinck, Natsuko Hiroyama,. Identifying and intervening in child maltreatment and implementing related national guideline by public health nurses in Finland and Japan Nursing Research and Practice. 2017.04; 2017;

4. 今津陽子，佐々木吉子，三浦英恵，深堀浩樹，前田留美，川本祐子，田中加苗，濱舘陽子，宮前繁，菅原千賀子. 千代田区内の中小規模医療機関における災害対策状況とニーズの実態 日本災害看護学会誌. 2017.05; 18(3); 13-23

5. Miharu Nakanishi, Kaori Endo, Kayo Hirooka, Taeko Nakashima, Yuko Morimoto, Eva Granvik, Lennart Minthon, Katarina Nägga, Atsushi Nishida. Dementia behaviour management programme at home: impact of a palliative care approach on care managers and professional caregivers of home care services. Aging Ment Health. 2017.05; 1-6

6. 田中由香利，丸光惠，佐々木吉子，深堀浩樹，川本祐子，前田留美，大友康裕. 文京区の診療所における災害対策状況と医療者が災害対策のために希望する外部からの支援に関する実態調査 Japanese Journal of Disaster Medicine. 2017.07; 22(1); 30-37

7. Kayo Hirooka, Hiroyuki Otani, Tatsuya Morita, Tomofumi Miura, Hiroki Fukahori, Maho Aoyama, Yoshiyuki Kizawa, Yasuo Shima, Satoru Tsuneto, Mitsunori Miyashita. End-of-life experiences of family caregivers of deceased patients with cancer: A nation-wide survey. Psychooncology. 2017.07;

[総説]

1. 友滝 愛, 深堀 浩樹. ケアの根拠を、ことばにしよう!かたちにしよう!　リハビリ病棟における EBP の進め方　EBP を促進するためには? リハビリナース. 2017.07; 10(4); 400-404

[講演 · 口頭発表等]

1. Yoshimi Kodama, Hiroki Fukahori, Noriko Yamamoto-Mitani, Ayako Ishi, Mimi Tse. The relationship between pain prevalence or pain management and gender among Japanese university students. The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars 2017.03.09 Hong Kong

2. Kana Sato, Yasuko Ogata, Katsuyama Kimiko, Tanaka Sachiko, Kanda Katsuya, Nagano Midori,Kodama Yoshimi. The impact of workplace bullying on the health and performance of nurses in Japan. The 20th East Asian Forum of Nursing Scholoars 2017.03.10 Hong Kong

3. 廣岡 佳代, 深堀 浩樹, 宅 香菜子, 戸ヶ里 泰典, 小川 朝生. 良い看取りは在宅緩和ケアを受けたがん患者遺族の心的外傷後成長に関連するか?. 第 22 回日本緩和医療学会学術大会 2017.06.24 横浜

[受賞]

1. 学術論文優秀賞, 日本看護管理学会, 2017 年 05 月

高齢社会看護ケア開発学

Gerontological Nursing and Care System Development

教授　　緒方　泰子
助教　　湯本　淑江
助教　　上野　治香（H29.3 退職）
特任助教　森岡　典子
特任講師　前田　留美（看護キャリアパスウェイ教育研究センター）
特任助教　太田沙紀子（看護キャリアパスウェイ教育研究センター）

大学院生　博士課程（5 年一貫制）
　杉本　健太郎
　石井　典子
　佐々木美樹
　長井　聡子
　高田　聖果
　木田　亮平

大学院生　博士課程（後期）
　岩﨑　孝子

技術補佐員　藤波　景子
技術補佐員　浅海くるみ（看護キャリアパスウェイ教育研究センター）
事務補佐員　森　　美恵（H29.8 退職）
事務補佐員　神内　祐子

(1)　分野概要

高齢社会を迎え、家族を含む高齢者へのより高度で専門的な看護の実践方法（個へのアプローチ）に加え、高齢者への看護・ケアを社会の仕組みにどう位置づけていくか（社会システムへのアプローチ）といったことが求められています。後者には、対象者のニーズに応えていくためのケアマネジメントや看護管理、ケアシステムの開発が含まれます。高齢社会看護ケア開発学では、高齢社会を生きる人々を支える看護・ケアに関して、微視的・巨視的視点を駆使し、新しい学問及び専門領域として高齢者への看護学を確立していくため、また、国内外の動向をふまえリーダーシップを発揮できるような人材養成のために、学際的・国際的な教育研究活動の推進を目指しています。

(2)　研究活動

1．高齢社会を支える看護・ケアシステムに関する研究
2．看護ケアの質に関する研究
3．看護管理学に関する研究
4．望ましいアウトカムを達成しうる健康的な職場環境に関する研究　など

(3)　教育活動

学部学生への教育では、高齢者の心身・社会経済的な変化や老年期に発症しやすい健康・機能障害等の観点から老年期にある対象の理解、アセスメント技術、高齢者へのリハビリテーションの概念や理論を学ぶ機会を提供しています。また、施設実習を通じて理論と実践を統合し看護援助を創造していく知識・技術の基盤づくりを行っています。さらに、学生個々の研究疑問にもとづく卒業論文作成を通じて、既存の方法にとらわれず、新たな方法論の開発につながるような、専門性の高いあるいは学際的な観点からの研究機会を提供しています。

大学院では、研究方法を理解し実践できるよう、高齢者への看護・ケアや研究方法に関する英文書籍の輪読、研究法の演習を行い、関連分野の基礎知識と最新知識を研究に反映できるよう国内外の研究論文の抄読を行っています。各学生の研究テーマに応じた教育・支援により、高齢社会看護ケア開発学といった領域において、国内外の研究を牽引していけるような研究者養成を目指しています。

(4)　研究業績

[原著]

1. Noriko Morioka, Jun Tomio, Toshikazu Seto, Yasuki Kobayashi. The association between higher nurse staffing standards in the fee schedules and the geographic distribution of hospital nurses: A cross-sectional study using nationwide administrative data. BMC Nurs. 2017.05; 16; 25

2. 今津 陽子, 佐々木 吉子, 三浦 英恵, 深堀 浩樹, 前田 留美, 川本 祐子, 田中 加苗, 濱舘 陽子, 宮前 繁, 菅原 千賀子. 千代田区内の中小規模医療機関における災害対策状況とニーズの実態 日本災害看護学会誌. 2017.05; 18(3); 13-23

3. Kentaro Sugimoto, Masayo Kashiwagi, Nanako Tamiya. Predictors of preferred location of care in middle-aged individuals of a municipality in Japan: a cross-sectional survey. BMC Health Serv Res. 2017.05; 17(1); 352

4. 今津陽子、佐々木吉子、三浦英恵、深堀浩樹、前田留美、川本祐子、田中加苗、濱舘陽子、宮前繁、菅原千賀子. 千代田区内の中小規模医療機関における災害対策状況とニーズの実態 日本災害看護学会誌. 2017.06; 18(3); 13-23

5. 須永 唯, 篠原 美代, 須賀 瑛子, 陳 菜穂, 前田 留美, 原田 裕美. 終末期へ向かう思春期の子どもと母親に厳しい態度をとる父親への介入　家族関係に着目した看護支援 小児がん看護. 2017.09; 12(1); 17-24

6. 山崎 彩香, 藤波 景子, 湯本 淑江, 上村 聖果, 霜越 多麻美, 森 陽子, 緒方 泰子. 看護スタッフが必要としている支援と看護師長が提供している支援 日本医療・病院管理学会誌 . 2017.10; 54(4); 223-230

7. Kentaro Sugimoto, Yasuko Ogata, Masayo Kashiwagi, Haruka Ueno, Yoshie Yumoto, Yuki Yonekura. Factors associated with deaths in 'Elderly Housing with Care Services' in Japan: a cross-sectional study. BMC Palliat Care. 2017.11; 16(1); 58

8. Takako Iwasaki, Noriko Yamamoto-Mitani, Kana Sato, Yoshie Yumoto, Maiko Noguchi-Watanabe, Yasuko Ogata. A purposeful Yet Nonimposing Approach: How Japanese Home Care Nurses Establish Relationships With Older Clients and Their Families. J Fam Nurs. 2017.11; 23(4); 534-561

[総説]

1. 西岡みどり，網中眞由美，緒方泰子. 伴侶動物との生活が心臓血管疾患リスクに与える影響：文献検討 国立看護大学校研究紀要. 2017.01; 16(1); 40-45

2. 田中由香利, 丸　光恵, 佐々木吉子, 深堀浩樹, 川本祐子, 前田留美, 大友康裕. 文京区の診療所における災害対策状況と医療者が災害対策のために希望する外部からの支援に関する実態調査 Japanese Journal of Disaster Medicine. 2017.07; 22(1); 30-37

3. 前田　留美. 組織の課題解決に寄与する臨床教育者の育成ー看護キャリアパスウェイ教育研究センターの挑戦ー 2017.12; 7(1); 46-49

[講演・口頭発表等]

1. 杉田由加里, 緒方泰子, 石丸美奈, 田中美延里, 石川麻衣, 土屋裕子, 藤木美恵子. わが国の行政保健師の人材育成方法に関する文献検討. 第 5 回日本公衆衛生看護学会学術集会 2017.01.21 仙台（宮城）

2. 永野みどり，緒方泰子，池田正臣，飯田聡，塚田邦夫、徳永恵子. 直腸癌によるストーマ造設術の局所合併症. 第 34 回日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会総会 2017.02.17 名古屋（愛知）

3. 赤川順子, 前田留美. 造血幹細胞移植後患者の GVHD 皮膚障害に対する看護師のアセスメント. 第 39 回日本造血幹細胞移植学会 2017.03.02 くにびきメッセ・島根県民会館（島根）

4. 前田留美, 岩岡文絵, 太田沙紀子, 本田彰子, 緒方泰子. 「インストラクショナル・デザインを用いた施設の問題解決に向 けた教育プログラム」の作成支援 . 第 9 回日本医療教授システム学会総会 2017.03.02 広島市

5. Rumi Maeda, . Developing Pediatric Oncologic Emergency Simulation Education Scenario with Instructional Design. the 20th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) 2017.03.09 Hong Kong, SAR

6. Kana Sato, Yasuko Ogata , Yoshimi Kodama, Kimiko Katsuyama, Sachiko Tanaka, Midori Nagano, & Katsuya Kanda. The Impact of Workplace Bullying on The Health and Performance of Nurses in Japan. The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars 2017.03.09 Hong Kong (China)

7. 前田留美. 「組織の課題解決」に寄与する臨床看護教育担当者の育成ー看護キャリアパスウェイ教育研究センターの挑戦. 第 7 回看護評価学会学術集会 2017.03.13 東京都大田区

8. 泉 日向子, 湯本 淑江, 佐々木 美樹, 木田 亮平, 上野 治香, 緒方 泰子. 高齢認知症患者における観察式痛み評価スケールの文献検討. 第 7 回日本看護評価学会学術集会 2017.03.14 東京

9. 上野 治香, 米澤 奈緒, 佐々木 美樹, 木田 亮平, 湯本 淑江, 雨宮 輝美, 本村 美和, 緒方 泰子. 認定看護師による摂食・嚥下障害に関するスタッフ育成活動の実態と困難. 第 7 回 日本看護評価学会学術集会 2017.03.14 東京

10. Sachiko Tanaka, Yasuko Ogata, Midori Nagano, Kimiko Katsuyama, & Yoshie Yumoto. Healthy Work Environments for Retention of Hospital Nurses in Japan. Sigma Theta Tau International - Creating Healthy Work Environments 2017.03.18 Indianapolis (USA)

11. Yasuko Ogata, Kimiko Katsuyama, Sachiko Tanaka, Midori Nagano, Yoshie Yumoto, & Masaomi Ikeda. Characteristics of the Nursing Practice Environment related to Creating Healthy Work Environments for Nurses. Sigma Theta Tau International - Creating Healthy Work Environments 2017.03.18 Indianapolis (USA)

12. Midori Nagano, Yasuko Ogata, Masaomi Ikeda, Kunio Tsukada, Keiko Tokunaga, Satoru Iida. Risk factors associated with an ostomy from rectal cancer based on independence in changing ostomy appliances and peristomal irritant dermatitis. The Wound Ostomy Continence Society 49th Annual Conference 2017.05.19 Salt Lake City(USA)

13. Satoko Nagai, Yoshie Yumoto, Yasuko Ogata. A Literature Review on Work Engagement Among Nurses in Hospitals. Work, Stress and Health 2017 2017.06.10 Minneapolis Minnesota

14. 笹井佳奈, 湯本淑江, 長井聡子, 上村聖果, 上野治香, 長谷川幹, 緒方泰子. 高齢男性介護者が直面した脳卒中患者の在宅介護の経験. 日本老年看護学会第 22 回学術集会 2017.06.15 名古屋

15. Yasuko Ogata, Yoshie Yumoto, Kimiko Katsuyama, Midori Nagano, Sachiko Tanaka, & Yuki Yonekura. The Relationship between Practice Environment and Intention to Remain for Japanese Hospital Nurses. Boston 2017 Congress - International Health Economics Association (iHEA) 2017.07.08 Boston (USA)

16. 杉本健太郎, 森遥奈, 梅田悠, 野﨑静代, 柏木聖代. 介護支援専門員が捉えた認知症周辺症状を呈する高齢者の男性介護者がもつ支援ニーズ. 第 22 回日本在宅ケア学会学術集会 2017.07.15 北星学園大学

17. 杉田由加里，緒方泰子，石丸美奈，田中美延里，石川麻衣，松下光子，藤木恵美子，土屋裕子. 自治体のミドルマネジャー保健師が認識している役割行動. 第 20 回日本地域看護学会学術集会 2017.08.05 別府（大分）

18. 上村聖果, 森岡典子, 佐々木美樹, 緒方泰子. 看護部長の特性とスタッフ看護職の心理的エンパワーメント・離職との関連. 第 21 回日本看護管理学会学術集会 2017.08.19 神奈川

19. 緒方泰子. マグネット病院特性からみた看護職の Healthy Work Environment（シンポジウム：職場を健康的な環境 (Healthy Work Environment) へとシンカさせる看護管理の力）. 第 21 回日本看護管理学会学術集会 2017.08.19 横浜 (神奈川)

20. 前田留美, 山下直美, 浅香えみ子, 太田沙紀子, 本田彰子, 緒方泰子. 「効果 · 効率 · 魅力ある教育」によるスタッフ育成と現場の課題解決インストラクショナル · デザインを用いた 院内研修設計と展望. 第 21 回日本看護管理学会学術集会 2017.08.20 横浜市

21. 前田留美, 山下直美. スタッフを「主体的な学習者」に変える現場シミュレーション（In-Situ シミュレーショ
ヱ) 臨床と大学の共同実践事例から . Nursing SUN 2017.08.27 東京

22. 杉田由加里，緒方泰子，石丸美奈，田中美延里，石川麻衣，松下光子，藤木恵美子，土屋裕子. リーダー保健師に期待される役割行動とは. 第 23 回千葉看護学会学術集会 2017.09.09 千葉

23. 小林 永治, 上野 治香, 佐々木 美樹, 木田 亮平, 湯本 淑江, 石川 ひろの, 緒方 泰子. インターネットを利用して医療情報を収集する医療利用者の特性　外来通院する糖尿病患者を対象に. 第 9 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会 2017.09.17 京都

24. 佐々木美樹，湯本淑江，緒方泰子. スタッフ看護師を心理的にエンパワーする護師長の行動—インタビュー調査—. 第 55 回日本医療 · 病院管理学会学術総会 2017.09.18 東京

25. 木田亮平, 藤波景子, 湯本淑江, 緒方泰子. 女性看護師における仕事役割 · 家庭役割の多重役割とバーンアウトとの関連. 第 55 回 日本医療 · 病院管理学会学術総会 2017.09.18 東京

26. 今中雄一，池田俊也，寺崎仁，上條由美，廣瀬昌博，白髪昌世，緒方泰子，原広司，田中将之，大野達也. 医療管理におけるコンピテンシーの枠組みの整理. 第 55 回日本医療 · 病院管理学会学術総会 2017.09.19 東京

27. 緒方泰子，森岡典子，湯本淑江，勝山貴美子，田中幸子，菅田勝也. 看護実践環境による看護職者の離職意向 · 離職行動への影響：マルチレベル分析による検討. 第 55 回日本医療 · 病院管理学会学術総会 2017.09.19 東京

28. 前田　留美. 文献検討からみる、手術室に勤務する中堅看護師の特性とキャリア発達の課題. 第 39 回手術医学会 2017.10.07 東京

29. Sachiko Tanaka, Yasuko Ogata, Kimiko Katsuyama, Midori Nagano and Yoshie Yumoto. Environmental factors of Japanese nurses to continue working healthily. The International Nursing Research Conference 2017 2017.10.20 Bangkok (Thailand)

30. 太田沙紀子, 引地博之, 村山洋史, 石丸美穂, 緒方泰子, 康永秀生. 特定事業所の居宅介護支援サービスと要介護度に関するコホート研究. 第 76 回日本公衆衛生学会総会 2017.10.31 鹿児島

31. 本田彰子, 菊池和子, 炭谷靖子, 正野逸子, 荒木晴美, 上野まり, 栗本一美, 平山香代子, 王麗華, 土平俊子, 緒方泰子, 山崎智子, 内堀真弓. 地域連携自己学習プログラムの開発—ケアチームの「つながる力」「つなげる力」を強める人材育成—. 第 37 回日本看護科学学会学術集会 2017.12.16 仙台市

32. 内堀 真弓, 山崎 智子, 本田 彰子, 矢富 有見子, 田上 美千佳, 緒方 泰子, 森田 久美子, 井上 智子. 地域包括ケアを担う看護師育成のための臨地実習教育に関する実態調査（報告 1） 実習指導体制からの検討 . 第 37 回日本看護科学学会学術集会 2017.12.17 仙台市

33. 緒方泰子. 組織がめざす成果や質の高い看護につながる職場環境の特徴—マグネット病院特性にみる看護管理者のあり方より—. 平成 27 年度　滋賀県看護協会　トップセミナー　看護管理者のマネジメント能力開発　シリーズ 1（トップマネジャー編）

[Works]

1. （前田）小児看護入門シリーズ　DVD 教材 日本語版監修（共著） 第 1 巻　新生児、乳児と幼児/未就学児 第 2 巻 学童/思春期、青年期, 教材, 2010 年 04 月 - 現在

[その他業績]

1. Reviewer (太田), 2017 年 01 月
AIMA 2017 Annual Symposium (AMIA: American Medical Informatics Association)

2. External peer reviewer(太田), 2017 年 01 月
Cochrane Library

[社会貢献活動]

1. 山梨県看護協会認定看護管理者研修セカンドレベル教育過程「医療経済論」講師 (森岡), 山梨県看護協会, 2013 年 08 月 08 日 - 現在
2. 日本看護評価学会学術集会　実行委員（湯本）, 2014 年 03 月 - 現在
3. 一般社団法人薬局共創未来人材育成機構　薬剤師生涯研修センター　企画実行委員 （前田）, 2015 年 04 月 01 日 - 現在
4. 日本看護評価学会編集委員会委員（湯本）, 日本看護評価学会, 日本看護評価学会誌, 2016 年 03 月 01 日 - 現在
5. 日本小児血液 · がん学会　長期フォローアップ · 移行期医療委員会　委員（前田）, 2016 年 08 月 01 日 - 現在
6. 淑徳大学非常勤講師（緒方） , 2016 年 11 月 01 日 - 現在
7. 日本小児がん看護学会　編集委員、査読委員、政策委員（前田）, 2017 年 01 月 01 日 - 現在
8. 第 7 回 日本看護評価学会実行委員（木田）, 日本看護評価学会, 2017 年 03 月 13 日 - 2017 年 03 月 14 日
9. 中国 · 四国小児がん看護研修会　講師（前田）, 中国 · 四国小児がん看護研修会, 2017 年 10 月 26 日
10. 日本医療 · 病院管理学会評議員、理事（緒方）
11. 中野区区民公益活動推進協議会委員（緒方）
12. 江東区高齢者保健福祉計画 · 介護保険事業計画推進会議副委員長（緒方）
13. 全国社会福祉協議会全国社会福祉施設経営者協議会初級リスクマネジャー養成講座講師（緒方）
14. 公立大学法人首都大学東京健康福祉学部看護学科非常勤講師（緒方）
15. 日本看護評価学会編集委員会委員長（緒方）
16. 東京慈恵会医科大学非常勤講師（緒方）
17. 日本医療 · 病院管理学会事業委員会委員長（緒方）

共同災害看護学専攻

Cooperative Doctoral Course in Disaster Nursing

教　授　　佐々木　吉子
准教授　　駒形　朋子
大学院生（博士５年一貫制）
小川　裕美子
濱舘　陽子
田中　加苗
菅原　千賀子
宮前　繁
谷本　美保子
友藤　裕美
小曽根　京子
鴨田　玲子

(１)　分野概要

共同災害看護学専攻は、本学および高知県立大学、兵庫県立大学、千葉大学、日本赤十字看護大学の５大学で共同運営する５年一貫制博士課程である。構成大学が蓄積してきた災害看護の経験や資源を活かして、災害看護の深奥を極め、人々の健康社会の構築と安全・安心・自立に寄与すること、また、災害看護に関する多くの課題に的確に対応し解決するために、学際的・国際的指導力を発揮できる「災害看護グローバルリーダー」を養成することを目標としている。本学共同災害看護学専攻では、主に大規模災害発生時の防災・減災に向けた備えと発災急性期における看護の役割に着目して、学内はもとより地域住民、行政、医師会、企業等と連携した大災害への備えをテーマに研究活動を展開している。

(２)　研究活動

「共同災害看護学専攻」では、首都圏直下型大地震やテロによる特殊災害に備えた防災・減災に着目し、発災に向けた平時からの備えと、発災急性期の災害支援活動における看護の役割の確立を目指し、研究に取り組んでいる。

現在、当研究室では、研究の一環として以下のような活動をしている。
①過去の大地震や特殊災害についての事例分析
②大災害時の防災・減災に向けた国内外の取り組み状況の把握（海外文献の抄読、国内・国際学会、海外での災害研修への参加）
③大災害発生時の自助・共助強化のための産官学連携に向けた情報収集や関係作り
④大学が属する２次医療圏内の災害拠点病院の取り組みについての情報収集（関連会議への参加、災害訓練参加など）
⑤大学が属する２次医療圏内の小規模医療施設における防災・減災の取り組み状況についての基礎調査
⑥災害時の医療系大学の学生ボランティアの活用とサポートに関するシステム構築に向けた基礎調査（他専攻との共同研究）
⑦大災害被災者へのメンタルケアに関する情報収集やスキルの学習
⑧特殊災害において医療者に必要な基礎知識・スキルの学習（緊急被ばく医療者現職者研修への参加など）

現在は基盤形成のための情報収集や基礎研究が中心であるが、今後、上記研究を発展させるとともに、院生が関心のある領域での研究に取り組めるようフィールド開拓するなど、関連機関との連携を図りながら研究室一丸

となって取り組んでいる。

(3) 教育活動

「共同災害看護学専攻」は共同教育課程であり、学生はそれぞれの大学で開講される教科を相互履修し、各大学が強みとしている領域についての学習を深めている。

本学当専攻は、災害関連科目として「災害看護活動論Ⅰ」および「災害看護活動論演習Ⅰ」を担当している。災害看護活動論では、主に災害医療についての概論、災害急性期における看護実践や多職種との連携について学び、看護リーダーの役割について考察する。災害看護活動論演習Ⅰでは、国内外の災害医療・看護に関する文献講読とディスカッション、救護活動や遺族ケアなどのシミュレーション、災害専門施設の視察等を通して、実践力の向上や後方支援を含む看護リーダー能力の育成を図っている。

(4) 教育方針

将来、世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応し解決できる、学際的・国際的指導力を発揮するグローバルリーダーとして、高度な実践能力を有した災害看護実践者並びに災害看護教育・研究者を養成することを目標としている。

授業は、LMS（Learnig Management System）による事前課題の提示や提出、講義資料の配信によって事前事後学習の効率化をはかり、また、TV 会議システムを使用しての遠隔講義、高性能シミュレーターや SimView を使用した遠隔シミュレーション演習など、IT の活用により複数の拠点から受講できるように工夫している。

研究指導については、5 大学の教員による複数指導大切を敷いており、学生は自身の研究テーマに応じて、対面および遠隔システムを利用して充実した指導を受けることができるようになっている。

(5) 臨床活動および学外活動

様々な災害へ対応できる能力を養うため、先駆的に被ばく医療の教育・研究に携わってる弘前大学等との大学間の交流や、他の博士課程リーディングプログラムの大学等との交流をはかり、また近隣自治体の防災担当部門との意見交換、国会見学などのインターンシップ、東京駅近郊の自主防災組織の活動や災害訓練などに積極的に参加している。また国際学会・国内学会に積極的に参加し、学会発表や、他国の研究者・学生との英語による交流会も積極的に企画・参加しグローバルな視点を養うための工夫を諮っている。

(6) 研究業績

[原著]

1. Yoko Imazu, Nao Matsuyama, Sanae Takebayashi, Mizue Mori, Setsuko Watabe.. Experiences of patients with HIV/AIDS receiving mid- and long-term care in Japan: A qualitative study International Journal of Nursing Sciences. 2017.03;
2. 駒形 朋子, 岡田 彩子. ベトナムにおける社会変化と保健医療　看護の現状と今後の課題 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要. 2017.03; 24; 131-138
3. 山田奈津子, 佐々木吉子，井上智子. クリティカルケア看護師の侵襲的治療を受ける意思表示が困難な患者の cue の理解と看護アセスメント 日本クリティカルケア看護学会誌. 2017.04; 13(1); 49-57
4. 今津陽子，佐々木吉子，三浦英恵，深堀浩樹，前田留美，川本祐子，田中加苗，濱舘陽子，宮前繁，菅原千賀子. 千代田区内の中小規模医療機関における災害対策状況とニーズの実態 日本災害看護学会誌. 2017.05; 18(3); 13-23
5. 田中由香利，丸光惠，佐々木吉子，深堀浩樹，川本祐子，前田留美，大友康裕. 文京区の診療所における災害対策状況と医療者が災害対策のために希望する外部からの支援に関する実態調査 Japanese Journal of Disaster Medicine. 2017.07; 22(1); 30-37

[書籍等出版物]

1. Ann B. Hamric et al/ 中村美鈴, 江川幸二監訳, 佐々木吉子（分担訳）. 高度実践看護　統合的アプローチ（翻訳）. へるす出版, 2017.06 (ISBN：978-4-89269-928-3)

[講演・口頭発表等]

1. 佐々木吉子. 災害時に救急看護師に求められる実践とは—被災者と医療チームへのケアリング—. 第 67 回日本救急医学会関東地方会学術集会 2017.02.04 栃木県総合文化センター（栃木市）

2. 大脇那奈、笹倉祐輔、山下直美、佐々木吉子、世良俊樹. 救急病床おける低活動型せん妄の発症の実態. 第 38 回日本救急医学会関東地方会学術集会 2017.02.04 栃木県宇都宮市

3. 濱舘陽子、佐々木吉子、三浦英恵. 東京都千代田区の企業の防災・減災の取り組みの実態と課題. 第 22 回日本集団災害医学会総会・学術集会 2017.02.14 名古屋

4. Shigeru Miyamae、Megumi Nishigawa、Kaori Matsuo、Sayaka Sumida、Marina Inagaki、Miho Morosawa、Sayumi Nojima. Helping Vulnerable Populations: Based on Japanese Literature Review on the Role of Nurses in the Disaster Cycle. the 20th East Asian Forum of Nursing Scholars 2017.03.09 Hong Kong

5. 佐々木吉子. 救急医療における多職種連携の「アンカー」をめざして. 第 20 回日本臨床救急医学会学術集会 2017.05.27 東京

6. 木下佳子、佐々木吉子、明石惠子、中田諭、林みよ子、土屋裕美、福田友秀. 臨床研究のカベをどう突破したか　ここでいいたい！ 看護研究ウラ話. 2017.06.10 宮城県仙台市

7. 友藤裕美, 佐々木吉子, 三浦英恵, 今津陽子. 災害時の産業保健専門職による健康支援に関する文献レビュー. 日本災害看護学会第 19 回年次大会 2017.08.25 鳥取県倉吉市

8. 谷本美保子, 佐々木吉子, 三浦英恵, 今津陽子. 妊産婦の災害への備えの実態についての文献検討. 日本災害看護学会第 19 回年次大会 2017.08.25 鳥取県倉吉市

9. 田中加苗，佐々木吉子，三浦英恵. 阪神・淡路大震災被災者の 20 年間の経験—子ども時代に被災し医療的介入を受けずに生きてきた人々へのインタビュー調査—. 日本災害看護学会第 19 回年次大会 2017.08.25 鳥取県倉吉市

10. 谷本美保子. 妊産婦の災害への備えの実態についての文献検討. 日本災害看護学会第 19 回年次大会 2017.08.25 鳥取

11. 菅原　千賀子. 東日本大震災において災害関連業務に従事した自治体職員の体験. 第３１回自治体学会 2017.08.26 山梨県甲府市

12. 駒形朋子. 災害時の”食べる支援”における多職種連携とその目的（看護の立場からの指定発言）. 災害時の”食べる支援”における多職種連携とその目的 2017.09.16 東京、日本

13. 藤原正恵，佐々木吉子，西谷内由美，平尾明美，藤野智子，渕本雅昭. 臨床現場での実践からの知見を研究としてまとめよう！ 実践報告・事例報告のススメ. 第 19 回日本救急看護学会学術集会 2017.10.07 石川県金沢市

14. Tomoko Komagata, Naho Sato, Akiko Sakajo, Mami Takahashi, Yutaka Iwasaki and Aiko Yamamoto. Rearing children in revival period after the catastrophic disaster: mother’s 6 years in earthquake and tsunami affected area, Japan. TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017 2017.10.20 Bangkok, Thailand

15. Ayako Okada, Tomoko Komagata. Circumstance of working environment for nurses and educational needs for nursing managers in Socialist Republic of Vietnam. TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017 2017.10.20 Bangkok, Thailand

16. Tomoko Komagata, Bangon Bounheuang, Sengchanh Khounnavong, Souraxay Phrommala, Masue Inoue, Futoshi Nishimoto and Kazuhiko Moji. Descriptive study on situation and care for people with mental disorder in Songkhone District, Savannakhet Province, Lao PDR. The 11th National Health Research Forum, Vientiane, Lao PDR 2017.10.24 Vientiane, Lao PDR

17. 駒形朋子, Bangon Bounheuang, Sengchanh Khounnavong, Souraxay Phrommala, 井上万寿江, 西本太, 門司和彦. ラオス南部の農村地域における精神に障がいを持つ人々の日常生活と治療行動の現状. 第 32 回日本国際保健医療学会 2017.11.24 東京大学、東京

[その他業績]

1. 仙台防災未来フォーラム（西川愛海、宮前繁、佐々木康介、谷本美保子、友藤裕美）, 2017 年 03 月
所属プログラムの紹介、これまで学生が行ってきた被災地における支援活動や、国内外問わず取り組んでいる防災 · 減災活動に関し、来場者と対話 · 共有した。

2. 博士課程教育リーディングプログラムフォーラム 2017「学生ポスター発表」（鴨田玲子, 田中加苗, 小川裕美子, 濱舘陽子, 宮前繁, 菅原千賀子, 谷本美保子, 友藤裕美, 小曽根京子）, 2017 年 10 月
Acaeemia Leader のテーマで、当研究室での研究と実践への挑戦に関して発表した。
ポスタータイトル：Toward Expert Disaster Nursing practioner - To secure people's live and life under catastrophic disaster - 大災害時に人々のいのちと暮らしを守る災害看護の実践者を目指す
（2017 年 10 月 20 日 · 21 日、名古屋マリオットアソシアホテル）

3. 文京学院大学「災害看護学」授業（田中加苗、小川裕美子、濱舘陽子、宮前繁）, 2017 年 10 月
文京学院大学看護学科「災害看護学」の講義で「防災 · 減災」をテーマに 2 コマを担当した。

4. 株式会社 ファミリアのスタッフおよびマタニティクラスにおける防災教育（谷本美保子 · 有坂めぐみ · 周東美奈子）, 2017 年 11 月
株式会社 ファミリアの店頭販売スタッフ研修および、その店舗で開催するマタニティークラスで防災教育を実施した。

5. 自治体職員への防災研修（谷本美保子 · 友藤裕美 · 周東美奈子）, 2017 年 11 月
一般社団法人 (NPO 法人）地球の楽校と協働し、東日本大震災被災地域の行政職員や自治会長らを対象に避難所運営ゲームを実施した。

[社会貢献活動]

1. 東京医科歯科大学医学部附属病院研究支援（佐々木吉子）, 2005 年 10 月 - 現在
2. 日本救急看護学会　編集委員長、評議員（佐々木吉子）, 2007 年 10 月 - 現在
3. 慶應義塾大学看護医療学部非常勤講師（佐々木吉子）, 2008 年 04 月 - 現在
4. 公益社団法人日本看護協会　災害支援ナース（佐々木吉子）, 日本看護協会, 2010 年 - 現在
5. 日本クリティカルケア看護学会　理事、専任査読者（佐々木吉子）, 2010 年 06 月 - 現在
6. 博士課程教育リーディングプログラム 災害看護グローバルリーダー養成プログラム　プログラム担当者（佐々木吉子）, 2013 年 - 現在
7. 博士課程教育リーディングプログラム　災害看護グローバルリーダー養成プログラム　プログラム参画者（今津陽子）, 2014 年 04 月 01 日 - 2017 年 03 月 31 日
8. 日本看護科学学会　和文誌編集委員会専任査読委員（佐々木吉子）, 2015 年 10 月 01 日 - 現在
9. 平成 29 年度千代田区帰宅困難者対応訓練参加（佐々木吉子, 濱舘陽子, 宮前繁）, 東京駅周辺, 2017 年 03 月 06 日
10. 東日本大震災追悼 3.11 のつどい ボランティア（西川愛海、宮前繁、佐々木康介）, 東日本大震災追悼 3.11 のつどい実行委員会, 宮城県石巻市南浜町, 2017 年 03 月 11 日
11. 「ちよだモデルネットワーク（CMN)」（菅原千賀子 · 濱館陽子 · 小曽根京子）, 千代田区社会福祉協議会ちよだボランティアセンター, 千代田区社会福祉協議会かがやきプラザ, 2017 年 04 月 07 日 - 2018 年 03 月 06 日
12. 第 2 回 災害時の連携を考える全国フォーラム（菅原千賀子 · 小曽根京子 · 鴨田玲子）, 内閣府政策統括官（防災担当)、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議, 国際ファッションセンター KFC ホール, 2017 年 05 月 26 日 - 2017 年 05 月 27 日
13. 渋谷区立広尾中学校での授業、HUG(避難所運営ゲーム）の実施（亀井緑、緒方愛、梶山和美、藤井直樹、友藤裕美、周東美奈子、荒井千暎）, 渋谷区立広尾中学校, 2017 年 06 月 07 日
14. TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム（菅原千賀子）, 公益財団法人　米日カウンシルジャパン　ジョンソン · エンド · ジョンソン, 米国（ニューヨーク · ニュージャージー · ワシントン D.C）, 2017 年 06 月 24 日 - 2017 年 12 月 03 日

15. 東京 YWCA　大規模災害対応部会研修会「大規模災害時の避難所における衛生と安全」（佐々木吉子、駒形朋子、濱舘陽子、宮前繁、谷本美保子、友藤裕美、小曽根京子、鴨田玲子）, 2017 年 07 月 04 日
16. 平成 29 年度東京駅周辺防災隣組 · 千代田区医師会 · 三菱地所株式会社との医療連携訓練への参加（佐々木吉子、小川裕美子、濱舘陽子、宮前繁、谷本美保子、友藤裕美、小曽根京子）, 東京駅周辺, 2017 年 09 月 01 日
17. 岩手県陸前高田市地域子育て支援センター　園芸イベントと育児相談（駒形朋子、谷本美保子、小曽根京子、鴨田玲子）, 陸前高田市コミュニティーホール, 2017 年 09 月 07 日
18. English Parrot 英会話教室（駒形朋子）, NPO 法人クリエイティブアクト, 2017 年 10 月 01 日 - 現在
19. JICA 国際緊急援助隊感染症チーム登録（看護師 · 疫学、公衆衛生対応班）（駒形朋子）, 独立行政法人国際協力機構, 2017 年 10 月 06 日 - 現在
20. 消防職員の惨事ストレス中級研修　ボランティア（菅原千賀子 · 友藤裕美 · 谷本美保子）, 筑波大学大学院人間総合科学研究科障害発達専攻カウンセリングコース, 筑波大学東京キャンパス文京校舎, 2017 年 10 月 15 日
21. 第 16 回大阪千里メディカルラリー ボランティア (菅原千賀子、宮前繁), 大阪済生会千里病院　千里救命救急センター, 大阪府吹田市 ららぽーと EXPOCITY 周辺, 2017 年 10 月 21 日
22. 平成 29 年度　第 2 回東京駅総合防災訓練（宮前繁、小川裕美子）, JR 東日本　東京駅, JR 東京駅, 2017 年 11 月 15 日
23. 産業衛生学会学術集会　看護部会研修会「避難所運営ゲーム～職場が長期避難所となったら～」の実施 (高知県立大学　久保聡美教授 · 西川愛海 · 佐々木康介 · 友藤裕美), 2017 年 11 月 24 日
24. 東京駅周辺防災隣組第 80 回総会での机上訓練の実施（佐々木吉子、小川裕美子、濱舘陽子、田中加苗、宮前繁、友藤裕美）:「発災 3 日目一時滞在施設における帰宅困難者対応ゲーム」, 2017 年 11 月 29 日
25. 東京国際フォーラム一時滞在施設運営訓練への参加（濱舘陽子）, 2017 年 12 月 06 日
26. 平成 29 年度国立大学附属病院大学病院災害管理技能者（ＵＤＭＥ）養成研修会（小川裕美子、宮前繁）, 東北大学災害科学国際研究所, 2017 年 12 月 14 日 - 2017 年 12 月 15 日
27. English Parrot 特別講演 看護の国際協力活動について （駒形朋子）, 公益社団法人東京都看護協会, 2017 年 12 月 22 日
28. ラオス国第 11 回健康診断活動（宮前繁、小曽根京子）, 特定非営利活動法人クリエイティブアクト, ラオス国, 2017 年 12 月 24 日 - 2017 年 12 月 30 日
29. 株式会社アジア共同設計コンサルタントへの技術協力（駒形朋子、宮前繁、谷本美保子、友藤裕美）, 2017 年 12 月 25 日 - 現在

分子生命情報解析学

Biochemistry and Biophysics

教授：　赤澤　智宏
准教授：　鈴木　喜晴
助教：　馬渕　洋
プロジェクト助教：　須藤　絵里子グレース
大学院生：石井　佳菜、緒方　勇亮、小柳　明日香、木倉　直美、吉田　茉由、林　千香子

(1)　分野概要

本分野は生体検査科学専攻の生命情報解析開発学講座として、基礎医学から検査管理・社会医学系に至る多くの科目を担当している。分野のスタッフは、教授　赤澤の下、准教授　鈴木、助教　馬渕、プロジェクト助教　須藤の4人が一体となって、教育、研究に当たっている。また、赤澤は文部科学省等の行政に関する役職を兼務し、科学、大学という枠組みを超えて社会的役割を果たしている。

(2)　研究活動

神経堤細胞の発生と分化：神経堤細胞の発生分化に関わる遺伝子 Sox10 のプロモーター領域を全て含むマウス BAC クローンに緑色蛍光蛋白を挿入したトランスジェニックマウスを作成し、神経堤細胞の in vivo での挙動をイメージング技術によって解析する。小児先天性疾患である Hirschsprung 病について分子病態解析を行っている。

幹細胞生物学：神経堤幹細胞、間葉系幹細胞について細胞生物学的解析を行っている。

Teneurin-4 の分子機能解析：膜貫通型タンパク質である Teneurin-4 の機能喪失マウスについて本態性振戦のモデル動物として解析している。

(3)　教育活動

学部教育科目については、保健衛生学科看護学専攻、検査技術学専攻合同の『生化学講義』、検査技術学専攻の『医療概論・関係法規』、『遺伝子・染色体検査学実習』、『選択科目：神経科学』を赤澤が、『遺伝子・染色体検査学講義』、『生化学実習』を鈴木が担当している。

(4)　教育方針

本分野が担当する学部教育においては、基礎医学および臨床医学の様々な知識を関連付けて学べるように配慮している。

生化学は生体の構造と機能を分子レベルで理解させることを目指している。生命現象の本質的な理解につながる生化学の知見を体系的に習得することを目標としており、その上で医療において特に必要な生化学的知識と考え方を教授している。生化学講義は看護学専攻・検査技術学専攻の共通科目として医学の基幹をなすことから、学生の理解度に応じた講義を実施して習熟度を高めている。

遺伝子・染色体検査学講義においては、本質的な生命現象の理解と最新の知識の習得に重点をおいて系統的に講義を行っている。単なる遺伝性疾患の羅列にとどまることなく、ダイナミックなゲノム医学を基礎から高度な医学に至るまで解説する。遺伝子・染色体検査学実習においては、実験系の本質的理解を目指し、学生自身が「なぜ」「どのようにして」という思考過程を、学生同士・教官との討議を通じて体得することを目的としている。

神経科学講義は、単なる流行としての「脳科学」ではなく、生命現象の一分野として形態学・生理学・生化学相

互を統合した、総合人間科学としての神経科学を伝授するように体系的な講義を行っている。

(5) 研究業績

[原著]

1. Ophelia Veraitch, Yo Mabuchi, Yumi Matsuzaki, Takashi Sasaki, Hironobu Okuno, Aki Tsukashima, Masayuki Amagai, Hideyuki Okano, Manabu Ohyama. Induction of hair follicle dermal papilla cell properties in human induced pluripotent stem cell-derived multipotent LNGFR(+)THY-1(+) mesenchymal cells. Sci Rep. 2017.02; 7; 42777

2. Masahiro Takeda, Katsumi Miyahara, Manabu Okawada, Chihiro Akazawa, Geoffrey J Lane, Atsuyuki Yamataka. Semaphorin 3A expression following intestinal ischemia/reperfusion injury in Sox10-Venus mice. Pediatr. Surg. Int.. 2017.03; 33(3); 383-388

3. Eriko Grace Suto, Yo Mabuchi, Nobuharu Suzuki, Koji Suzuki, Yusuke Ogata, Miyu Taguchi, Takeshi Muneta, Ichiro Sekiya, Chihiro Akazawa. Prospectively isolated mesenchymal stem/stromal cells are enriched in the CD73(+) population and exhibit efficacy after transplantation. Sci Rep. 2017.07; 7(1); 4838

4. Masahiro Takeda, Katsumi Miyahara, Chihiro Akazawa, Geoffrey J Lane, Atsuyuki Yamataka. Sensory innervation of the anal canal and anorectal line in Hirschsprung's disease: histological evidence from mouse models. Pediatr. Surg. Int.. 2017.08; 33(8); 883-886

5. Naho Fujiwara, Nana Nakazawa-Tanaka, Katsumi Miyahara, Eri Arikawa-Hirasawa, Chihiro Akazawa, Atsuyuki Yamataka. Altered expression of laminin alpha1 in aganglionic colon of endothelin receptor-B null mouse model of Hirschsprung's disease. Pediatr. Surg. Int.. 2017.10;

6. Nana Nakazawa-Tanaka, N Fujiwara, K Miyahara, S Nakada, E Arikawa-Hirasawa, C Akazawa, M Urao, A Yamataka. The effect of laminin-1 on enteric neural crest-derived cell migration in the Hirschsprung's disease mouse model. Pediatr. Surg. Int.. 2017.10;

7. Nobuharu Suzuki, Kaori Sekimoto, Chikako Hayashi, Yo Mabuchi, Tetsuya Nakamura, Chihiro Akazawa. Differentiation of Oligodendrocyte Precursor Cells from Sox10-Venus Mice to Oligodendrocytes and Astrocytes. Sci Rep. 2017.10; 7(1); 14133

[総説]

1. Takazumi Yasui, Yo Mabuchi, Satoru Morikawa, Katsuhiro Onizawa, Chihiro Akazawa, Taneaki Nakagawa, Hideyuki Okano, Yumi Matsuzaki. Isolation of dental pulp stem cells with high osteogenic potential. Inflamm Regen. 2017.04; 37; 8

[特許]

1. 移植効率を向上させる間葉系幹細胞の純化方法

[受賞]

1. 第 38 回炎症再生医学会優秀演題賞, 2017 年 07 月

[その他業績]

1. 「間葉系幹細胞の新鮮純化可能な細胞表面マーカーを同定」ー 間葉系幹細胞を用いた移植治療効果を向上させる可能性 ー, 2017 年 07 月
   Scientific Reports

2. 「間葉系幹細胞の新鮮純化可能な細胞表面マーカーを同定」ー 間葉系幹細胞を用いた移植治療効果を向上させる可能性 ー, 2017 年 07 月
   東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科分子生命情報解析学分野の赤澤智宏教授、須藤絵里子グレースプロジェクト助教、馬渕洋助教らのグループは、間葉系幹細胞特異的に存在する細胞表面マーカーとして ecto-5'-nucleotidase (CD73) を同定しました。この研究は文部科学省『科学技術人材育成のコンソーシアム

の構築事業」、日本医療研究開発機構（AMED）「再生医療実用化研究事業」、文部科学省科学研究費補助金の支援を受けた人材が実施したもので、その研究成果は、国際科学誌 Scientific Reports（サイエンティフィック・リポーツ）オンライン版に、2017 年 7 月 6 日午前 10 時（英国時間）に発表されます。

3. 遺伝子改変マウス（Sox10-Venus マウス）を用いた簡便なオリゴデンドロサイト（OPC）分化解析手法の開発, 2017 年 10 月
東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科分子生命情報解析学分野の赤澤智宏教授、鈴木喜晴准教授、関本香織大学院生の研究グループは、中枢神経系の髄鞘形成細胞であるオリゴデンドロサイトの前駆細胞の分化解析における遺伝子改変マウス（Sox10-Venus マウス）の有用性を報告しました。この研究は文部科学省「科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業」、文部科学省科学研究費補助金の支援で実施され、その研究成果は、国際科学誌 Scientific Reports (サイエンティフィック・リポーツ) に、2017 年 10 月 26 日午前 10 時（英国時間）にオンライン版で発表されます。

4. 「遺伝子改変マウス（Sox10-Venus マウス）を用いた簡便なオリゴデンドロサイト (OPC) 分化解析手法の開発」, 2017 年 10 月
Scientific Reports

5. 「遺伝子改変マウス（Sox10-Venus マウス）を用いた簡便なオリゴデンドロサイト (OPC) 分化解析手法の開発」, 2017 年 10 月
Scientific Reports

6. 文部科学省　科学研究費補助金 （基盤研究 C）「電気物性を指標とした組織幹細胞の単一解析技術の開発」研究代表者

7. 文部科学省　科学研究費補助金 （基盤研究 C）「間葉系幹細胞の分化スイッチ制御に関わる遺伝子の解析」分担研究者

8. 文部科学省　科学研究費補助金 （若手研究 B）「新規髄鞘形成分子テニューリン 4 の分子機能メカニズム解明とその応用を目指す研究」研究代表者

[社会貢献活動]

1. 国立精神・神経医療研究センター神経研究所客員研究員

2. 米国国立保健衛生研究所（NIH）Special Volunteer

形態・生体情報解析学

Anatomy and Physiological Science

教授　星　治
助教　長　雄一郎
大学院生：（博士前期）杉崎　綾奈　　（博士後期）中井　未来

(1)　分野概要

形態・生体情報解析学分野は、解剖学・生理学を主な担当科目としている。解剖学は正常なからだの形態と構造を器官から細胞、分子レベルまで究明するもので、医学の最も基礎的な領域である。生理学は人体の各構成要素がどのようなメカニズムで発現し、全体として統合されているかを追及する教科である。人体全体を科学的にとらえる上で、解剖学と生理学は車の両輪のようなもので、専門科目を学ぶための基盤となる。学生には確固たる基盤が形成され、臨床への橋渡しがうまくいくよう教育を行っている。

(2)　研究活動

電子顕微鏡をはじめとしたさまざまな顕微鏡技術を用いて、生体組織の微細構造を観察し、新たな科学的知見を得ることに主眼をおいて進めている。なかでも原子間力顕微鏡の医生物学分野への応用については、新規のイメージング技術の開発など、先端的な内容の展開を図っている。

(3)　教育活動

検査技術学専攻：人体構造学講義Ⅰ、人体構造学講義Ⅱ、人体構造学実習、生理検査学講義Ⅰ、
生理検査学実習Ⅰ、電子顕微鏡学、健康食品総論、先端医療技術論、総合講義、卒業研究
看護学専攻：解剖学Ⅰ、解剖学Ⅱ、生理学、専門基礎合同演習（解剖学実習）
生体検査科学専攻：形態・生体情報解析学特論 A、形態・生体情報解析学実験 A、形態・生体情報解析学特論

(4)　教育方針

基礎医学の学習や研究を興味をもって学生が能動的に行えるように、学生からフィードバックされる内容を参考に、講義・実習の方法を改良しながら教育・研究指導に臨んでいる。

(5)　研究業績

[原著]

1. Ayaka Ohashi, Aya Murata, Yuichiro Cho, Shizuko Ichinose, Yuriko Sakamaki, Miwako Nishio, Osamu Hoshi, Silvia Fischer, Klaus T Preissner and Takatoshi Koyama. The expression and localization of RNase and RNase inhibitor in blood cells and vascular endothelial cells in homeostasis of the vascular system. PLoS ONE. 2017.03; 12(3); 1-14
2. Yu Kajihara, Shota Yoshikawa, Yuichiro Cho, Toshiyuki Ito, Hirokuni Miyamoto, and Hiroaki Kodama. Preferential isolation of *Megasphaera elsdenii* from pig feces. Anaerobe. 2017.12; 48; 160-164

[総説]

1. 中田　浩貴，長　雄一郎，広田　亨，星　治. コンデンシン—Ⅱノックダウン染色体の超微構造解析．　臨床検査学教育. 2017.03; 9(1); 106-107

[講演・口頭発表等]

1. 中田　浩貴, 長　雄一郎, 広田　亨, 星　治. コンデンシン-Ⅱノックダウン染色体の超微構造解析. 第 122 回日本解剖学会総会・全国学術集会 2017.03.30 長崎
2. Osamu Hoshi, Yuichiro Cho, and Nobuyuki Takei. Protein synthesis in growth cones of rat dorsal root ganglion neurons in relation to the three-dimensional structure. The 19th International Scanning Probe Microscopy Conference Kyoto 2017 (ISPM2017) 2017.05.17 Kyoto, Japan
3. Yuichiro Cho, Kenji Sato, and Osamu Hoshi. An electrophysiological and histological study of pelvic nerve reconstruction and its application to substitute bladder. The 29th World Congress of World Association of Societies of Pathology and Laboratory Medicine (WASPaLM2017) 2017.11.15 Kyoto, Japan

[Works]

1. 長　雄一郎：細菌検査実習 2016 e-learning 教材, コンピュータソフト, webclass, 2016 年 04 月 - 2017 年 03 月
2. 長　雄一郎：輸血検査実習 2016 e-learning 教材, コンピュータソフト, webclass, 2016 年 04 月 - 2017 年 03 月
3. 長　雄一郎：組織学実習 2016 e-learning 教材, コンピュータソフト, webclass, 2016 年 04 月 - 2017 年 03 月
4. 長　雄一郎：輸血検査実習 2017 e-learning 教材, コンピュータソフト, webclass, 2017 年 04 月 - 2018 年 03 月
5. 長　雄一郎：細菌検査実習 2017 e-learning 教材, コンピュータソフト, webclass, 2017 年 04 月 - 2018 年 03 月
6. 長　雄一郎：組織学実習 2017 e-learning 教材, コンピュータソフト, webclass, 2017 年 04 月 - 2018 年 03 月

[その他業績]

1. 産学共同研究, 2017 年 04 月
   長　雄一郎：電子顕微鏡による好熱菌および腸内細菌叢に関する解析．株式会社サーマス・千葉大学，2017.4.1 ～2018.3.31

[社会貢献活動]

1. 長　雄一郎：栃木県立衛生福祉大学校　臨床検査学科（遺伝子検査学）　非常勤講師, 2006 年 04 月 01 日 - 現在
2. 長　雄一郎：埼玉県立大学　検査技術科学専攻（健康食品総論）　非常勤講師, 2009 年 04 月 01 日 - 現在
3. 長　雄一郎：東京医科歯科大学生活協同組合　理事（代表理事）, 2009 年 05 月 01 日 - 現在
4. 星　治：日本解剖学会　評議員, 2012 年 04 月 01 日 - 現在
5. 長　雄一郎：お茶の水会検査同窓会　副会長, 2012 年 11 月 17 日 - 現在
6. 長　雄一郎：お茶の水会　常任理事, 2012 年 11 月 17 日 - 現在
7. 長　雄一郎：足利工業大学　看護学部（人体の構造と機能；解剖生理学）　非常勤講師, 2014 年 04 月 01 日 - 現在
8. 長　雄一郎：四大学平成卒業生の会連合会　幹事, 2014 年 04 月 01 日 - 現在

9. 長　雄一郎：お茶の水会平成卒業生の会　副会長（渉外担当）, 2014 年 04 月 01 日 - 現在
10. 長　雄一郎：日本食品安全協会　認定試験等に関する監督責任者, 2014 年 07 月 01 日 - 現在
11. 長　雄一郎：平成 28 年度　お茶の水会検査同窓会総会 · 講演会　副会長，実行委員, 2017 年 02 月 18 日
12. 長　雄一郎：日本組織移植学会　第 13 回日本組織移植学会認定コーディネーター試験 · 第 10 回日本組織移植学会認定コーディネーター更新試験　会場責任者, 2017 年 03 月 20 日
13. 星　治：日本臨床検査学教育学会　評議員, 2017 年 04 月 01 日 - 現在
14. 長　雄一郎：平成 29 年度　国立大学法人東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科生体検査科学専攻　第 18 回体験型公開講座「健康寿命を延ばす　健康チェック」　実習講師，実行委員, 2017 年 10 月 28 日 - 2017 年 10 月 29 日

生命機能情報解析学

Biofunctional Informatics

教　授	角　勇樹
准教授	笹野　哲郎
助　教	赤座　実穂
非常勤講師	原　恵子、太田　克也
博士後期	飯野　弘子、高田　香世子、市川　由理
博士前期	中村　和奏、永森　千寿子、大野　愛、大山　咲希、棗　祐有、古家　若葉、小池　史華 髙橋　奈緒実、鈴木　杏奈、三好　崇夫、吉村　優里
卒業研究	蒼見　阿日倫、生駒　美樹、佐々木　奏絵、千葉　里沙子、柳澤　瑛里子 和久　万理香、渡辺　芙由子

(1)　分野概要

分子・細胞レベルから器官までの統合されたシステムとしての生体のはたらきを測定・解析する生理機能検査法，および臨床医学と生理検査との関連について研究、教育を行う。研究は呼吸，循環、神経の専門家がそれぞれの分野にて独立して行っている。それぞれ分野において、臨床レベル、見識、研究のトップクラスの専門家が集まっている。

(2)　研究活動

研究は呼吸，循環、神経の専門家がそれぞれの分野にて独立して行っている。現在の研究テーマは、

呼吸器分野では新規肺機能検査の臨床的意義，気管支喘息の機序と endotype 分類、COPD の phenotype 分類、睡眠時無呼吸症候群、肺疾患に対する遺伝子治療を研究している。

循環器では、細胞間シグナル伝達に焦点をおいた不整脈の発症機序の研究、特殊心電図解析による新規検査法の開発、心房細動に関連する新しいバイオマーカーの探索と臨床応用の検討、新規血液凝固能検査による血栓症リスク評価、ナノ粒子化合物を用いた不整脈の遺伝子治療の研究、を行っている。

中枢神経領域では脳波研究、てんかん研究、末梢神経領域では新規末梢神経検査法の開発を行っている。

(3)　教育活動

学部学生教育では臨床医学全般の教育を行うと共に生理機能検査 (肺機能、心電図、脳波、末梢神経検査、心, 腹部エコーなど) の講義および実習にて理論および技能を修得させている。卒業研究、博士学生教育では各専門領域分野研究を行う。

1) 学部学生教育

１年次には，先端医療技術論で生命情報機能解析学総論の講義を行う。２年次後期には，神経，循環，呼吸の生理検査学実習 (Ⅰ) を行う。内容は，脳波，心電図，血圧，スパイログラムの実習である。３年次前・後期に，生理検査学の講義 (Ⅱ) および実習 (Ⅱ) を行う。内容は神経生理検査，呼吸器系検査，循環器系検査，超音波検査，画像解析，サーモグラフィー，平衡機能検査，眼底検査などの生理機能検査に加え、採血実習や検体採取、バイタルサインなど基本診察手技、救命救急処置など臨床手技全般の教育を行う。４年次には，前期に卒業研究，後期に臨地実習の指導を行う。卒業研究では，ポリグラフ検査，機能的 MRI，NIRS，終夜睡眠 PSG，心電図，心臓超音波などをテーマに，研究指導を行う。臨地実習では，２週間の間に運動負荷試験やホルター心電図を含む心電図検査，血液ガス測定を含む呼吸機能検査，脳波検査，誘発電位検査，および心臓・腹部超音波検査の実技指導を行う。

2) 大学院教育

大学院前期課程では生命機能情報解析学特論 A1、生命機能情報解析学実験 A1、生命機能情報解析学特論 A2、生命機能情報解析学実験 A2、病因・病態解析学を担当する。生命機能情報解析学では新しい知識や技術を教育するとともに，すでに解明されている領域とそうでない領域を明確にし，いまだ不明な領域を明らかにするための科学的研究態度の修得をめざしている。病因・病態解析学では laboratory scientist に必要な臨床的知識を教育を行う。後期課程では神経生理検査学の研究指導を行う。

(4) 教育方針

生理機能検査は患者と直接接して行う臨床の front line であり、特に臨床医学の立場から生理検査について教育している。神経，呼吸，循環、消化器などの臨床生理学的検査，画像診断検査について理論や技術を教え，それらを応用した研究方法を修得させることを目標としている。生理機能検査を行うには，機器の操作，安全対策，生体現象の記録，データの整理・解析の技術と知識のみならず，直接人に接する検査であるので，疾病に対しての医学的知識，医療倫理，コミュニケーション能力なども要求される。また患者に対して緊急処置を要する検査結果について、速やかに認識し適切な処置を行える能力を涵養することも重要視している。これらに加え，検査時の患者の急変への対応についても教育している。

(5) 臨床活動および学外活動

呼吸器専門医・指導医、アレルギー専門医の角は当院呼吸器内科外来を行っている。また研究会等の世話人や disscustant を行っている。次世代の医師養成のため総合研修センターにおけるイブニングセミナー講義、呼吸器内科での CC、PCC、呼吸器ブロック講義を担当している。さらに M1 での MIC 講義を担当している。

循環器専門医で不整脈を専門とする笹野は不整脈学会、Heart rhythm society など多数の研究会の役員や世話人となっている。週 1 回循環器外来を行っている。

神経内科医の赤座は、神経内科疾患一般の他、末梢神経障害に精通し、医学部附属病院における末梢神経検査の施行、結果評価の中心的役割を果たしている。

精神科医で日本てんかん学会専門医・指導医、日本臨床神経生理学会認定医（脳波）、精神保健指定医の原は日本精神神経学会専門医・指導医、日本臨床神経性理学会代議員、日本薬物脳波学会評議員、日本てんかん学会評議員理事会幹事を務めている。当院ではてんかん外来を週 1 回行い、セカンドオピニオンも含め、多くの患者の診療にあたっている。また当院脳外科と協力し、週 1 回の脳波カンファレンス、月 1 回の脳波・てんかんレクチャー、また脳波の高周波数解析（HFO）を行った。また、多くの脳外科手術における術中脳波測定も行っている。

(6) 臨床上の特色

笹野は心房細動発症予測研究外来を行っている。

赤座は糖尿病患者における末梢神経障害について臨床研究を行っている。

原はセカンドオピニオンも含め、多くのてんかん患者の診療にあたっている。特に妊よう性のある女性の治療を専門とし、多くのてんかん治療を受けた女性の妊娠出産を助けている。平成 25 年からは産婦人科医師と協力し、てんかん合併妊娠に関する事前コンサルタントを行っている。

(7) 研究業績

[原著]

1. Nagamori C1, Hara K2, Ohta K3, Akaza M1, Sumi Y1. Longitudinal investigation into implicit stigma of epilepsy among Japanese medical students before and after mass media coverage of car accidents associated with people with epilepsy. Epilepsy Behavior. 2017.01; 73; 95-99

2. Kaoru Okishige, Tomofumi Nakamura, Hideshi Aoyagi, Naohiko Kawaguchi, Mitsumi Yamashita, Manabu Kurabayashi, Hidetoshi Suzuki, Mitsutoshi Asano, Tsukasa Shimura, Yasuteru Yamauchi, Tetsuo Sasano, Kenzo Hirao. Comparative study of hemorrhagic and ischemic complications among anticoagulants in patients undergoing cryoballoon ablation for atrial fibrillation. J Cardiol. 2017.01; 69(1); 11-15

3. Sahoko Chiba, Kaori Okayasu, Kimitake Tsuchiya, Meiyo Tamaoka, Yasunari Miyazaki, Naohiko Inase, Yuki Sumi. The C-jun N-terminal kinase signaling pathway regulates cyclin D1 and cell cycle progression in airway smooth muscle cell proliferation International Journal of Clinical and Experimental Medicine. 2017.02; 10(2); 2252-2262

4. Satomi Hamada, Ai Oono, Yuri Ishihara, Yuki Hasegawa, Miho Akaza, Yuki Sumi, Yoshinori Inoue, Hajime Izumiyama, Kenzo Hirao, Mitsuaki Isobe, Tetsuo Sasano. Assessment of vascular autonomic function using peripheral arterial tonometry. Heart and Vessels. 2017.03; 32(3); 260-268

5. Tetsuo Sasano, Yuki Hasegawa, Satomi Hamada. Novel measurements of blood coagulability for assessing the risk of thrombosis. Expert Rev Med Devices. 2017.03;

6. Min Li, Yasunari Kanda, Takashi Ashihara, Tetsuo Sasano, Yuji Nakai, Masami Kodama, Erina Hayashi, Yuko Sekino, Tetsushi Furukawa, Junko Kurokawa. Overexpression of KCNJ2 in induced pluripotent stem cell-derived cardiomyocytes for the assessment of QT-prolonging drugs. J. Pharmacol. Sci.. 2017.06; 134(2); 75-85

7. Takatoshi Shigeta, Kaoru Okishige, Yasuteru Yamauchi, Hideshi Aoyagi, Tomofumi Nakamura, Mitsumi Yamashita, Takuro Nishimura, Naruhiko Ito, Yusuke Tsuchiya, Mitsutoshi Asano, Tsukasa Shimura, Hidetoshi Suzuki, Manabu Kurabayashi, Takehiko Keida, Tetsuo Sasano, Kenzo Hirao. Clinical assessment of cryoballoon ablation in cases with atrial fibrillation and a left common pulmonary vein. J. Cardiovasc. Electrophysiol.. 2017.06;

8. ChizukoNagamori, Keiko Hara, Katsuya Ohta, MihoAkaza, Yuki Sumi. Longitudinal investigation into implicit stigma of epilepsy among Japanese medical students before and after mass media coverage of car accidents associated with people with epilepsy. Epilepsy & Behavior. 2017.08; 73; 95-99

9. Momoe Endo, Yoko Soroida, Masaya Sato, Tamaki Kobayashi, Hiromi Hikita, Mamiko Sato, Hiroaki Gotoh, Tomomi Iwai, Shinji Sone, Tetsuo Sasano, Yuki Sumi, Kazuhiko Koike, Yutaka Yatomi, Hitoshi Ikeda. Ultrasound evaluation of liver stiffness: accuracy of ultrasound imaging for the prediction of liver cirrhosis as evaluated using a liver stiffness measurement. J. Med. Dent. Sci.. 2017.09; 64(2-3); 27-34

10. Takuro Nishimura, Masahiko Goya, Shinya Shiohira, Takakatsu Yoshitake, Yasuhiro Shirai, Shingo Maeda, Takeshi Sasaki, Mihoko Kawabata, Tetsuo Sasano, Kenzo Hirao. Right coronary artery wall edema provoked by cavotricuspid isthmus radiofrequency ablation. HeartRhythm Case Rep. 2017.09; 3(9); 443-446

11. Daisuke Tezuka, Hisanori Kosuge, Masahiro Terashima, Nozomu Koyama, Tadashi Kishida, Yuko Tada, Jun-Ichi Suzuki, Tetsuo Sasano, Takashi Ashikaga, Kenzo Hirao, Mitsuaki Isobe. Myocardial perfusion reserve quantified by cardiac magnetic resonance imaging is associated with late gadolinium enhancement in hypertrophic cardiomyopathy. Heart Vessels. 2017.11;

12. Yoko Suzuki, Miho Miyajima, Katsuya Ohta, Noriko Yoshida, Rie Omoya, Mayo Fujiwara, Takafumi Watanabe, Masaki Okumura, Hiroaki Yamazaki, Masayuki Shintaku, Issei Murata, Shigeru Ozaki, Takeshi Sasaki, Mitsuru Nakamura, Hiroshi Suwa, Tetsuo Sasano, Tokuhiro Kawara, Masato Matsuura, Eisuke Matsushima. Is prolongation of corrected QT interval associated with seizures induced by electroconvulsive therapy reduced by atropine sulfate? Pacing Clin Electrophysiol. 2017.11; 40(11); 1246-1253

13. Kaoru Okishige, Hideshi Aoyagi, Takurou Nishimura, Takatoshi Shigeta, Takehiko Keida, Yasuteru Yamauchi, Tetsuo Sasano, Kenzo Hirao. Left phrenic nerve injury during electrical isolation of left-sided pulmonary veins with the second-generation cryoballoon. Pacing Clin Electrophysiol. 2017.12; 40(12); 1426-1431

14. Kenji Yoshioka, Shunsuke Kuroda, Kentaro Takahashi, Tetsuo Sasano, Tetsushi Furukawa, Akihiko Matsumura. Calcification of joints and arteries with novel NT5E mutations with involvement of upper extremity arteries. Vasc Med. 2017.12; 22(6); 541-543

15. 原恵子. てんかんと社会―精神科の立場から― Epilepsy.

16. 原恵子. 成人の難治てんかん 波.

[書籍等出版物]

1. 角　勇樹. 臨床薬理学. 医学書院, 2017.01

2. 赤座実穂. パーキンソン病、認知症.

[総説]

1. 笹野　哲郎. 心電図から疾患を考える　—Brugada 症候群— Heart View. 2017.01; 21; 94-100

[講演・口頭発表等]

1. 飯田 真太朗, 叶内 匡, 赤座 実穂, 沼波 仁, 能勢裕里江, 西田陽一郎, 横田隆徳. 2 時間の臥床後に両下肢麻痺をきたした 41 歳女性. 第 11 回首都圏神経筋電気診断フォーラム 2017.01.14 東京

2. Miho Akaza, Shigenori Kawabata, Isamu Ozaki, Yuki Hasegawa, Taishi watanabe, Shuta Ushio, Yoshiaki Adachi, Kensuke Sekihara, Shuta Ushio, Takanori Yokota. Posteroanterior action currents in the cervical cord following median nerve stimulation visualized by magnetic recording. American Clinical Neurophysiology Society 2017.02.10

3. Ihara K, SasanoT, Sugiyama K, Takahashi K, Furukawa T.. Generating biological pacemaker by CRISPR/Cas9 based in vivo genome editing. 第 81 回日本循環器学会 2017.03.17

4. 62. Sasano T, Suzuki A, Oono A, Nakamura W, Natsume Y, Hasegawa Y, Hamada S, Yamauchi Y, Okishige K, Isobe M, Hirao K.. Transient cryo-stimulation increases whole blood coagulability: Potential risk of thrombosis during cryoablation. 第 81 回日本循環器学会 2017.03.17 Kanazawa, Japan

5. Takahashi K, Setoguchi M, Sasano T, Kurokawa J, Furukawa T.. Pannexin-1 contributes to the maintenance of cardiac function against acute pressure-overload as a “mechano-sensor”. 第 81 回日本循環器学会 2017.03.18 Kanazawa, Japan

6. Natsume Y, Hasegawa Y, Shirai Y, Kawabata S, Sekihara K, Adachi Y, Isobe M, Hirao K, Sasano T.. Noninvasive identification of stable rotors during atrial fibrillation using vector magnetocardiography. 第 81 回日本循環器学会 2017.03.18 Kanazawa, Japan

7. Wakaba Furuie, Junji Endo, Yoshio Otani, Yoichi Nakamura, Miho Akaza, Tetsuo Sasano, Yasunari Miyazaki, Naohiko Inase, Yuki Sumi. Reference values of MostGraph measures for healthy Japanese adults. The 57th Annual Meeting of the Japanese Respiratory Society 2017.04.21 Tokyo International Forum

8. Fumika Koike, Yoshio Otani, Saki Oyama, Wakaba Furuie, Miho Akaza, Tetsuo Sasano, Kimitake Tsuchiya, Meiyo Tamaoka, Naohiko Inase, Yuki Sumi. Cluster analysis of cough variant asthma using Mostgraph. 第 57 回日本呼吸器学会学術講演会 2017.04.21 Tokyo International Forum

9. 三好崇夫, 佐々木郁美, 上里彰仁, 赤座美穂, 笹野哲郎, 宮崎泰成, 稲瀬直彦, 角勇樹. ナステントによる鼾減少効果および認容性の評価. 第 57 回日本呼吸器学会学術講演会 2017.04.23 東京国際フォーラム

10. Suzuki A, Oono A, Nakamura W, Natsume Y, Hasegawa Y, Hamada S, Yamauchi Y, Okishige K, Hirao K, Sasano T. Cryo-stimulation evokes transient hypercoagulability: potential risk of thrombosis during cryoablation.. Heart Rhythm Society meeting 2017.05.11 Chicago, USA

11. Natsume Y, Oaku K, Takahashi K, Furukawa T, Hirao K, Sasano T. Diagnostic panel of circulating microRNAs as a biomarker for atrial fibrillation.. Heart Rhythm Society meeting 2017.05.12 Chicago, USA

12. Natsume Y, Hasegawa Y, Shira Y, Kawabata S, Hirao K, Sekihara K, Adachi Y, Hirao K, Sasano T. Noninvasive identification of focal stable rotor during atrial fibrillation by vector magnetocardiography.. Heart Rhythm Society meeting 2017.05.12 Chicago, USA

13. Saki Oyama, Yoshio Otani, Fumika Koike, Wakaba Furuie, Miho Akaza, Tetsuo Sasano, Kimitake Tsuchiya, Meiyo Tamaoka, Yasunari Miyazaki, Naohiko Inase, Yuki Sumi. Cluster analysis of cough variant asthma using FOT and FeNO. American Thoracic Society (ATS) International Conference 2017 2017.05.21 Washington, Dist Of Col

14. Wakaba Furuie, Ikumi Sasaki, Akihito Uezato, Takao Miyoshi, Miho Akaza, Tetsuo Sasano, Yasunari Miyazaki, Naohiko Inase, Yuki Sumi. Evaluation of the Tolerance and Effectiveness of Nasal Airway Stent. American Thoracic Society (ATS) International Conference 2017 2017.05.21 Washington, Dist Of Col

15. Miho Akaza, Shigenori Kawabata, Isamu Ozaki, Yuki Hasegawa, Taishi watanabe, Yoshiaki Adachi, Yuki Sumi, Takanori Yokota. Magnetic recordings of sensory action currents in the cervical cord. Biomagnetic Sendai 2017.05.23

16. Natsume Y, Hasegawa Y, Shira Y, Kawabata S, Hirao K, Sekihara K, Adachi Y, Hirao K, Sasano T. Vector magnetocardiography detects localized rotation of electric current during atrial fibrillation.. 第 32 回日本生体磁気学会 2017.05.23 仙台

17. 大山咲希、大谷義夫、土屋公威、玉岡明洋、宮崎泰成、稲瀬直彦、角勇樹. 咳喘息患者における好酸球性気道炎症と末梢気道狭窄の治療による改善効果の検討. 第 66 回日本アレルギー学術大会 2017.06.16 日本アレルギー学会

18. 小池史華、大谷義夫、大山咲希、古家若葉、土屋公威、玉岡明洋、稲瀬直彦、角勇樹. 咳喘息診断におけるモストグラフの役割について. 第 66 回日本アレルギー学術大会 2017.06.17 東京国際フォーラム

19. 赤座実穂、笹野哲郎、戸塚実、沢辺元司、窪田哲朗、角勇樹. 臨床検査技師検体採取実習導入における新たな試み. 第 12 回日本臨床検査学教育学会学術大会 2017.08.24

20. Sasano T. Role of microRNA in Atrial Remodeling.. Asia-pacific Heart Rhythm Society meeting 2017.09.14

21. Yamazoe M, Sasano T, Nakamura W, Takahashi K, Ihara K, Furukawa T. Cell-free DNA Released from Atrial Cardiomyocytes Promotes Pro-Inflammatory Cytokine IL-6 Expression in Macrophages.. Asia-pacific Heart Rhythm Society meeting 2017.09.14

22. Ihara K, Sasano T, Takahashi K, Furukawa T.. Pacemaker activity generated by in vivo genome editing.. Asia-pacific Heart Rhythm Society meeting 2017.09.15

23. Oono A, Hamada S, Hasegawa Y, Shiohira S, Nishimura T, Shirai Y, Yagishita A, Sasaki T, Goya M, Furukawa T, Hirao K, Sasano T. Evaluation of the Effect of Anticoagulants Using Novel Dielectric Coagulometer.. Asia-pacific Heart Rhythm Society meeting 2017.09.15

24. Nakamura W, Yamazoe M, Natsume Y, Oono A, Shiohira S, Shirai Y, Yagishita A, Sasaki T, Goya M, Hirao K, Furukawa T, Sasano T. Elevated Circulating Cell-free DNA in Subjects with Atrial Fibrillation.. Asia-pacific Heart Rhythm Society meeting 2017.09.15

25. Natsume Y, Takahashi K, Shiohira S, Shirai Y, Yagishita A, Sasaki T, Hirao K, Furukawa T, Sasano T.. Circulating MicroRNAs as a Biomarker for Atrial Fibrillation.. Asia-pacific Heart Rhythm Society meeting 2017.09.16

26. Sasano T, Hasegawa Y, Hamada S, Oono A, Nishimura T, Sasaki T, Goya M, Furukawa T, Hirao K. Risk Stratification of Cardiogenic Stroke and the Monitoring of Direct Oral Anticoagulants Using Novel Dielectric Coagulometer.. Asia-pacific Heart Rhythm Society meeting 2017.09.17

27. Sasano T, Oya M, Hasegawa Y, Natsume Y, Terui M, Shirai Y, Kawabata S, Adachi Y, Hirao K. Noninvasive Assessment of the Substrate of Atrial Fibrillation Using Magnetocardiography.. Asia-pacific Heart Rhythm Society meeting 2017.09.17

28. Watanabe F, Ishii S, Furukawa T, Maruhashi T, Hayashi K, Sasano T. Tissue-Specific Delivery of Nucleotide and Protein using Hollow Hybrid Nanoparticle.. iCMaSS 2017.09.30

29. Ishii S, Oono A, Nakamura W, Natsume Y, Furukawa T, Nagai A, Sasano T. Non-Viral Gene Transduction into Cardiomyocyte Using Apatite Nanoparticle.. iCMaSS 2017.09.30

30. 赤座実穂、赤座至、叶内匡、笹野哲郎、角勇樹、横田隆徳. 血糖変動と糖尿病神経障害との関連の検討. 2017.11.29

31. 原恵子. 脳波判読の基礎. 4th　明後日の会

32. 石塚聖洋、宮崎泰成、須原宏造、岡本師、立石知也、古澤春彦、土屋公威、藤江俊秀、玉岡明洋、坂下博之、角勇樹、稲瀬直彦. 抗原吸入誘発試験の有効性と安全性の検討. 第 26 回日本アレルギー学会春季臨床大会

33. 足立雄太、土屋公威、古澤春彦、内堀健、三ツ村隆弘、佐内文、本多隆行、東盛志、岡本師、立石知也、藤江俊秀、玉岡明洋、坂下博之、角勇樹、宮崎泰成、稲瀬直彦. 両肺多発浸潤影を呈した間質性肺炎合併肺腺癌の 1 例. 第 171 回日本肺癌学会関東支部会学術集会

34. 内堀健、足立雄太、東盛志、本多隆行、佐内文、三ツ村隆弘、岡本師、立石知也、古澤春彦、土屋公威、藤江俊秀、玉岡明洋、坂下博之、角勇樹、宮崎泰成、稲瀬直彦. 潰瘍型気管支結核と鑑別を要した肺腺癌の 1 例. 第 172 回日本呼吸器内視鏡学会関東支部会

[受賞]

1. 東京医科歯科大学医学研究奨励賞, 2017 年 01 月
2. 東京医科歯科大学　優秀研究賞, 東京医科歯科大学, 2017 年 10 月

[社会貢献活動]

1. 臨床神経生理技術講習会, 臨床神経生理学会, 第 10 回臨床神経生理技術講習会, 東京, 2015 年 04 月 01 日 - 現在

生体機能支援システム学

Biophysical System Engineering

教授　伊藤　南
助教　本間　達
非常勤講師　井出　恵伊子
非常勤講師　赤澤　宏平
非常勤講師　大久保　滋夫
大学院生　舟木　大登
学生　南條　啓孝

(1)　分野概要

”生体システムのメカニズム”をキーワードにして、医用生体計測を通して得られる生体情報の利用とそのメカニズムを明らかにする研究と教育を行います。サイバネティクスの創始者として知られるノーバート・ウィーナーは、生体もまたある種の制御システムであることを示唆しました。私たちは生体情報からその機能や作用機序を明らかにする研究として、行動解析、ニューロンの電気活動記録、数理モデル解析などの連携を通じて、視知覚における物体の輪郭線や面の表現の視覚情報処理システムのメカニズムを探っています。一方、生体情報を生体機能の制御に利用する研究として、頭部組織における熱伝導モデルを起点として、脳低温療法時の脳の精密な温度管理を可能とする温度制御システムの開発を進めています。

(2)　研究活動

本分野は、工学的な切り口で複雑な生体機能のシステムの挙動とメカニズムを明らかにすること、そうした知識を応用することを研究の目的としています。
１）視覚情報統合のための生体情報処理システムの数理モデル解析
２）状況に応じた視覚情報の統合と認知のための神経メカニズムの解明
　我々の視知覚は多様な外部環境下でも安定した外部情報の認知を可能とする柔軟さを持つ一方で刺激本体の特性以外にも周囲の状況、過去の経験や学習より変化するダイナミクスを実現しています。①物体の輪郭線の断片的情報を統合するプロセスと②物体表面の質感認知における視覚情報と触感情報の相互作用を対象にして、大脳皮質視覚野の中間段階の情報処理メカニズムの解明を通して、そうした柔軟な視覚情報処理のメカニズムを明らかにしたいと考えています。特に同一の動物個体において、心理物理学的手法による行動解析と単一細胞記録を主とする電気生理学的な活動の記録を同時に行うことにより、両者の因果関係を明らかにすることで視知覚をメカニズムを説き明かすことを目指しています。また、イメージング技術を利用した神経回路網の解析、視覚情報処理の数理モデル化などの異なるレベルの研究の連携を進めたいと考えています。
　昨年度より継続して、ニホンザル３頭を用いて実験環境への馴致、基本的な行動課題の訓練、さらに素材弁別課題の訓練を行いました。素材弁別のカテゴリを表す参照刺激として５種類の素材（金属、布、ジェルシート、木の表皮、毛皮）を選定し、これら５種の素材をペダル操作により区別するように訓練を進めました。さらに、新規素材に対する反応を試験的に調べ、素材弁別を行っていることを確認しました。これと併行して、サルに用いたものと同じ素材弁別課題により、ヒト被験者における素材弁別および触知覚の評定を行こない、両者の関係を評価しました。主成分分析、多次元尺度法などの手法を利用して、異なる条件下での素材感知覚を比較する手法を考案しました。視覚情報による識別と触知覚による識別を比較検討しました。その成果は日本神経科学学会、米

国神経科学学会で発表されました。
３）医療支援のための数理モデルを利用した身体情報計測法の開発
医療，リハビリテ―ションなどに応用可能な生体の機能制御法の研究を行うとともに，生体の活動情報を生体自身にフィ―ドバックして自らの活動の制御を学習的に行う方法を研究し，基礎的な心理実験や自己治療，自己訓練などを行っています。そのために，生体システムの特徴である複数の現象の相互関連を総合的に把握する方法と生体現象の非線形性，個別性，経時変化やその環境条件を表現する数学的方法の研究を行っています。また，生体の機能制御における個体差，経時変化による不確定性に対処するために，個別性と同時に客観性を備えた操作方法と対象の詳細を把握し得ない生体の機能の適応的制御法の研究を行っています。そうした成果の生体調節系の積極的な制御と医療への応用として，本年度は引き続き脳低温療法時の脳の温度制御システム開発を進めました。頭部組織のおける熱伝導の様子を物理モデルで再現し、異なる制御手法による温度制御システムの妥当性をシミュレーションで比較、検証しました。さらに、局所的な炎症や血行障害の生起を想定したシミュレーション用頭部モデルを作製し、それらを用いたより実際の状況に即したシミュレーションを行う準備を進めています。

(３)　教育活動

１）学部教育
医用工学概論をカバーするとともに、統計学的なデータの取り扱いについて修得させます。
２年次：検査査管理学では検査管理法の基礎的な知識や安全管理の基本的な考え方を修得させます。医用システム工学（Ｉ）では、生理学検査の原理を理解するのに必要な、電磁気の物理、電気信号の周波数フィルター、電気信号の増幅、生体の電気特性と安全管理について修得させます。実習では実際の電気計測通じて、体験的に知識の応用を学ぶことを目標とします。医学情報処理演習（Ｉ）ではデータ処理の基礎として、表計算ソフトの利用と平均値を比較する統計処理の原理と方法を修得させます。
３年次：医用システム情報学（Ⅱ）では医療の IT 化を理解するために必要な、情報科学における情報の取り扱い、コンピュータやネットワークの仕組み、ネットワークでの情報セキュリティー、電子カルテや病院情報システムの仕組みについて基本的な考え方を修得させます。実習では C 言語によるプログラミングを通じて、プログラムのルールを応用、工夫することにより目的の計算処理を達成することを修得させます。
４年次：医用情報処理演習（Ⅱ）では EBM, 学術情報や文献のデータベースの利用法、２変量の関係を解析する統計処理の原理と方法、生物統計学の特性について修得させます。近年、統計解析が重視される風潮に鑑み、統計検定の手法だけではなく、回帰分析による多変量解析やベイズ推定の考え方についても解説します。

2) 大学院教育
研究教育の場を通じて、課題解決の為に自ら知識、技術を系統立てて収集するノウハウを学び、今後国内外の様々な方面で活かせるような力を修得させます。神経システムを題材とした古典的な英文論文や英文教科書の読解を積極的に行い、生体の仕組みを論理的に理解するための考え方を学びます。共通科目「医療情報学」では生体検査科学専攻と総合保健看護学専攻との接点を見いだす貴重な機会ととらえ、両専攻にまたがる幅広いテーマについて、非常勤講師によるオムニバス形式の講義を実施しています。また講義中の質疑応答を重視し、グループ討論を取り入れるなどして、学生の参加を促す試みを取り入れます。

(４)　教育方針

科学技術、医療技術の急速な進歩は医学 · 医療のレベルを著しく向上させるともに、臨床検査技師が果たす役割も変化させています。またシステム制御，IT 化，機械化、検出技術の開発、統計情報処理など，医療 · 生命科学から工学にわたる幅広い領域にまたがる多様な要求を生み出しています。こうした要求に答え、医療チームの一員として医療現場を支える人材を育成することを目的とします。また英文による論文や教科書の読解を積極的に進めます。
1) 学部教育
臨床検査技師として必要な実務的な技術を身につけるだけでなく、生体情報とその検出技術の背景、原理、システムのメカニズムを良く理解し、既成の技術の利点欠点をよく理解して「応用する」、新しい技術に容易に適用できる人材を育成することを目的とします。
2) 大学院教育
医療の高度化 · 先端化には、基礎的な生命科学研究や技術開発等を通じてその進歩に寄与する、工学と生命科学の橋渡しができる人材が必要です。高度の専門性と多様性を兼ね備えた新しいタイプの臨床検査技師を養成することを目的とします。システムのメカニズムを明らかにするための考え方を身に付けることを目指します。課題解決の為に自ら知識、技術を系統立てて収集すると同時に、新しい課題を設定 · 解決するノウハウを学び、国内外の様々な方面で能力を活かせるような力を養います。

(5)　研究業績

[原著]

1. 本間達，若松秀俊. 生体数理シミュレーションのためのモデル等価配置を実現する正四面体格子座標系の提案と検討 電気学会論文誌 C. 2017.10; 137(10); 1329-1339

[講演 · 口頭発表等]

1. 本間達. プログラミング実習のためのグラフィックを使用可能なポータブル C 言語学習システム. 電気学会教育フロンティア研究会 2017.03.03 神戸
2. A.Ko,Y.Takai,H.Fukahori,M.Ikeda,S.Honma, N.Yamamoto-Mitani. Effective Approaches in Escorting Elderly Persons with Dementia to Bathe; Qualitative Study Using Recording and Interviews. The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars 2017.03.08 Hong Kong
3. 本間達，舟木大登，若松秀俊，伊藤南. 選択式脳低温療法のための適応ゲインと積分制御の模型実験. 電気学会全国大会 2017.03.17 富山
4. 本間達，若松秀俊. 適応ゲインと積分制御による選択的脳低温制御. 電気学会全国大会 2017.03.17 富山
5. 本間達，若松秀俊，余錦華. 選択式脳低温療法における Fuzzy 適応制御を用いた脳温管理の検討. 第 20 回日本脳低温療法 · 体温管理学会 2017.07.08
6. Minami Ito, Fumihiro Hamano, Kento Mitsuhashi. Multi-dimensional scaling analysis of teh material perception due to visual and haptic inspecitons.. 第４０回日本神経科学大会 2017.07.20 幕張メッセ
7. 舟木大登、本間達、若松秀俊、伊藤南. 実験装置を基礎にした選択式脳低温療法のための臨床用温度管理装置の設計. 2017.08.23 越谷
8. 舟木大登，本間達，若松秀俊，伊藤南. 実験装置を基礎にした選択式脳低温療法のための臨床用温度管理装置の設計. 第 12 回日本臨床検査学教育学会 2017.08.24
9. 伊藤　南、甘楽　明穂、佐々木　睦美、濱野　文博、三橋　健斗、八田　千咲、吉田　咲絵. サルにおける手触り感による素材感評価を探る. 視覚科学フォーラム２０１７　豊橋　第２１回研究回 2017.09.28 豊橋
10. M. Ito, A. Tsuzura, M. Sasaki, F. Hamano, K. Mitsuhashi. The simple material discrimination task examined haptic evaluations of material objects in human and possibly non-human primate subjects.. Society for Neuroscience 2017 Annual Meeting 2017.11.15 Washington DC, U.S.A.

先端分析検査学

Analytical Laboratory Chemistry

教授：戸塚　実
助教：大川　龍之介
大学院生：（博士前期）中村　文香，堀内　優奈，山崎　あずさ，五十嵐　好，笹岡　真衣，藤井　祐葵
（博士後期）賴　劭睿
社会人大学院生：（博士後期）市村直也，名倉　豊，三島由祐子，小林玉宜

(1)　分野概要

先端分析検査学分野は臨床検査学の分類における「臨床化学」を教育・研究の柱に据えている。研究の主テーマは「心血管疾患発症のリスクを予見可能な血清バイオマーカーの開発」としているが、研究を支えるに十分な技術の習得および高い精度を持った測定法の開発能力が重要と考えている。研究成果を論文あるいは学会で発表し、社会に還元するという使命とともに、次代の臨床検査を発展的に継続できる人材の育成が何よりも重要である。臨床検査技師養成大学の歴史は比較的浅いため、医療現場で中心的な役割を担える臨床検査技師の育成に加えて、教育・研究においても第一線で活躍できる、臨床検査に identity をもった人材の育成を目指している。そのためにも、楽しく研究活動に打ち込むことができる環境作りが大切だと考えている。

(2)　研究活動

直接の研究対象はリポ蛋白およびその主要成分であるコレステロールや中性脂肪、構成・機能蛋白である各種アポ蛋白、およびその代謝・分解産物や代謝に関わる酵素類であるが、これらの詳細な研究を通じて、粥状動脈硬化性疾患の早期病態把握に有用なバイオマーカーを開発することが主要な研究テーマある。
具体的には、High-density lipoprotein（HDL）および主要構成蛋白である apolipoprotein A-I の reverse cholesterol transport（RCT)antioxidant ability、および anti-inflammatory effect に着目した冠動脈疾患の特異バイオマーカーの開発がテーマである。
冠動脈疾患の危険因子は多数報告されており、それらの検査によって心筋梗塞などの発症リスクを軽減することに一定の効果は得られている。しかし、リスク回避に努力している方が多いにも関わらず心筋梗塞で亡くなる頻度が依然として激減しないのも事実である。リスクのある方を中心に、定期的に、しかも簡易に検査可能なバイオマーカーの必要性が強く望まれている。RCT、antioxidant ability、anti-inflammatory effect は HDL の抗動脈硬化作用の有力なメカニズムと考えられているが、当研究室ではそのメカニズムに関わる多数の成分を解析することにより、様々な時点におけるリアルタイムな病態把握に有用なバイオマーカーを発見し、測定法を開発することを目指している。

研究課題　Research Focus
・心血管疾患発症の残存危険度を評価可能なバイオマーカーの開発
　Development of a new biomarker to estimate residual risk for cardiovascular disease
・化学修飾を受けた HDL およびアポ蛋白 A-I の機能に関する研究
　Study on the functions of chemically modified HDL and apolipoprotein A-I
・アポ蛋白 E 含有 HDL の機能解析と臨床的意義に関する研究
　Study on the functions and clinical significance of apolipoprotein E containing HDL

(3) 教育方針

学部教育：教育分野は分析化学検査学が中心であり、臨床検査現場ではいわゆる一般検査および臨床化学検査領域にあたる。この分野はもっとも自動化が進んでいる分野である。また、放射線同位元素技術学の教育はアイソトープ総合センターの原正幸准教授の協力を得ている。高度専門職業人として検査現場のリーダーあるいは指導者として活躍できる人材の育成のために、あるいは、企業においては検査の知識をベースにしたスペシャリストとして独自の業務を遂行できる人材の育成のために、分析法の原理や特徴および得られた結果の臨床的意義を解釈できる基礎的教育を目指している。それをベースに自ら考え、問題を解決し、さらには発展させていく創造的能力の育成が最終目標である。

大学院教育：研究の基礎となるのは分析技術である。確かな分析技術なくして、すばらしい研究成果が得られることはありえない。先端分析検査学分野では、信頼できる分析技術の重要性を理解し、その技術を習得することを第一の目的とする。次にその技術を基盤として、臨床検査分野で必要とされている新たなバイオマーカーの考案と測定法の開発、および臨床的有用性の評価を目指す。これら一連の研究プロセスを通じて、各種分析技術の習得とその原理、特徴および限界を理解することに加えて、自ら実験を立案し、その実行のために最適な手法を選択できる研究構築能力を育成する。また、学会発表や論文発表を通じて、得られた研究成果を情報として発信する能力を育成する。

(4) 研究業績

[原著]

1. Suzuki L, Hirayama S, Fukui M, Sasaki M, Hiroi S, Ayaori M, Terai S, Tozuka M, Watada H, Miida T.. Lipoprotein-X in cholestatic patients causes xanthomas and promotes foam cell formation in human macrophages J Clin Lipidol. 2017.01; 11(1); 110-118

2. Hitoshi Ikeda, Mariko Kobayashi, Hiromitsu Kumada, Kenichiro Enooku, Kazuhiko Koike, Makoto Kurano, Masaya Sato, Takahiro Nojiri, Tamaki Kobayashi, Ryunosuke Ohkawa, Satoshi Shimamoto, Koji Igarashi, Junken Aoki, Yutaka Yatomi. Performance of autotaxin as a serum marker for liver fibrosis. Ann. Clin. Biochem.. 2017.01; 4563217741509

3. Makoto Kurano, Kuniyuki Kano, Tomotaka Dohi, Hirotaka Matsumoto, Koji Igarashi, Masako Nishikawa, Ryunosuke Ohkawa, Hitoshi Ikeda, Katsumi Miyauchi, Hiroyuki Daida, Junken Aoki, Yutaka Yatomi. Different origins of lysophospholipid mediators between coronary and peripheral arteries in acute coronary syndrome. J. Lipid Res.. 2017.02; 58(2); 433-442

[書籍等出版物]

1. 大川 龍之介. JAMT 技術教本シリーズ 臨床化学検査 技術教本 "2.1.6 分光光度計". 丸善出版株式会社, 2017.09

2. 大川 龍之介. JAMT 技術教本シリーズ 臨床化学検査 技術教本 "3.4 測定の実際". 丸善出版株式会社, 2017.09

3. 大川 龍之介. JAMT 技術教本シリーズ 臨床化学検査 技術教本 "2.2.6 汎用自動分析装置（その他の測定）". 丸善出版株式会社, 2017.09

4. 大川 龍之介. JAMT 技術教本シリーズ 臨床化学検査 技術教本 "2.2.1-2.2.3 汎用自動分析装置（汎用自動分析装置の概要，比色分析部，電解質測定部）". 丸善出版株式会社, 2017.09

[総説]

1. 大川 龍之介，戸塚 実. “What is” and “How to make” leader of Biomedical Laboratory Scientist? 臨床検査技師のリーダーとは何か、どうやって育てるか？ 臨床検査学教育. 2017.01; 9(1); 33-38

2. 大川 龍之介. 臨床検査スターターズガイド“なぜ項目ごとの測定原理を理解することが重要なのでしょうか？” 検査と技術. 2017.04; 61(4); 466-467

[講演・口頭発表等]

1. 大川　龍之介. 今さら聞けない！　試薬の検討方法と発表のしかた. 東京都臨床検査技師会　臨床化学研究班研修会 2017.01.18 東京

2. 賴 劭睿, 大川 龍之介, 矢野 康次, 佐藤 恵美, 吉本 明, 戸塚 実. . 赤血球はアポリポタンパク A-I による泡沫細胞からのコレステロール引き抜きに関与している. . 第 27 回生物試料分析科学会年次学術集会 2017.02.11 新潟

3. 矢野 康次, 大川 龍之介, 佐藤 恵美, 吉本 明, 市村 直也, 亀田 貴寛, 窪田 哲朗, 戸塚 実. . コレステロール引き抜き能評価は細胞の分化・泡沫化の程度に大きく影響を受ける. 第 27 回生物試料分析科学会年次学術集会 2017.02.11 新潟

4. 大川 龍之介, 戸塚 実. バイオマーカー探索を目標にした高比重リポタンパクの機能研究. 第 73 回日本臨床検査医学会　関東・甲信越支部例会 2017.05.27 東京

5. 大川 龍之介. 臨床検査技師による研究への挑戦. 第 15 回生物試料分析科学会関東支部学術集会 2017.06.03 東京

6. 大川 龍之介. ここで差がつく学会発表・論文投稿. 日立自動分析維新の会 2017 年度成果発表会 2017.06.26 千葉

7. 甘楽 明穂, 吉森 真由美, 小野澤 枝里香, 今留 謙一, 大川 龍之介, 戸塚 実, 三浦 修, 小山 高敏, 新井 文子. EB ウイルス陽性 T,NK 細胞培養上清は単球系細胞のマクロファージへの分化とサイトカイン産生を誘導する. 第 7 回日本血液学会関東甲信越地方会 2017.07.01 長野

8. 南部 真由, 大川 龍之介, 島野 志都子, 山崎 あずさ, 萩原 三千男, 東田 修二, 戸塚 実. 炎症の程度が高比重リポタンパクの性状に及ぼす影響. 第 12 回日本臨床検査教育学会学術大会 2017.08.24 埼玉

9. 今野 夏乃子, 甘楽 明穂, 吉森 真由美, 小野澤 枝里香, 今留 謙一, 大川 龍之介, 戸塚 実, 新井 文子. Epstein-Barr ウイルス陽性 T,NK 細胞培養上清は単球系細胞のマクロファージへの 分化を誘導する. 第 12 回日本臨床検査教育学会学術大会 2017.08.24 埼玉

10. 堀内 優奈, 大川 龍之介, 生駒 勇人, 賴 劭睿, 矢野 康次, 吉本 明, 戸塚 実. アポリポタンパク E 含有高比重リポタンパクの性状・機能の解析. 第 12 回日本臨床検査教育学会学術大会 2017.08.24 埼玉

11. 藤井 祐葵, 大川 龍之介, 佐藤 恵美, 島野 志都子, 戸塚 実. 血清アミロイド A の高比重リポタンパクへの結合特性の解析. 第 12 回日本臨床検査教育学会学術大会 2017.08.24 埼玉

12. 五十嵐 好, 大川 龍之介, 矢野 康次, 堀内 優奈, 戸塚 実. 酵素サイクリング法を用いた高感度コレステロール測定法. 第 12 回日本臨床検査教育学会学術大会 2017.08.24 埼玉

13. 山崎 あずさ, 大川 龍之介, 堀内 優奈, 吉本 明, 矢野 康次, 戸塚 実. アポリポタンパク C-II（apoC-II）のリポタンパク間転送の解析. 第 12 回日本臨床検査教育学会学術大会 2017.08.24 埼玉

14. 垂門 碧, 島野 志都子, 大川 龍之介, 戸塚 実, 萩原 三千男, 東田 修二. Dimension EXL200 によるタクロリムス測定の基礎的検討と Turn Around Time の評価. 第 49 回日本臨床検査自動化学会 2017.09.23 横浜

15. 亀田 貴寛, 大川 龍之介, 戸塚 実. 動脈硬化と脂質検査—バイオマーカー探索を目標にした高比重リポタンパクの機能研究—. 第 49 回日本臨床検査自動化学会 2017.09.23

16. 堀内 優奈, 大川 龍之介, 生駒 勇人, 賴 劭睿, 矢野 康次, 戸塚 実. アポリポタンパク E 含有高比重リポタンパクのコレステロール引き抜き能の評価. 第 57 回日本臨床化学会年次学術集会 2017.10.08 北海道

17. 本橋 智子, 島野 志都子, 大川 龍之介, 戸塚 実, 萩原 三千男, 東田 修二. LABOSPECT008 を用いた「ナノピア®IL-2R」試薬の性能評価. 第 64 回日本臨床検査医学会学術集会 2017.11.17 京都

18. Tamaki K., Kurano M., Mishima Y., Nojiri T., Ohkawa R., Minoru T., Yatomi Y. Glycation of apolipoprotein M attenuated its capacity to bind sphingosine 1-phosphate. 29th World Congress of World Association of Societies of Pathology and Laboratory Medicine (WASPaLM) 2017.11.17 Kyoto

19. Mishima Y., Kurano M., Kobayashi T., Nishikawa M., Ohkawa R., Tozuka M., Yatomi Y. Difference between sphingosine 1-phosphate and dihydrosphingosine 1-phosphate in their preference to HDL or albumin. 29th World Congress of World Association of Societies of Pathology and Laboratory Medicine (WASPaLM) 2017.11.17 Kyoto

20. Kameda T., Ohkawa R., Nakamura A., Horiuchi Y., Yamazaki A., Lai SJ., Tozuka M. Effect of myeloperoxidase oxidation and N-homocysteinylation of HDL on its endothelial repair function. 29th World Congress of World Association of Societies of Pathology and Laboratory Medicine (WASPaLM) 2017.11.17 Kyoto

21. Nakamura A., Ohkawa R., Yano K., Kameda T., Tozuka M. Effect of oxidized LDL and HDL on monocyte chemotactic protein-1 secretion of HUVEC. 29th World Congress of World Association of Societies of Pathology and Laboratory Medicine (WASPaLM) 2017.11.17 Kyoto

22. Horiuchi Y., Ohkawa R., Ikoma H., Lai SJ., Yano K., Tozuka M. Cholesterol efflux capacity of apoE-containing HDL. 29th World Congress of World Association of Societies of Pathology and Laboratory Medicine (WASPaLM) 2017.11.17 Kyoto

23. Tsuzura A., Yoshimori M., Konnno K., Imadome K., Onozawa E., Ohkawa R., Tozuka M., Miura O., Arai A. Tumor Cells from EBV-Positive T- or NK-Cell Neoplasms Induce Differentiation and Activation of Macrophages by Secreting Humoral Factors. The 59th American Society of Hematology Annual Meeting 2017.12.11 Atlanta

[受賞]

1. 矢野　康次，第 27 回 生物試料分析化学会年次学術集会 優秀演題賞, 生物試料分析化学会, 2017 年 02 月
2. 賴　劭睿，第 27 回 生物試料分析化学会年次学術集会 優秀演題賞, 生物試料分析化学会, 2017 年 02 月
3. 堀内 優奈．第 12 回日本臨床検査教育学会学術大会 優秀発表賞, 日本臨床検査教育協議会, 2017 年 08 月
4. 堀内 優奈．第 57 回日本臨床化学会年次学術集会　トラベルアウォード, 日本臨床化学会, 2017 年 10 月
5. 佐藤 恵美，2017 年度 日本臨床検査医学会 国際学会奨励賞, 日本臨床検査医学会, 2017 年 11 月

[その他業績]

1. 大川　龍之介，日本学術振興会，平成 29-30 年度 科学研究費補助金（若手研究 B）, 2017 年
   高比重リポタンパクの多様化に関わる分子機構およびその性質・機能への影響，研究代表者
2. 大川　龍之介，日本学術振興会，平成 29-30 年度 科学研究費補助金（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化））, 2017 年 01 月
   赤血球関連コレステロール代謝の分子機構解析，研究代表者
3. 大川　龍之介，公益財団法人 武田科学振興財団，「2016 年度 医学系研究奨励」, 2017 年 01 月
   赤血球を介したコレステロール逆転送機構の解明，研究代表者
4. 大川　龍之介，公益信託 臨床検査医学研究振興基金 平成 28 年度「研究奨励金」, 2017 年 02 月
   臨床検査への応用を目指した高比重リポタンパク機能検査法の確立，研究代表者
5. 戸塚　実，日本学術振興会，科学研究費補助金（基盤研究 C）, 2017 年 04 月
   無細胞系・非放射性・脱超遠心法による HDL のコレステロール引き抜き能測定法の構築

[社会貢献活動]

1. 大川　龍之介，体験型公開講座, 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科
2. 戸塚　実，健康食品管理士会，関東支部幹事
3. 戸塚　実，日本臨床検査自動化学会，評議員
4. 戸塚　実，Clinica Chimica Acta，Editorial Board
5. 戸塚　実，日本臨床検査同学院，認定試験委員
6. 戸塚　実，生物試料分析化学会，評議員
7. 戸塚　実，日本臨床検査学教育協議会，理事長
8. 戸塚　実，日本臨床検査医学会，理事
9. 戸塚　実，日本臨床化学会，常務理事

10. 大川　龍之介，一般社団法人 HECTEF，学術専門委員
11. 大川　龍之介，日本臨床化学会，評議委員
12. 大川　龍之介，日本臨床検査同学院，緊急検査士，試験員
13. 大川　龍之介，International Federation of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine，Corresponding Members of Task Force Young Scientists
14. 大川　龍之介，日本生物試料分析科学会，評議委員
15. 大川　龍之介，東京都臨床検査技師会，臨床化学研究班
16. 大川　龍之介，日本臨床検査同学院，二級病理細菌検査士，試験員

生体防御検査学

Microbiology and Immunology

教授：窪田哲朗
准教授：齋藤良一
助教：加藤優子，谷千尋（3 月まで）
大学院博士課程後期：溝口美裕紀，久末直子，井上久美，Siriphone Virachith
大学院博士課程前期：太田彩花
研究生：Alafate AYIBIEKE

(1) 分野概要

2016 年 12 月から 2017 年 3 月まで，Chulalongkorn 大学の大学院生 Variya Nemitkanam が窪田の研究室に在籍した。寒さにもめげずに熱心に Helicobacter pylori 感染による胃粘膜の炎症をハーブ抽出液で抑制するための基礎研究に取り組み，帰国後も共同研究を続けている。齋藤は米国 Oregon 州立大学に留学して Clostridium 属の緊縮応答に関する研究を行なっていたが，3 月に帰国した。その後も 4 月には本学の海外拠点である Ghana 大学野口記念医学研究所で薬剤耐性菌の実態調査に関する共同研究に参画するなど，国際的に活動している。加藤は膠原病における肺高血圧症の発症機構に関する研究に取り組み，成果を国際学会で発表した。窪田は 4 月から保健衛生学科長を拝命し，大学院の組織改革によって当研究科が 2018 年度から医歯学総合研究科に組み込まれることに関連して，新しい組織体制や大学院カリキュラムの構築等に取り組んだ。

(2) 研究活動

1. 膠原病の病態における自己抗体の役割
2. 自己炎症疾患の病態の解明
3. 免疫学的実験または検査に有用な新しい抗体の作製
4. 細菌の薬剤耐性機構の解明
5. 細菌の病原性因子と宿主生体防御機構の解明
6. 感染症起因微生物の迅速検出法および分子疫学解析法の構築

(3) 教育活動

検査技術学専攻
　病原体検査学講義 (I)，病原体検査学講義 (II)，病原体検査学実習 (I)，病原体検査学実習 (II)，
　免疫検査学講義，免疫検査学実習，臨床病態学 (I)，臨地実習，総合講義，卒業研究
看護学専攻
　微生物学，病態学
大学院
　生体防御検査学特論 A-1，生体防御検査学特論 A-2

(4) 教育方針

1. 免疫検査学
　抗原抗体反応，補体系の反応，細胞性免疫応答などを応用した種々の臨床検査法の基本原理，有用性，問題点などを講義 · 実習を通して教授している。新しい検査法の研究 · 開発にも携わる人材を育成するために，すでに確立した検査技術の修得のみではなく，科学的視点に基づいた思考法を身につけさせることを目標としている。した

がって，まず免疫学全般について基本的事項を時間をかけて解説し，具体的な事柄について，なるべくそのような事実の解明された実験経過なども紹介しつつ，応用能力を育成するように心掛けている。
2. 微生物学・病原体検査学
病原体検査学 (I) は医学微生物学（細菌学，真菌学，ウイルス学，免疫学，寄生虫学）の基礎的な内容について保健衛生学科の看護学専攻および検査技術学専攻の学生（2 年生）に対して講義により教授している。病原体検査学 (II) は，検査技術学専攻の学生（3 年生）に対して，感染症の原因微生物の検出法，薬剤感受性試験，病原微生物の疫学的解析法などについて教授している。そのほとんどを実習時間とし，医学微生物学について実習を通して理解させるように心がけている。

(5) 臨床活動および学外活動

医学部附属病院において，窪田は膠原病・リウマチ内科，齋藤は感染制御部，加藤は検査部の業務に参画している。

(6) 研究業績

[原著]

1. Kageto Yamada, Machiko Kashiwa, Katsumi Arai, Noriyuki Nagano, Ryoichi Saito. Evaluation of the modified carbapenem inactivation method and sodium mercaptoacetate-combination method for the detection of metallo-β-lactamase production by carbapenemase-producing Enterobacteriaceae. J. Microbiol. Methods. 2017.01; 132; 112-115

2. Yuko Kato, Kazuya Shibata, Tetsuo Kubota. Autoantibodies in sle with pulmonary hypertension promote a migration of pulmonary artery smooth muscle cells Lupus Science & Medicine. 2017.02; 4(supl1);

3. 芝田 和弥, 加藤 優子, 窪田 哲朗. 膠原病患者の自己抗体が肺動脈平滑筋細胞へ及ぼす作用の検討 臨床検査学教育. 2017.03; 9(1); 102-103

4. Makiko Egawa, Kohsuke Imai, Masaaki Mori, Naoyuki Miyasaka, Tetsuo Kubota. Placental Transfer of Canakinumab in a Patient with Muckle-Wells Syndrome. J. Clin. Immunol.. 2017.04;

5. Kageto Yamada, Katsumi Arai, Ryoichi Saito. Antimicrobial susceptibility to β-lactam antibiotics and production of BRO β-lactamase in clinical isolates of Moraxella catarrhalis from a Japanese hospital. J Microbiol Immunol Infect. 2017.06; 50(3); 386-389

6. Kageto Yamada, Ryoichi Saito, Saori Muto, Machiko Kashiwa, Yoshiko Tamamori, Shingo Fujisaki. Molecular Characterization of Fluoroquinolone-Resistant Moraxella catarrhalis Variants Generated In Vitro by Stepwise Selection. Antimicrob. Agents Chemother.. 2017.07; 61(10); e01336-17

[書籍等出版物]

1. 窪田哲朗，藤田清貴，細井英司，梶原道子，他編. 最新臨床検査学講座　免疫検査学. 医歯薬出版, 2017.02

2. 井上智子，窪田哲朗，編. 系統間語学講座別巻　臨床薬理学. 医学書院, 2017.02

[総説]

1. 窪田哲朗. 免疫抑制療法下のワクチン接種 リウマチ科. 2017.02; 58; 198-203

2. 山田景土，長野則之，齋藤良一. 表現型からみる carbapenemase-producing Enterobacteriaceae の網羅的スクリーニング法 日本臨床微生物学雑誌. 2017.09; 27(4); 267-274

3. 加藤優子. 大学院における臨床検査インターンシップ「Health Care Assistant」Medical Technology. 2017.12; 45(12); 1218-1219

[講演・口頭発表等]

1. 山田景土, 柏 真知子, 長野則之, 齋藤良一. Carbapenemase-producing Enterobacteriaceae スクリーニング法の比較検討　Modified-Hodge test vs Carba NP test vs carbapenem inactivation method. 第 28 回日本臨床微生物学会総会・学術集会 2017.01.20 千葉

2. 矢野　康次，大川　龍之介，佐藤　恵美，吉本　明，市村　直也，亀田　貴寛，窪田　哲朗，戸塚　実.. コレステロール引き抜き能評価は細胞の分化・泡沫化の程度に大きく影響を受ける.. 第 27 回生物試料分析科学会学術集会 2017.02.11 新潟

3. 貫井陽子, 茅野 崇, 齋藤良一, 谷千尋, 相曽啓史, 藤江俊秀, 東田修二, 小池竜司. Helicobacter cinaedi 菌血症の臨床的・分子疫学的解析. 第 31 回日本環境感染学会総会 2017.02.24 兵庫

4. Chihiro Tani. Gene transfer by natural genetic transformation in Moraxella catarrhalis. 第 90 回日本細菌学会総会 2017.03.18

5. Yuko Kato, Kazuya Shibata, Tetsuo Kubota. Autoantibodies in SLE with pulmonary hypertension promote a migration of pulmonary artery smooth muscle cells. The 12th International Congress on Systemic Lupus Erythematosus (LUPUS 2017) 2017.03.27 Melbourne, Australia

6. Virachth S, Inoue K, Kubota T. Some anti-caldiolipin-beta2-GPI antibodies bring thrombophilic diathesis by the dual reactivity to DNA and internalization to live cells accompanying DNA. . 12th International Congress on SLE 2017.03.27 Melbourne

7. 江川真希子，森雅亮，岡本圭祐，窪田哲朗.. 妊娠期もカナキヌマブ投与を継続したクリオピリン関連周期熱症候群の 1 例.. 第 61 回日本リウマチ学会 2017.04.20

8. Egawa M, Miyasaka N, Fudono A, Yokota M, Hirose A, Imai K, Mori M, Kubota T.. The first case of canakinumab administration during pregnancy for cryopyrin associated periodic syndrome.. 21st International Conference on Prenatal Diagnosis and Therapy 2017.07.09

9. Makoto Ohnishi, Gene Igawa, Misato Dorin, Ken Shimuta, Ryoichi Saito, Shu-Ichi Nakayama. Donor of mosaic pena gene of ceftriaxone resistant neisseria gonorrhoeae fc428 and gu140106. STI and HIV 2017 World Congress 2017.07.09 Rio de Janeiro, Brazil

10. 角 勇樹、加藤 優子、萩原 三千男、東田 修二、窪田 哲朗、戸塚 実、田中 雄二郎. 卒後臨床教育として修士学生 (生体検査学専攻) に導入した Health Care Assistant 制度の 1 年目評価. 第 49 回 医学教育学会 2017.08.19

11. 赤座　実穂，笹野　哲郎，戸塚　実，沢辺　元司，窪田　哲朗，角　勇樹.. 臨床検査技師検体採取実習導入における新たな試み.. 第 12 回日本臨床検査教育学会 2017.08.24 越谷

12. 加藤 優子、角 勇樹、萩原 三千男、東田 修二、戸塚 実、窪田 哲朗. 大学院における臨床検査技師職能教育. 第 12 回日本臨床検査学教育学会学術大会 2017.08.25 埼玉

13. 齋藤良一. 微生物学領域の研究　細菌の薬剤耐性化. 第 12 回日本臨床検査学教育学会学術大会 2017.08.25 埼玉

14. Nemidkanam Variya, Yuko Kato, Tetsuo Kubota, Chaichanawongsaroj Nuntaree. Kaempferia parviflora inhibits inflammatory response mediated by Helicobacter pylori in human gastric cells. 19th International Workshop on Campylobacter, Helicobacter and Related Organisms 2017.09.10 NANTES, FRANCE

15. Kageto Yamada, Ryoichi Saito, Saori Muto, Machiko Kashiwa, Yoshiko Tamamori, Shingo Fujisaki. Molecular characterization of fluoroquinolone-resistant Moraxella catarrhalis variants generated in vitro by stepwise selection. The 5th congress of the Asia Association of Medical Laboratory Scientists 2017.09.22 Busan, Korea

16. Ryoichi Saito, Mahfuzur R. Sarker. Clostridium perfringens RelA and DTD control sporulation. The 29th World Congress of World Association of Societies of Pathology and Laboratory Medicine 2017.11.15 Kyoto, Japan

[その他業績]

1. 窪田哲朗　抗 DNA 抗体は生細胞に結合/侵入して全身性エリテマトーデスの病態形成に関わるか？ , 2017 年 04 月
日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C)　研究代表者　平成 28 年度〜31 年度　468 万円

2. 齋藤良一，クロストリジウム · ディフィシル（CD）の環境適応機構の解明, 2017 年 04 月
科学研究費助成事業, 基盤研究 (C), 平成 29 年度〜平成 31 年度, 研究代表者.

3. 齋藤良一，西アフリカの研究拠点を活用した感染症研究 · 対策ネットワークの構築, 2017 年 04 月
国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）, 研究分担者.

4. 加藤優子，Epac1 欠損マウスを用いた骨髄由来細胞の血管内膜肥厚促進機序の解明, 2017 年 04 月
平成 29 〜 31 年度　文部科学省科学研究補助費　基盤 C　文部科学省，研究代表者，468 万円

5. 加藤優子，雑誌「THE　MEDICAL&TEST JOURNAL」取材, 2017 年 09 月
日本臨床検査教育学会学術大会での発表内容に関して取材を受け、臨床検査の総合情報誌「THE　MEDICAL&TEST JOURNAL」に掲載された。

[社会貢献活動]

1. 窪田哲朗，日本内科学会　認定医, 1988 年 10 月 03 日 - 現在
2. 齋藤良一，日本臨床微生物学会　評議員, 2012 年 01 月 22 日 - 現在
3. 齋藤良一，認定臨床微生物検査技師制度　試験委員, 2012 年 04 月 01 日 - 現在
4. 齋藤良一，日本臨床検査同学院　臨床検査士試験委員, 2012 年 04 月 01 日 - 現在
5. 加藤優子，お茶の水会検査同窓会　幹事役員, お茶の水会検査同窓会, 2012 年 08 月 01 日 - 現在
6. 加藤優子，体験型市民講座「健康寿命を延ばす健康チェック」, 東京医科歯科大学, 2012 年 11 月 01 日 - 現在
7. 齋藤良一，日本臨床衛生検査技師会　染色体 · 遺伝子部門員, 2014 年 04 月 01 日 - 現在
8. 窪田哲朗，東京医科歯科大学生活協同組合理事長, 2014 年 06 月 - 2017 年 05 月
9. 窪田哲朗，難病の患者に対する医療等に関する法律による難病指定医, 2016 年 12 月 01 日 - 現在
10. 谷千尋、微生物学検査基本技術講習会　実務委員, 日本臨床検査同学院
11. 谷千尋、二級臨床検査士資格認定試験　試験委員, 日本臨床検査同学院
12. 谷千尋、寄生虫学検査法技術講習会　実務委員, 日本臨床検査同学院
13. 谷千尋、認定臨床微生物検査技師制度指定講習会　実行委員会副委員長, 認定臨床微生物検査技師制度審議会
14. 窪田哲朗，日本リウマチ学会　評議員，指導医
15. 窪田哲朗，日本臨床検査医学会　評議員
16. 窪田哲朗，日本臨床検査学教育学会　評議員
17. 窪田哲朗，日本臨床免疫学会　評議員
18. 窪田哲朗，American College of Rheumatology　国際会員

分子病態検査学

Molecular Pathology

教　　授　　沢辺 元司
助　　教　　副島 友莉恵
大学院生 (博士)
傳田 珠美
楾　清美
堀口 絢奈
中村 信之
木下 真由美
辰巳 暁哉
宮田 佳奈
大学院生 (修士)
榎　康博
加藤 雅弘
菊池 みなみ
事務補佐員　松原 祥子

(1)　分野概要

病理学は疾病の本態を解明する、基礎と臨床の両者にまたがった医学, 医療の基本となる学問である。
病理検査学は、組織診, 細胞診, 免疫組織化学, 電子顕微鏡, 遺伝子検査等さまざまな検査・診断法により、より質の高い病理診断へと繋げる役割を担う学問である。本分野では病理学と病理検査学の両方の側面から疾病の本態を深く探求している。

(2)　研究活動

本分野では病因・病態を考察，解明し，更には診断に寄与し得るような検査法の理論や手法を探究，開発するため以下の研究を行っている。
1. 動脈老化の臨床病理学的解析およびプロテオーム解析による加齢に伴う大動脈中膜構成成分の検討
2. 心臓刺激伝導系の臨床免疫組織化学的検討
3. 心血管疾患の全ゲノム関連解析（エクソン領域の検討）
4. 肝内胆管癌の分子病理学的解析と発生機序の解明
5. 肝細胞性結節における免疫組織化学的解析および遺伝子解析

(3)　教育活動

学部では、病理検査学講義，病理検査学実習（検査技術学専攻)、病理学（看護学専攻）で基本的な疾病病変の病因・病態を学ぶ。
大学院では、より高度な病理専門技術と国際的な広い視野で分子病理学的検査の理論や方法を探究、開発、体系化することを目的として教育・研究を行っている。

(4) 教育方針

学際的・国際的な視野に立ち，豊かな人間性と高い倫理観をそなえ，自己問題提起・解決型，生涯発展型の思考能力をもった医療人を養成すべく以下のような教育を行っている。

1）学部教育
検査技術学専攻と看護学専攻の2年生に対して病理学・病理検査学の総論では疾病病変の共通の変化，病態の本質，その成因を系統的に論じ，検査技術学専攻では更に病理検査学各論として主な疾病についてその臓器変化，成因を講義している。
検査技術学専攻の2年生には，病理検査学実習において臓器の肉眼観察，基本的な標本作製，観察に加えて，各種特殊染色法，免疫組織化学的検査法，細胞診検査法，凍結切片作製法などの疾病の診断，病因・病態の解明に寄与しうるような病理学的検査法の実習が組まれている。
その他，看護学専攻2年生に対して専門基礎合同演習の一環として病理解剖肉眼観察実習、検査技術学専攻4年生に対して卒業研究として研究の進め方や論文のまとめ方など研究報告の基本を学ぶ特論、臨地実習としてとして医学部附属病院病理部において病理検査実習が実施されている。なお，以上の講義，実習は医学科及び他施設の協力のもとに行われている。

2）大学院教育
博士（前期）課程においては，疾病，特に老年疾患の成因・病態，病理像（肉眼的，組織学的，細胞学的及び分子病理学的）を深く追求，理解し疾病の本態を考察する。更に，病因・病態の解明や診断に有用な病理学的検査法（免疫組織化学的検査、電子顕微鏡検査、画像解析など）の理論や手法を学び，また，実践の場における検査管理や問題解決能力をも修得させる。各種研究会や学会などにも参加し病理学・病理検査学領域における国際的，学際的な研究の現況や展望などについても学んで行く。以上の課程を通して修士論文としての特別研究を完成し，基礎的な研究能力を修得させている。
また，博士（後期）課程では，国際的にも通用する自立した研究能力が修得できるように，より高度な教育と研究指導、および医学英語学習を行っている。

(5) 研究業績

[原著]

1. Yano T, Soejima Y, Nakajima Y, Akashi T, Sawabe M. Application of low-vacuum scanning electron microscopy in cytopathology: To what extent can adenocarcinoma be morphologically distinguished from squamous cell carcinoma in lung cancer? J Med Dent Sci.. 2017.03; 64(1); 1-8

2. 梅澤 敬, 梅森 宮加, 堀口 絢奈, 石橋 智美, 土屋 幸子, 春間 節子, 清川 貴子, 鷹橋 浩幸, 沢辺 元司, 池上 雅博. 膵腫瘤超音波内視鏡下穿刺吸引細胞診の液状処理細胞診とセルブロックによる診断精度　Direct-to-vial study 診断病理. 2017.04; 34(2); 84-91

3. Keiichi Kinowaki, Yurie Soejima, Arisa Kumagai, Fukuo Kondo, Keiji Sano, Takeshi Fujii, Masanobu Kitagawa, Toshio Fukusato. Clinical and pathological significance of myeloid differentiation factor 88 expression in human hepatocellular carcinoma tissues. Pathology international　東京医科歯科大学. 2017.05; 67(5); 256-263

4. Yoshiji Yamada, Jun Sakuma, Ichiro Takeuchi, Yoshiki Yasukochi, Kimihiko Kato, Mitsutoshi Oguri, Tetsuo Fujimaki, Hideki Horibe, Masaaki Muramatsu, Motoji Sawabe, Yoshinori Fujiwara, Yu Taniguchi, Shuichi Obuchi, Hisashi Kawai, Shoji Shinkai, Seijiro Mori, Tomio Arai, Masashi Tanaka. Identification of EGFLAM, SPATC1L and RNASE13 as novel susceptibility loci for aortic aneurysm in Japanese individuals by exome-wide association studies. Int. J. Mol. Med.. 2017.05; 39(5); 1091-1100

5. Yoshiji Yamada, Jun Sakuma, Ichiro Takeuchi, Yoshiki Yasukochi, Kimihiko Kato, Mitsutoshi Oguri, Tetsuo Fujimaki, Hideki Horibe, Masaaki Muramatsu, Motoji Sawabe, Yoshinori Fujiwara, Yu Taniguchi, Shuichi Obuchi, Hisashi Kawai, Shoji Shinkai, Seijiro Mori, Tomio Arai, Masashi Tanaka. Identification of STXBP2 as a novel susceptibility locus for myocardial infarction in Japanese individuals by an exome-wide association study. Oncotarget. 2017.05; 8(20); 33527-33535

6. Yoshiji Yamada, Jun Sakuma, Ichiro Takeuchi, Yoshiki Yasukochi, Kimihiko Kato, Mitsutoshi Oguri, Tetsuo Fujimaki, Hideki Horibe, Masaaki Muramatsu, Motoji Sawabe, Yoshinori Fujiwara, Yu Taniguchi, Shuichi Obuchi, Hisashi Kawai, Shoji Shinkai, Seijiro Mori, Tomio Arai, Masashi Tanaka. Identification

of rs7350481 at chromosome 11q23.3 as a novel susceptibility locus for metabolic syndrome in Japanese individuals by an exome-wide association study. Oncotarget. 2017.06; 8(24); 39296-39308

7. Yoshiji Yamada, Jun Sakuma, Ichiro Takeuchi, Yoshiki Yasukochi, Kimihiko Kato, Mitsutoshi Oguri, Tetsuo Fujimaki, Hideki Horibe, Masaaki Muramatsu, Motoji Sawabe, Yoshinori Fujiwara, Yu Taniguchi, Shuichi Obuchi, Hisashi Kawai, Shoji Shinkai, Seijiro Mori, Tomio Arai, Masashi Tanaka. Identification of eight genetic variants as novel determinants of dyslipidemia in Japanese by exome-wide association studies. Oncotarget. 2017.06; 8(24); 38950-38961

8. Yoshiji Yamada, Jun Sakuma, Ichiro Takeuchi, Yoshiki Yasukochi, Kimihiko Kato, Mitsutoshi Oguri, Tetsuo Fujimaki, Hideki Horibe, Masaaki Muramatsu, Motoji Sawabe, Yoshinori Fujiwara, Yu Taniguchi, Shuichi Obuchi, Hisashi Kawai, Shoji Shinkai, Seijiro Mori, Tomio Arai, Masashi Tanaka. Identification of six polymorphisms as novel susceptibility loci for ischemic or hemorrhagic stroke by exome-wide association studies. Int. J. Mol. Med.. 2017.06; 39(6); 1477-1491

9. Yoshiji Yamada, Jun Sakuma, Ichiro Takeuchi, Yoshiki Yasukochi, Kimihiko Kato, Mitsutoshi Oguri, Tetsuo Fujimaki, Hideki Horibe, Masaaki Muramatsu, Motoji Sawabe, Yoshinori Fujiwara, Yu Taniguchi, Shuichi Obuchi, Hisashi Kawai, Shoji Shinkai, Seijiro Mori, Tomio Arai, Masashi Tanaka. Identification of polymorphisms in 12q24.1, ACAD10, and BRAP as novel genetic determinants of blood pressure in Japanese by exome-wide association studies. Oncotarget. 2017.06; 8(26); 43068-43079

10. Kensuke Nishi, Hao Luo, Kazuhiko Nakabayashi, Keiko Doi, Shuhei Ishikura, Yuri Iwaihara, Yasuhiro Yoshida, Kumpei Tanisawa, Tomio Arai, Seijiro Mori, Motoji Sawabe, Masaaki Muramatsu, Masashi Tanaka, Toshifumi Sakata, Senji Shirasawa, Toshiyuki Tsunoda. An Alpha-kinase 2 Gene Variant Disrupts Filamentous Actin Localization in the Surface Cells of Colorectal Cancer Spheroids. Anticancer Res.. 2017.07; 37(7); 3855-3862

11. Yoshiji Yamada, Jun Sakuma, Ichiro Takeuchi, Yoshiki Yasukochi, Kimihiko Kato, Mitsutoshi Oguri, Tetsuo Fujimaki, Hideki Horibe, Masaaki Muramatsu, Motoji Sawabe, Yoshinori Fujiwara, Yu Taniguchi, Shuichi Obuchi, Hisashi Kawai, Shoji Shinkai, Seijiro Mori, Tomio Arai, Masashi Tanaka. Identification of C21orf59 and ATG2A as novel determinants of renal function-related traits in Japanese by exome-wide association studies. Oncotarget. 2017.07; 8(28); 45259-45273

12. 梅澤 敬, 落合 和彦, 山田 恭輔, 落合 和徳, 岡本 愛光, 磯西 成治, 沢辺 元司, 池上 雅博. 子宮頸部擦過細胞診における従来法と BD シュアパス法の HSIL 以上の陽性率と標本適否の比較 日本臨床細胞学会雑誌. 2017.09; 56(5); 225-231

13. Yoshiji Yamada, Jun Sakuma, Ichiro Takeuchi, Yoshiki Yasukochi, Kimihiko Kato, Mitsutoshi Oguri, Tetsuo Fujimaki, Hideki Horibe, Masaaki Muramatsu, Motoji Sawabe, Yoshinori Fujiwara, Yu Taniguchi, Shuichi Obuchi, Hisashi Kawai, Shoji Shinkai, Seijiro Mori, Tomio Arai, Masashi Tanaka. Identification of five genetic variants as novel determinants of type 2 diabetes mellitus in Japanese by exome-wide association studies. Oncotarget. 2017.10; 8(46); 80492-80505

14. K Miyata, S Morita, H Dejima, N Seki, N Matsutani, M Mieno, F Kondo, Y Soejima, F Tanaka, M Sawabe. Cytological markers for predicting ALK-positive pulmonary adenocarcinoma. Diagn. Cytopathol.. 2017.11; 45(11); 963-970

15. Yoshiji Yamada, Jun Sakuma, Ichiro Takeuchi, Yoshiki Yasukochi, Kimihiko Kato, Mitsutoshi Oguri, Tetsuo Fujimaki, Hideki Horibe, Masaaki Muramatsu, Motoji Sawabe, Yoshinori Fujiwara, Yu Taniguchi, Shuichi Obuchi, Hisashi Kawai, Shoji Shinkai, Seijiro Mori, Tomio Arai, Masashi Tanaka. Identification of TNFSF13, SPATC1L, SLC22A25 and SALL4 as novel susceptibility loci for atrial fibrillation by an exome-wide association study. Mol Med Rep. 2017.11; 16(5); 5823-5832

[書籍等出版物]

1. Fukuo Kondo, Toshio Fukusato, Takuo Tokairin, Koji Saito, Yurie Soejima. Pathology of the Bile Duct. Springer Singapore, 2017.04 (ISBN : 978-981-10-3499-2)

[総説]

1. 近藤福雄，斉藤光次，東海林琢男，副島友莉恵，福里利夫. 【肝臓Ⅱ：肝病理診断のポイント-結節性肝病変-】肝血流異常に起因する結節性病変 (解説/特集) 病理と臨床. 2017.04; 35(4); 339-345

[講演・口頭発表等]

1. 沢辺元司. ラオスおよびネパールにおける病理検査を見て思うこと. 第 67 回群馬臨床細胞学会学術集会・総会 2017.01.28 群馬

2. 副島友莉恵，細谷渚，沢辺元司，明石巧，江石義信，福里利夫. 混合型肝癌組織におけるα 6 β 4, α V β 6 インテグリンと細胞外基質の免疫組織化学的解析. 第 106 回日本病理学会総会 2017.04.27 東京

3. 斉藤光次，近藤福雄，福里利夫，東海林琢男，石田毅，大島康利，笹島ゆう子，宇於崎宏，副島友莉恵，佐野 圭二. Beta-catenin-activated 肝細胞腺腫の核異型と癌化率. 第 106 回日本病理学会総会 2017.04.27 東京

4. 関 敦子, 千田 宏司, 杉山 雄大, 北畑 裕之, 浜松 晶彦, 沢辺 元司, 松田 陽子, 野中 敬介, 柿崎 元恒, 新井 冨生. Intraplaque neovessels and hemorrhage in coronary culprit plaques in fatal AMI cases of the elderly. 第 106 回日本病理学会総会 2017.04.27 東京

5. 中村信之，藤井丈士，副島友莉恵，沢辺元司. Chromogenic in situ hybridization 法におけるトリプシン処理の有用性. 第 106 回日本病理学会総会 2017.04.27

6. 堀口絢奈，梅澤敬，土屋幸子，齋藤歩，副島友莉恵，沢辺元司，廣岡信一，清川貴子，池上雅博，鷹橋浩幸. ERCP 下擦過細胞診における BD サイトリッチ TM 法の診断精度と標本適否の検討. 第 58 回日本臨床細胞学会総会 2017.05.27

7. 梅澤 敬, 落合 和彦, 清川 貴子, 鷹橋 浩幸, 岡本 愛光, 沢辺 元司, 池上 雅博. 精度の高い液状検体の作製法 (領域別トランスレーショナルワークショップ) 細胞診検体の優れた液状処理技術　品質管理とベストプラクティスの共有. 第 58 回日本臨床細胞学会総会 2017.05.27 大阪

8. 梅森 宮加, 倉田 盛人, 梅澤 敬, 根本 淳, 沢辺 元司, 北川 昌伸, 鷹橋 浩幸. 細胞検査士の教育と研究　ステップアップを目指して 社会人大学院で学ぶ　細胞検査士のスキルを研磨する. 第 58 回日本臨床細胞学会総会 2017.05.27 大阪

9. 沢辺元司，三浦ゆり，津元裕樹，岩本真知子，副島友莉恵，吉田祥子，戸田年総，新井冨生，浜松晶彦，遠藤玉夫. ヒト大動脈老化のプロテオミクス解析：アクチン関連タンパク質の変動および抗酸化タンパク質の増加. 第 49 回日本動脈硬化学会総会・学術集会 2017.07.06 広島

10. 斉藤光次，近藤福雄，福里利夫，東海林琢男，石田毅，大島康利，笹島ゆう子，宇於崎宏，副島友莉恵，佐野圭二. 肝細胞腺腫の各亜型における核異型と癌化率. 第 53 回日本肝癌研究会 2017.07.06

11. 近藤福雄，池田豊，石田毅，大島康利，斉藤光次，東海林琢男，笹島ゆう子，熊谷有紗，宇於崎宏，佐野圭二，副島友莉恵，福里利夫. 細胆管細胞癌の分類・発生母地・形成機序：病理組織学的考察. 第 53 回日本肝癌研究会 2017.07.06 東京

12. 梅澤 敬, 原田 徹, 落合 和彦, 清川 貴子, 鷹橋 浩幸, 山田 恭介, 落合 和徳, 岡本 愛光, 春間 節子, 沢辺 元司, 池上 雅博. これからの子宮頸がん検診を考察する-液状化検体細胞診- 液状化検体細胞診による子宮頸部擦過細胞診の品質管理とベストプラクティス. 第 56 回日本臨床細胞学会秋期大会 2017.11.19 福岡

[その他業績]

1. 2017 年 04 月
沢辺元司,「Lipoprotein(a) と悪性腫瘍との関連についての分子疫学的・病理学的研究」，科学研究費助成金（基盤研究 (C)），平成 29 ～ 31 年度，研究代表者

2. 副島友莉恵,「細胆管癌および肝内胆管癌の腫瘍発生に関わるインテグリンβ 4, β 6 の発現と機能解析」，科学研究費助成金（若手研究Ｂ），平成 27 ～ 29 年度，研究代表者

先端血液検査学

Laboratory Molecular Genetics of Hematology

准教授　新井文子
特任助教　吉森真由美
非常勤講師　小山高敏，今留謙一, 中山洋一, 望月美和子

大学院生
博士前期　小野澤枝里香，新木春香, 甘楽明穂（医歯学総合研究科）
博士後期　橋本志歩, 大橋彩香（海外留学中)

事務補佐員　生川晴美

(1)　分野概要

学部では，臨床血液検査学, 臨床病態学，臨地実習，系統講義血液・腫瘍（医学科），臨地実習クルズス（医学科），病態学（看護学専攻）を担当する．血球の産生機構・形態・機能，止血・凝固線溶機構，代表的な血液疾患の病態や臨床像の講義とともに基本的な血液検査の実習を行っている．

大学院では，血液学的，分子遺伝学的手法を駆使し，疾患の早期診断，治療・予防，病態解析に貢献するような分子・遺伝子検査の応用力を身につける．臨床的観察や検査に根ざし，臨床に還元できる研究を行っているが、現在は EBV 陽性 T,NK 細胞腫瘍の病態解明と治療法の開発を中心に研究を展開している。

(2)　研究活動

1) 造血器腫瘍発症機構の解明と治療法の開発
2) EB ウイルスによる T, NK 細胞腫瘍発症のメカニズムの解明と治療法の開発
3) 造血器腫瘍診断試薬キットの開発

上記をテーマとして、学内では血液内科、小児科、神経内科、ウイルス制御学、再生医療センター、眼科、皮膚科、包括病理学、放射線診断学、学外では国立成育医療研究センター研究所、大阪母子医療センター、ドイツのユストウス・リービッヒ（ギーセン）大学生化学教室などと共同研究を行っている．複数企業との共同研究も行っている。

(3)　教育活動

A 学部教育

臨床血液検査学，臨床病態学，系統講義血液・腫瘍（医学科），臨地実習クルズス（医学科），病態学（看護学専攻）を担当する．血球の産生機構・形態・機能，止血・凝固線溶機構，代表的な血液疾患の病態や臨床像の講義とともに基本的な血液検査の実習を行っている．

その他，研究の進め方や論文のまとめ方など研究報告の基本を学ぶ特論（卒業研究）並びに血液検査の実習として医学部附属病院検査部，血液検査機器会社の協力のもと臨地実習が実施されている．なお，以上の講義，実習は医学部附属病院血液検査部，血液内科，小児科の協力のもとに行われている．

B 大学院教育
本科目では，血液学的，分子遺伝学的手法を駆使し，疾患の早期診断，治療・予防，病態解析に貢献するような分子・遺伝子検査の応用力を身につける．特に，臨床的観察や検査に根ざし，臨床に還元できる研究を行っている．最近 2 年間で大学院生の解明した EBV 陽性発症分子機構は、治療薬開発につながっている。現在臨床試験を施行、そして医師主導治験を計画している。
研究内容は，必ず英語論文にまとめ，その成果を世界に発信できるように指導する．
具体的な教育内容は，
1) 疾病，特に血液疾患の成因，病態を深く追求，理解し，疾病の本態を考察する．
2) 病因，病態の解明や診断に役立つ細胞・分子・遺伝子検査，分子・遺伝子レベルの情報伝達解明の分子生物学的実験技法，血液学的検査法の理論や技術を習得する．
3) 血液病学，血液検査学領域における研究の動向や方法を習得する．
4）国内外の学会及び主要国際学術誌に血液検査学，臨床血液病学に関連する研究を発表し，自立して研究できるように，かつ国際的学際的研究のリーダーとしての能力を習得できるようにする．英語論文の読み方，作成セミナーも行う．

(4) 教育方針

学際的，国際的な視野に立ち，豊かな人間性と高い倫理観を備え，自己で問題を提起，解決し，生涯発展を続ける医療人を養成する．

(5) 臨床活動および学外活動

臨床：血液内科・一般内科診療及び教育・指導
研究：
厚生労働科学研究 難治性疾政策研究事業 「慢性活動性 EBV 感染症とその類縁疾患の疾患レジストリとバイオバンク構築 」研究班に参加し診断治療法の開発（診断基準および診療ガイドライン作成）および疾患レジストリ作成を行っている。

日本医療研究開発機構　（AMED）「慢性活動性 EB ウイルス感染症とその類縁疾患に対する革新的治療薬を実現するための統合的研究体制の構築」研究班にて、基礎研究として病態解明と新規治療法の開発を行っている。

CAEBV 患者会 SHAKE
http://caebv.com/
を通じ、慢性活動性 EBV 感染症患者支援活動を行っている。

(6) 臨床上の特色

血液内科・一般内科診療及び指導：EBV 陽性疾患、特に慢性活動性 EB ウイルス感染症では，特に成人例を専門に診療する唯一の機関として国内外から患者を紹介されている。

(7) 研究業績

[原著]

1. Tatsuya Saito, Jyunichi Mukae, Yosuke Nakamura, Hiroshi Inaba, Keiji Nogami, Takatoshi Koyama, Katsuyuki Fukutake, Koh Yamamoto. Cross-reacting material-positive haemophilia A diagnosed in a patient with spontaneous thigh haemorrhage Intern. Med.. 2017;
2. 小野澤枝里香、柴山春奈、今留謙一、甘楽明穂、小山高敏、三浦修、新井文子. . 慢性活動性 Epstein-Barr ウイルス感染症における炎症性サイトカイン産生. 臨床血液. 2017.03; 58(3); 189-196
3. Honami Takada, Ken-Ichi Imadome, Haruna Shibayama, Mayumi Yoshimori, Ludan Wang, Yasunori Saitoh, Shin Uota, Shoji Yamaoka, Takatoshi Koyama, Norio Shimizu, Kouhei Yamamoto, Shigeyoshi Fujiwara, Osamu Miura, Ayako Arai. EBV induces persistent NF-κ B activation and contributes to survival of EBV-positive neoplastic T- or NK-cells. PLoS ONE. 2017.03; 12(3); e0174136

4. Ohashi A, Murata A, Cho Y, Ichinose S, Sakamaki Y, Nishio M, Hoshi O, Fischer S, Preissner KT, Koyama T. The expression and localization of RNase and RNase inhibitor in blood cells and vascular endothelial cells in homeostasis of the vascular system. PLoS One. 2017.03;
5. Misae Tsunaka, Haruka Shinki, Takatoshi Koyama. Cell-based evaluation of changes in coagulation activity induced by antineoplastic drugs for the treatment of acute myeloid leukemia. PLoS ONE. 2017.04; 12(4); e0175765
6. Ayano Imai, Hiroshi Takase, Ken-Ichi Imadome, Go Matsuda, Iichiro Ohnishi, Kouhei Yamamoto, Takumi Kudo, Yoji Tanaka, Taketoshi Maehara, Osamu Miura, Ayako Arai. Development of Extranodal NK/T-cell Lymphoma Nasal Type in Cerebrum Following Epstein-Barr Virus-positive Uveitis. Intern. Med.. 2017.05; 56(11); 1409-1414
7. 柴山 春奈，今留 謙一，小野澤 枝里香，甘楽 明穂，三浦 修，小山 高敏，新井 文子. 慢性活動性 Epstein-Barr virus 感染症におけるウイルス特異的細胞傷害性 T 細胞 臨床血液. 2017.06; 58(6); 583-588
8. Akira Toriihara, Reiko Nakajima, Ayako Arai, Masashi Nakadate, Koichiro Abe, Kazunori Kubota, Ukihide Tateishi. Pathogenesis and FDG-PET/CT findings of Epstein-Barr virus-related lymphoid neoplasms. Ann Nucl Med. 2017.07; 31(6); 425-436
9. Yujin Sekinaka, Noriko Mitsuiki, Kohsuke Imai, Miharu Yabe, Hiromasa Yabe, Kanako Mitsui-Sekinaka, Kenichi Honma, Masatoshi Takagi, Ayako Arai, Kenichi Yoshida, Yusuke Okuno, Yuichi Shiraishi, Kenichi Chiba, Hiroko Tanaka, Satoru Miyano, Hideki Muramatsu, Seiji Kojima, Asuka Hira, Minoru Takata, Osamu Ohara, Seishi Ogawa, Tomohiro Morio, Shigeaki Nonoyama. Common Variable Immunodeficiency Caused by FANC Mutations. J. Clin. Immunol. 2017.07; 37(5); 434-444
10. S Tokoro, T Namiki, K Miura, K Watanabe, A Arai, K Imadome, H Yokozeki. Chronic active Epstein-Barr virus infection with cutaneous lymphoproliferation: haemophagocytosis in the skin and haemophagocytic syndrome. J Eur Acad Dermatol Venereol. 2017.10; [Epub ahead of print] ;
11. Akira Toriihara, Ayako Arai, Masashi Nakadate, Kouhei Yamamoto, Ken-Ichi Imadome, Osamu Miura, Ukihide Tateishi. FDG-PET/CT findings of chronic active Epstein-Barr virus infection. Leuk. Lymphoma. 2017.10; 1-4

[書籍等出版物]

1. 小山高敏　井上智子，窪田哲朗 編．. 系統看護学講座別巻　臨床薬理学，第 3 章　主要疾患の臨床薬理学 . 医学書院, 2017.01 (ISBN : 978-4-260-02770-0)
2. 新井文子. 『今日の臨床サポート』（改訂第 3 版）血球貪食症候群. エルゼビア, 2017.03

[講演 · 口頭発表等]

1. 柴山春奈，今留謙一，小野澤枝里香，甘楽明穂，三浦修，小山高敏，新井文子. 慢性活動性 EB ウイルス感染症における EBV 特異的細胞傷害性 T 細胞. 第 26 回 EB ウイルス感染症研究会 2017.03 東京
2. 杉田佳祐，馬渕卓，大内修司，鈴木里彩，阿部庸子，三浦圭子，小山高敏，金子英司，下門顕太郎. 全身性紅斑、発熱、関節痛、体重減少を契機に診断された骨髄異形成症候群の一例. 第 65 回日本老年医学会関東甲信越地方会 2017.03 新潟
3. 小野澤枝里香，柴山春奈，今留謙一，甘楽明穂，小山高敏，三浦修，新井文子. 慢性活動性 EB ウイルス感染症における炎症性サイトカインの産生の解析. 第 26 回 EB ウイルス感染症研究会 2017.03 東京
4. 山下　知子, 水地　大輔, 吉藤　康太, 田中　圭祐, 野上　彩子, 渡邊　健, 坂下　千瑞子, 福田　哲也, 新井 文子, 川又　紀彦, 三浦　修, 山本　正英. 中枢神経リンパ腫に対する busulfan を含む前処置を用いた自家末梢血幹細胞移植の検討. 第 39 回日本造血幹細胞移植学会総会 2017.03.03 松江
5. 酒井伸, 吉藤康太, 齋藤達也, 山下知子, 野上彩子, 渡邉健, 新井文子 , 川又紀彦　三浦修. 若年成人 T 細胞性急性リンパ性白血病に対する L-asparaginase 投与に伴う超高トリグリセリド血症. 日本内科学会関東地方会 2017.03.11 東京
6. Erika Onozawa, Haruna Shibayama, Sho Aoki, Akiho Tuzura, Ken-ich Imadome, Takatoshi Koyama, Osamu Miura, Ayako Arai. STAT3 is constitutively activated and can be a therapeutic target of JAK inhibitors in chronic active Epstein-Barr virus infection. The 22th Congress of European society of Hematology 2017.06.23 Madrid

7. Misae Tsunaka, Haruka Shinki, Takatoshi Koyama. Cell-based evaluation of changes in coagulation activity induced by antineoplastic drugs for the treatment of acute myeloid leukemia. The 22th Congress of European society of Hematology. The 22th Congress of European society of Hematology 2017.06.23 Madrid

8. 渡邉 健，吉藤 康太，齋藤 達也，山下 知子，野上 彩子，山本 正英，坂下 千瑞子, 福田 哲也，新井 文子，東田 修二，川又 紀彦，三浦 修. 腫瘍随伴性天疱瘡と閉塞性細気管支炎を合併した濾胞性リンパ腫の 1 例. 第 4 回日本血液学会関東甲信越地方会 2017.07.01 松本

9. 甘楽明穂、吉森真由美、小野澤枝里香、今留謙一、大川龍之介、戸塚実、三浦修、小山高敏、新井文子. EB ウイルス陽性 T,NK 細胞培養上清は単球系細胞のマクロファージへの 分化とサイトカイン産生を誘導する. 第 4 回日本血液学会関東甲信越地方会 2017.07.01 松本

10. 今野夏乃子、甘楽明穂、吉森真由美、小野澤枝里香、今留謙一、大川龍之介、戸塚実、新井文子. Epstein-Barr ウイルス陽性 T,NK 細胞培養上清は単球系細胞のマクロファージへの分化を誘導する. 第 12 回日本臨床検査学教育学会学術大会 2017.08.23 越谷

11. 新井文子. 慢性活動性 Epstein-Barr ウイルス感染症　～炎症と腫瘍、2 つの顔を持つ疾患～. 第 45 回日本臨床免疫学会総会ワークショップ慢性炎症と免疫不全 2017.09.29 東京

12. 米瀬 一朗、坂下 千瑞子、今留 謙一、小林 徹、澤田 明久、伊藤 嘉規, 福原 規子、廣瀬朝生、竹田 勇輔、牧田雅典、遠藤 知之、木村 俊一、石村 匡崇、冨田　誠、中村　桂子、三浦 修、大賀正一、木村宏、藤原 成悦、新井 文子. 慢性活動性 EB ウイルス感染症の本邦における診療実態の全国調査. 第 79 回日本血液学会総会 2017.10.20 東京

13. 甘楽明穂、今留謙一、大内史彦、柴山春奈、小原収、今井耕輔、松田剛、小野澤枝里香、吉森真由美、小山高敏、三浦修、新井文子. 慢性活動性 EB ウイルス感染症における APOBEC3B の発現亢進. 第 79 回日本血液学会総会 2017.10.21 東京

14. 小野澤枝里香、柴山春奈、高田穂菜実、今留謙一、青木奨、吉森真由美、藤原成悦、小山高敏、三浦修、新井文子. 慢性活動性 Epstein-Barr ウイルス感染症では STAT3 が恒常的に活性化し治療標的となりうる. 第 79 回日本血液学会総会 2017.10.21 東京

15. Tomoko Yamashita, Hiroki Tsutsumi, Kota Yoshifuji, Tatsuya Saito, Yoshihiro Umezawa, Ayako Nogami, Ken Watanabe, Toshikage Nagao, Chizduko Sakashita, Masahide Yamamoto, Ayako Arai, Norihiko Kawamata, Osamu Miura, Tetsuya Fukuda. Chronic Lymphocytic Leukemia/Small Lymphocytic Lymphoma with 11q Deletion. The 79th Annual Meeting of the Japanese Society of Hematology 2017.10.22 Tokyo

16. 吉森真由美、今留謙一、新井文子、川野布由子、石川百合子、高橋絵都子、和田尚美、湯之前雄太、外丸靖浩、清水則夫. 定量ストリップ法による Epstein-Barr virus DNA 測定法の開発. 第 64 回日本臨床検査医学会学術集会 2017.11.17 第 64 回日本臨床検査医学会

17. Akiho Tsuzura, Mayumi Yoshimori,Kanoko Konno, Ken-Ichi Imadome, Erika Onozawa, Ryunosuke Ohkawa, Minoru Tozuka, Osamu Miura, Ayako Arai. Tumor Cells from EBV-Positive T- or NK-Cell Neoplasms Induce Differentiation and Activation of Macrophages by Secreting Humoral Factors. The 59th American Society of Hematology Annual Meeting 2017.12.11 Atlanta

[受賞]

1. 日本臨床検査学教育学会学術大会優秀発表賞，今野夏乃子, 日本臨床検査学教育学会, 2017 年 08 月

[その他業績]

1. 慢性活動性 Epstein-Barr ウイルス感染症に対するルキソリチニブの単剤療法の有効性、安全性に関する第Ⅱ相試験, 2017 年 04 月
   日本医師会治験促進事業 代表研究者　新井文子

2. 慢性活動性 EBV 感染症とその類縁疾患の疾患レジストリとバイオバンク構築, 2017 年 04 月
   厚労省難治性疾患等政策研究事業
   分担研究者　新井文子

3. 慢性活動性 EB ウイルス感染症とその類縁疾患に対する革新的治療薬を実現するための統合的研究体制の構築, 2017 年 04 月
   AMED 難治性疾患実用化研究事業
   分担研究者　15ek0109098　新井文子

4. EBV 陽性 T/NK 細胞リンパ腫における APOBEC の機能 , 2017 年 04 月
   日本学術振興会基盤 C. 研究代表者
   15K09468　新井文子

[社会貢献活動]

1. 日本内科学会認定内科医，総合内科専門医，指導医　小山高敏, 1991 年 - 現在
2. 日本血液学会専門医，指導医　小山高敏, 1992 年 - 現在
3. 日本内科学会認定内科医，総合内科専門医，指導医　新井文子, 1992 年 09 月 25 日 - 現在
4. 臨床検査技師国家試験模擬試験問題作成 · 編集．臨床血液学 · 臨床病態学　小山高敏, 医歯薬出版, 1999 年 - 現在
5. 日本血液学会　評議員　小山高敏, 1999 年 - 現在
6. 日本血栓止血学会　評議員　小山高敏, 2000 年 - 現在
7. 日本検査血液学会　評議員，及び認定血液検査技師制度委員会審議会委員　小山高敏, 2000 年 - 現在
8. 大学院保健衛生学研究科生体検査科学専攻主催体験型公開講座の企画 · 運営　小山高敏, 2002 年 - 現在
9. 日本血液学会専門医　新井文子, 2002 年 04 月 01 日 - 現在
10. 日本臨床腫瘍学会　暫定指導医　新井文子, 2005 年 04 月 01 日 - 現在
11. 日本血液学会指導医　新井文子, 2007 年 04 月 01 日 - 現在
12. 日本血液学会　評議員　新井文子, 2008 年 03 月 01 日 - 現在
13. 日本内科学会サマリー評価委員　新井文子, 2008 年 04 月 01 日 - 現在
14. 日本がん治療認定医機構 暫定教育医 · がん治療認定医　新井文子, 2008 年 04 月 01 日 - 現在
15. 日本造血細胞移植学会　社保委員　新井文子, 2012 年 04 月 01 日 - 現在
16. 日本血液学会　診療委員　新井文子, 2012 年 04 月 01 日 - 現在
17. 日本造血細胞移植学会　細胞移植認定医　新井文子, 2014 年 10 月 01 日 - 現在
18. 日本血液学会　臨床血液編集企画委員　新井文子, 2015 年 04 月 01 日 - 現在
19. 日本血液学会　内保連委員　新井文子, 2016 年 04 月 01 日 - 現在
20. 「病名がわからない苦しみと闘った女性」　新井文子, 日本テレビ, ザ！ 世界仰天ニュース, 2017 年 05 月 09 日
21. 「CAEBV について」　新井文子, 毎日新聞社, 毎日新聞, 2017 年 11 月 19 日

Ⅲ.2017 年度保健衛生学科学士課程卒業論文題目一覧表

2017年度保健衛生学科学士課程卒業論文題目一覧表

○学士（看護学）５２名

	氏　名	論　文　題　目
1	喜 井 幸 媛	妊産婦にとってバースプランとは何か
2	小 石 優 希	初産婦が産褥入院中に体験する母乳育児の難しさとは何か
3	高 原 萌	患者が医療者にウソをつくとき
4	田 島 真 里 子	行動変容しなければならない妊婦への効果的な支援について
5	長 田 真 由 子	助産師として NICU で働く意味
6	西 田 梨 花 子	妊娠期に想定していなかった産後の痛み動きづらさ
7	福 島 ゆ り 子	産婦が感じた、分娩時に誰かにそばにいてもらうことの意味
8	奥 村 結 月	院内学級の現状と看護に関する文献検討
9	竹 原 菜 月 羽	慢性疾患を抱える思春期の子どもへの養護教諭による精神的支援
10	萩 原 彩 乃	別室登校を行う児童生徒に対する支援内容の検討
11	矢 沢 彩 恵	自閉症スペクトラム障害児者のきょうだいの体験と支援
12	柿 佑 佳	看護学生の看護師イメージについての文献検討
13	上 倉 茉 莉	擦式消毒剤を使用した臨地実習中の手指消毒の実施動機
14	勝 又 彩 瑛	看護学生の看護場面における接触への抵抗感
15	池 村 結 華	手術室勤務の看護師が抱えるストレスに関する文献検討
16	小 田 清 花	消化器外科手術後の経過が順調でない患者の精神的苦痛に関する文献研究
17	矢 島 佐 知 子	脳血管障害で入院した患者が退院後に感じた困難に関する文献検討―看護師が行うべき自宅での日常生活動作に関する退院支援についての考察―
18	前 田 絵 海	手術室に勤務する新人看護師とベテラン看護師の外回り看護の実際―患者入室までのリスク回避するための予防的支援に着目して―
19	甚 野 綾 香	看護師のレジリエンスに影響を与えたポジティブ要因―困難体験のインタビューより―
20	安 藤 加 織	大学生の生活習慣、健康状態と肌状態の関連性の検討
21	狩 野 智 子	看護学生の特定保健用食品に関する利用実態および認識と食行動の関連性
22	中 野 佳 那	看護学生のサプリメント利用実態認識とダイエットの関連の検討
23	坂 本 真 由	核家族における経産婦の育児の状況と求める支援
24	永 井 未 来	若年女性労働者の食習慣における課題と産業保健師による活動
25	廣 野 礼 菜	産業保健師による妊娠期から子育て期の女性労働者への支援
26	三 浦 万 由	地域における低出生体重児とその家族の特徴と保健師が行う支援
27	北 原 彩 子	笑いとメンタルヘルス―笑いによる実習中の看護学生の気分変化とその効果―
28	重 山 綾 香	アルコール依存症患者の断酒へ影響を与える看護―断酒継続者へのインタビューを通して―
29	吉 澤 菜 々 子	看護学生の臨地実習におけるポジティブネガティブ経験に対するコーピングと対処―学生が求める指導とは―
30	宮 下 倫 果	退院後、単身生活をしている統合失調症を持つ当事者の生活体験や思いの変化

	氏　名	論　文　題　目
31	川 邉 萌 乃	ADHD 児が医療機関受診時に母親が感じる困難医療者に求めること
32	髙 橋 佑 菜	6 か月以上の入院経験がある統合失調症者の退院前後の思いと地域生活
33	平 田 三 奈	知的障害者の家族の課題と支援に関する質的研究：文献検討
34	瀬 戸 菜 月	Evidence Based Practice のための入院患者へのせん妄ケアに関する文献検討
35	川 﨑 翔 太	入院患者へのせん妄ケアに関するエビデンスに基づく看護師向けの教育的介入の開発
36	前 田 夏 咲	入院患者へのせん妄ケアに関するエビデンスの臨床での看護師による活用可能性
37	小 澤 里 沙	看護師の捉える尿路ストーマ保有者の社会生活上の困難とその介入
38	小 野 寺 優 芽	摂食嚥下障害のある高齢患者への食事介助における看護師の経験年数による観察項目の違い
39	鈴 木 詩 織	重度認知症における終末を見据えた精神的苦痛緩和ケアの文献レビュー
40	竹 野 敏 史	脳神経外科を主診療科とする回復期リハビリテーション病棟の特徴と自宅退院割合との関連－全国データの分析－
41	木　村　彩	在日外国人の医療体験―留学生を対象とした Web 調査より―
42	曾 根 田 ま す み	在日外国人の医療体験―留学生を対象としたインタビュー調査より―
43	久 保 田 有 咲	在宅で人工呼吸療法を行っている小児の日米比較
44	後 藤 真 侑 子	慢性腎臓病患者への情報通信技術を活用した支援に関する文献検討
45	藤 井 聡 美	在宅療養支援における多職種連携の困難と解決に向けた取り組み
46	相 澤 佳 奈 子	2 型糖尿病患者の特徴別にみた自己管理自己効力感と必要な看護支援について
47	岸 田 聡 美	終末期がん患者の療養場所決定における不安や葛藤と意思決定支援
48	柳　茜　里	看護学生の実習経験が与えるライフプランへの影響
49	石 井 菜 月	家族介護者の身体的健康に関する文献検討
50	影 山 綾 香	がん患者の配偶者の体験に関する文献検討
51	牧 田 佳 音	「手で触れるケア」の実際と近年の研究動向に関する文献検討
52	矢 口 詩 織	在宅で療養する終末期がん患者の家族の体験についての文献検討

○学士（保健学）３５名

	氏　名	論　文　題　目
1	蒼見　阿日倫	Application of DNA/RNA Heteroduplex Oligonucleotide to Lung
2	生駒　美樹	臨床データを用いたALSにおける進行機序の検討
3	臼井　雪乃	Clostridium difficileの増殖能、毒素産生能および芽胞形成能に対するデオキシコール酸の影響
4	太田　優花	アルコール多飲者にみられる結節の病理組織学的解析および遺伝子解析
5	大野　絢音	次世代シーケンサーを用いたデジタルカリオタイピングにおけるトリソミーの検出感度の検討
6	恩知　千菜美	ラミニンアイソフォームのオリゴデンドロサイト前駆細胞接着活性の解析
7	片山　ひかり	原子間力顕微鏡によるEscherichia coli DH5 α Competent Cellの超微構造解析
8	今野　夏乃子	Epstein-Barrウイルス陽性T,NK細胞培養上清は単球系細胞のマクロファージへの分化を誘導する
9	佐々木　奏絵	体表心電図のP波フラグメント解析による心房細動基質の評価
10	佐藤　里菜	成長円錐における局所的蛋白合成
11	佐藤　和佳菜	ガーナ臨床分離株の薬剤耐性に関する解析
12	篠田　光甫	靭帯組織に存在する間葉系幹細胞（MSCs）の分化指向性の解析
13	隅田　貴俊	大腸分泌系細胞における部位依存的な多様性の解析
14	高木　結衣	PVDF膜に転写したタンパク質からの質量分析イメージングにおける固定法の検討
15	竹内　美穂	胆管癌細胞株におけるインテグリンα6β4，αvβ6と細胞外基質の関連
16	田中　知咲	膠原病患者の抗enolase1抗体は肺動脈平滑筋細胞の遊走を促進する
17	千葉　里沙子	心筋梗塞モデルマウスにおける、荷電ナノ粒子が梗塞領域に与える影響の検討
18	中山　侑乃	抗DNA抗体はSLE単球のBAFF産生亢進の原因とはならない
19	南部　真由	炎症の程度が高比重リポタンパクの性状に及ぼす影響
20	野川　大地	卵巣癌におけるMCM2 (minichoromosome maintenance protein 2) タンパクの細胞内局在に着目した発現検討
21	八田　千咲	ニホンザルによる素材感知覚の学習と新規素材の質感評価
22	藤澤　亮太	滑膜由来間葉系幹細胞の凍結保存についての検討
23	細田　ゆき奈	Teneurin-4細胞外ドメインに対するTeneurinアイソフォームの接着活性
24	前田　惟那	Moraxella catarrhalisのリボソームタンパク質変異はマクロライド系抗菌薬耐性化に関与する
25	増山　みさき	沈殿法と超遠心法で分離した高比重リポタンパクのコレステロール引き抜き能の比較
26	三枝　凌太	Fuzzy適応制御則による選択式脳低温温度管理アルゴリズムの検証
27	村田　安里紗	アポリポタンパクE含有高比重リポタンパクの酸化感受性
28	柳澤　瑛里子	抗てんかん薬(antiepileptic drug : AED)による血液学的影響について
29	山形　友香	MyeloperoxidaseとChymaseの作用により産生される断片化アポリポタンパクA-Iの解析
30	弓庭　さつき	ヒト悪性腫瘍におけるapolipoprotein(a)の病理学的研究

	氏　名	論　文　題　目
31	吉 田　咲 絵	素材感識別課題を用いてニホンザルの素材感知覚を評価する試み
32	和 久　万 理 香	Indoor air quality in the bedroom of patients with asthma and the effect of using air purifiers.
33	渡 辺　芙 由 子	人工ナノ粒子によるNon-viral gene delivery
34	渡 辺　芳 乃	細胞表面のDNAを介して細胞内に侵入することによって血栓形成傾向を誘発する抗リン脂質抗体
35	井 上　咲 智 子	迅速かつ精確な温度管理を実現する冷却モデルのための切替温度の検討

Ⅳ．2017 年度大学院保健衛生学研究科博士（前期・後期）課程学位論文題目一覧表

2017年度大学院保健衛生学研究科博士（前期・後期）課程学位論文一覧表

○修士（保健学）１５名

	氏　名	専　攻	指導教員	論　文　名	主　査	副　査	副　査
1	大野　愛	生体検査科学専攻	笹野　哲郎	Evaluation of the Effect of Antiplatelets and Anticoagulants using Dielectric Coagulometer	角　勇樹	新井　文子	笹野　哲郎
2	大山　咲希	生体検査科学専攻	角　勇樹	Cluster analysis of patients with cough, mainly cough variant asthma, showing a good response to inhaled corticosteroids	沢辺　元司	角　勇樹	笹野　哲郎
3	小野澤　枝里香	生体検査科学専攻	新井　文子	STAT3 is constitutively activated in chronic active Epstein-Barr virus infection and can be a therapeutic target	窪田　哲朗	赤澤　智宏	新井　文子
4	新木　春香	生体検査科学専攻	新井　文子	The products of Epstein-Barr virus-positive neoplastic T-or NK-cells enhanced procoagulant activity through tissue factor expression in monocytic and vascular endothelial cells	窪田　哲朗	東田　修二	新井　文子
5	杉崎　綾奈	生体検査科学専攻	星　治	Development of fluorescent orientation probes for actin molecules in vivo	伊藤　南	星　治	鈴木　喜晴
6	中村　文香	生体検査科学専攻	戸塚　実	The Effect of Oxidized LDL and HDL on Monocyte Chemotactic Protein-1 Secretion of HUVEC	星　治	戸塚　実	鈴木　喜晴
7	中村　和奏	生体検査科学専攻	笹野　哲郎	Circulating cell-free DNA and cell-free mitochondrial DNA in patients with atrial fibrillation	角　勇樹	伊藤　南	笹野　哲郎
8	永森　千寿子	生体検査科学専攻	角　勇樹	Longitudinal investigation into implict stigma of epilepsy among Japanese medical students before and after mass media coverage of car accidents associated with people with epilepsy	沢辺　元司	赤澤　智宏	角　勇樹
9	棗　祐有	生体検査科学専攻	笹野　哲郎	Combined Analysis of Human and Experimental Murine Samples Identified Novel Circulating MicroRNAs as Biomarkers for Atrial Fibrillation	窪田　哲朗	齋藤　良一	笹野　哲郎
10	兵頭　舞	生体検査科学専攻	鈴木　喜晴	Biological functions of laminin isoforms on survival and migration of oligodendrocyte	戸塚　実	沢辺　元司	鈴木　喜晴
11	古家　若葉	生体検査科学専攻	角　勇樹	Reference values of MostGraph measures for healthy Japanese adults	伊藤　南	戸塚　実	角　勇樹
12	堀池　勇太	生体検査科学専攻	赤澤　智宏	Inhibition of p53 gene controls cellular senescence of mesenchymal stem/stromal cells	戸塚　実	赤澤　智宏	笹野　哲郎
13	堀内　優奈	生体検査科学専攻	戸塚　実	Cholesterol Ettlux Capacity of Apolipoprotein E-containing High-density Lipoprotein	星　治	角　勇樹	戸塚　実
14	村上　紀里香	生体検査科学専攻	鈴木　喜晴	Assessment of chromosomal aneuploidy in knee osteoarthritis by digital karyotyping using next generations seguencer	星　治	新井　文子	鈴木　喜晴
15	山崎　あずさ	生体検査科学専攻	戸塚　実	Analysis of apolipoprotein C-Ⅱ and C-Ⅲ transfer between high-density lipoprotein and very low-density lipoprotein	赤澤　智宏	戸塚　実	齋藤　良一

課程博士

○博士（看護学）８名

	氏　名	専　攻	指導教員	論文名	主　査	副　査	副　査
1	富岡　晶子	総合保健看護学 （リプロダクティブヘルス看護学）	大久保　功子	Physical and social characteristics and support needs of adult female childhood cancer survivors who underwent hormone replacement therapy	田中　真琴	大久保　功子	岡光　基子
2	小玉　淑巨	総合保健看護学 （看護システムマネジメント学）	深堀　浩樹	Nurse managers' attributes to promote change in their wards: a qualitative study	緒方　泰子	大久保　功子	深堀　浩樹
3	岩崎　孝子	総合保健看護学 （高齢者看護・ケアシステム開発学）	緒方　泰子	A purposeful yet non-imposing approach: How Japanese homecare nurses establish relationships with older clients and their families	佐々木　吉子	田中　真琴	緒方　泰子
4	申　于定	総合保健看護学 （先端侵襲緩和ケア看護学）	田中　真琴	Intention Formation Process for the use of Tracheostomy and Invasive Ventilation in Patients with Amyotrophic Lateral Sclerosis	本田　彰子	石川　欽也	田中　真琴
5	瀧口　千枝	看護先進科学 （先端侵襲緩和ケア看護学）	田中　真琴	Development of the Nurses　Care Coordination Competency Scale for mechanically ventilated patients in critical care settings in Japan: Part 2. Validation of the scale	緒方　泰子	佐々木　吉子	田中　真琴
6	西村　礼子	総合保健看護学 （生体・生活機能看護学）	齋藤　やよい	Effect of demonstrating situation awareness on nurses' gaze and judgment in a computer-based task for environmental management: a randomized controlled trial	佐々木　吉子	大久保　功子	深堀　浩樹
7	杉本　健太郎	看護先進科学 （高齢社会看護ケア開発学）	緒方　泰子	Factors associated with deaths in 'Elderly Housing with Care Services' in Japan: a cross-sectional study	佐々木　明子	緒方　泰子	深堀　浩樹
8	廣岡　佳代	総合保健看護学 （看護システムマネジメント学）	深堀　浩樹	Quality of death, rumination, and posttraumatic growth among bereaved family members of cancer patients in home palliative care	本田　彰子	山崎　智子	深堀　浩樹　准教授

○博士（保健学）５名

	氏　名	専　攻	指導教員	論文名	主　査	副　査	副　査	副　査
1	市村　直也	生体検査科学 （先端分析検査学）	戸塚　実	High-Density Lipoprotein Binds to Mycobacterium avium and Affects the Infection of THP-1 Macrophages	角　勇樹	戸塚　実	齋藤　良一	
2	名倉　豊	生体検査科学 （先端分析検査学）	戸塚　実	Regulation of the lysophosphatidylserine and sphingosine 1-phosphate levels in autologous whole blood by the pre-storage leukocyte reduction	窪田　哲朗	星　治	戸塚　実	新井　文子
3	楳　清美	生体検査科学 （分子病態検査学）	沢辺　元司	Knowledge and attitude toward cervical cancer and its prevention among female workers in the Vientiane Capital, Lao PDR	窪田　哲朗	宮坂　尚幸	沢辺　元司	
4	緒方　勇亮	生体検査科学 （分子生命情報解析学）	赤澤　智宏	Anterior cruciate ligament-derived mesenchymal stromal cells have a propensity to differentiate into the ligament lineage.	沢辺　元司	淺原　弘嗣	赤澤　智宏	
5	石井　佳菜	生体検査科学 （分子生命情報解析学）	赤澤　智宏	Recapitulation of extracellular LAMININ environment maintains stemness of satellite cells in vitro	窪田　哲朗	畑　裕	赤澤　智宏	

論文博士

○博士（看護学）１名

	氏　名		推薦教員	論文名	主　査	副　査	副　査
1	遠山　寛子		本田　彰子	Using Narrative Approach for Anticipatory Grief Among Family Caregivers at Home	田上　美千佳	緒方　泰子	山崎　智子

Ⅴ.委員会委員名簿

2017年度各種委員会等メンバー

［大学院］
保健衛生学研究科長：　本　田
大学院教育委員会委員長：緒　方
看護先進科学専攻長：　大久保
生体検査科学専攻長：　角
共同災害看護学専攻長：　佐々木(吉)

［学部］
保健衛生学科長：　窪　田
学部教育委員会委員長：沢　辺
看護学専攻主任：　田　上
検査技術学専攻主任：　星

〔大学院教育委員会〕	☆緒方、佐々木(吉)、大久保、伊藤、窪田、沢辺、（本田）
〔学部教育委員会〕	☆沢辺、田中、田上、森田、角、笹野、（本田、窪田）
〔国際教育・研究センター〕	【看】○佐々木(明)、近藤、田中、深堀、駒形、津田
	【検】☆沢辺、笹野、副島
〔タイのチュラロンコーン大学受入TF〕	【検】☆沢辺、笹野、大川、副島、馬渕、須藤
〔専門看護師検討WG〕	【看】☆緒方、○田中、○山崎、大久保、本田、田上、美濃、岡光、川上、深堀
〔医歯学融合教育委員会〕	【看】深堀(科目担当)、廣山
	【検】角〔「チーム医療入門」シナリオ作成TF　齋藤(良)、加藤､大川〕
〔スキルス・ラボ検討委員会〕	【検】角
〔学部カリキュラム小委員会〕	【看】☆佐々木(明)、大久保、近藤、田中、森田
	【検】☆角、沢辺、窪田
〔実習・臨地実習担当小委員会〕	【看】☆山﨑、○大河原、○湯本、森田、深堀、美濃、三隅、内堀、川上、廣山、大黒、津田、岡光、川本、矢郷、森岡
	【検】☆角、齋藤(良)、新井、加藤、副島、赤座、戸塚、沢辺
〔インターンシップ小委員会〕	【検】☆伊藤、齋藤(良)、馬渕、副島、大川
〔卒業研究小委員会〕	【看】☆山﨑、内堀、大河原、森岡、津田
	【検】☆星、赤澤、鈴木、長、本間、馬渕、須藤、赤座
〔進路指導小委員会〕	【看】☆三隅、田上、川上　【検】☆沢辺、戸塚、齋藤(良)、本間、副島
〔国試対策委員会〕	【看】☆深堀、矢郷
	【検】［模試担当］　☆新井、本間（試験当日は全分野の助教）
〔図書・広報委員〕	【看】☆内堀、廣山　【検】☆新井、長
〔学級担当委員〕	【看護】　【検査】
・４年生(２６回生)	田上、三隅　沢辺
・３年生(２７回生)	山﨑、川本　角
・２年生(２８回生)	近藤、内堀　赤澤
・１年生(２９回生)	田中、大河原　新井
〔試験監督調整委員〕	【看】森田　【検】馬渕
〔新入生校外ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ担当〕	【看】田中、大河原　【検】赤座
〔親睦会・会計〕	【看】☆佐々木(明)、大黒、湯本　【検】○伊藤、新井、馬淵
〔保健衛生学科ＦＤ実行委員会〕	【看】☆近藤、岡光、　【検】☆赤澤、鈴木
〔ＬＡＮ・ホームページ担当ＷＧ〕	【看】☆深堀、大河原　【検】長、本間
〔自己点検・評価小委員会〕	【看】☆田中、岡光、湯本、矢郷
	【検】☆窪田、沢辺、角、笹野
〔公開講座ＷＧ〕	【検】☆新井、角、笹野、長、赤座、馬渕　(当日は全分野の助教)
〔競争的資金獲得検討委員会〕	【看】☆本田、佐々木(明)、齋藤(や)、大久保、緒方、田上、佐々木(吉)、近藤、田中
〔生体検査科学セミナー〕	【検】☆伊藤、鈴木、加藤、赤座、馬淵
〔ｵｰﾌﾟﾝｷｬﾝﾊﾟｽ・受験生対策ＷＧ〕	【看】☆齋藤(や) 、山崎、美濃、三隅、川本(オープンキャンパス当日は全分野の助教)
	【検】☆角、沢辺、長、本間 、加藤、赤座、笹野、大川、須藤
〔看護部(医)保健衛生学科連携〕	【看】☆本田、大久保、田上、（山崎）
〔院内研究支援〕	【看】深堀、岡光、齋藤(や)、近藤、大黒
〔医歯学附属病院連携〕	【検】☆窪田、沢辺、戸塚、角、齋藤(良)、大川、副島、加藤
〔看護ｷｬﾘｱﾊﾟｽｳｪｲ教育研究センター〕	【看】☆緒方、○本田

☆責任者　○副責任者

Ⅵ．教育研修会，公開講座，セミナー等

体験型公開講座

平成 29 年度大学院保健衛生学研究科生体検査科学専攻主催の体験型公開講座「健康寿命を延ばす　健康チェック」が 10 月 27 日（土）午後 1 時から 5 時まで、3 号館 18 階保健衛生学科講義室及び 7・8 階検査学実習室で開催された。本講座は今年で第 18 回を迎えた。

例年、午前中に教員が身近で話題性のある講義を行い、午後に諸検査のオリエンテーションの後、学部生や臨床検査技師免許保有の大学院生が、1 グループを受け持って案内し、検査器具の操作にあたり、諸検査実習（約 10 項目）を行って健康チェックを行っていく形式をとっていたが、例年参加者が減少する傾向にあったため、今回は午後からの開催とした。なお、受講料は例年 6,200 円としていたが、今回は 5,200 円に減額した。受講者数は 46 名で、リピーターが殆どであった。

講義は、昨年実施後のアンケートで要望の多かった認知症をテーマに、在宅ケア看護学分野の本田彰子教授が「すべてのシニアに幸せを ～地域看護教育から得られたもの～ 」について講演した。また、文京区高齢者あんしん相談センター本富士分室認知症コーディネーター渋谷晴美氏を迎え、認知症サポーター養成研修を行った。その後、教員 4 名（笹野哲郎准教授、加藤優子、副島友莉恵、各助教、吉森真由美特任助教）と 10 名の学生、の協力を得て検査実習を行った。司会・進行と運営は先端血液検査学分野　新井文子准教授が行った。

多人数の受講者の参加にもかかわらず、医学部事務部総務係、総務部 総務秘書課 総務係、広報係の協力もあって、スムーズに講座を行うことができた。

公開講座は、生体検査科学専攻の社会貢献、地域貢献の一部と学生がコミュニケーションスキルや医学倫理を学習する教育を兼ねた行事となっている。患者さんの本学附属病院への受診増加にもつながっている。一般人に大学や我々の研究科、臨床検査技師をアピールし、信頼や親しみを持っていただく意義もある。来年度からは、全学の公開講座の一環として、講演会形式で開催を予定している。

Ⅶ. 就職状況一覧表（2017 年３月卒業・修了者）

就職状況一覧表

2018.5.1現在

（看護先進看護学・総合保健看護学）

区分			学部（看護学）		大学院 博士（前期）課程		大学院 博士課程 博士（後期）課程	
			小計	合計	小計	合計	小計	合計
進学	本学		0	5				0
	本学以外		5					
就職	看護師	本学	31	47			1	6
		本学以外	14				1	
	保健師							
	助産師							
	助教（大学機関）							
	助手（大学機関）							
	講師（大学機関）						3	
	その他		2				1	
その他（不明）								
合計				52				6

（生体検査学）

区分			学部（生体検査学）		大学院 博士（前期）課程		大学院 博士（後期）課程	
			小計	合計	小計	合計	小計	合計
進学	本学		18	19	2	2		0
	本学以外		1					
就職	臨床検査技師	本学		15		13	1	5
		本学以外	7		7		1	
	研究者	本学						
		本学以外					2	
	教員（高校）							
	その他		8		6		1	
その他（不明）				1				
合計				35		15		5

東京医科歯科大学大学院
保健衛生学研究科年報

２０１７年度

保健衛生学研究科教育委員

佐々木　明　子　委員長
戸　塚　　実
齋　藤　やよい
本　田　彰　子
窪　田　哲　朗
伊　藤　　南
佐々木　吉　子

発　　行　　２０１９年３月
編集・発行　　東京医科歯科大学大学院
保健衛生学研究科教育委員会
http://www.tmd.ac.jp/faculties/health-care/index.html